246
204

日本文典別記

新村出編

078579-000-7

246-204

日本文典別記

附. 国語綴字法別記

新村　出／編

M43. 6

DAC-2297

京都帝國大學
文科大學教授　文學士　新村出編

普通教育 日本文典別記

附國語綴字法別記

東京　開成館藏版

246-204

例言

この別記は普通教育日本文典及び普通教育國語綴字法の編纂につきて、わけて意を用ゐたる廉々をことわり、他の文典との所說の異同を辨じて編者の意見を明にし併せて遺ちたるを拾ひ、略敍したるを詳說せるものにて、かの書を教授する人々の參考にもとて、こゝに刊行するなり。

世に行はるゝ國語文法教科書は三つ六つもあるべし、いづれもとりく〳〵に長所はあり、わが文典及び綴字法この間に出でて敢へて異を立てんとするにはあらず、もと國語法は今なほ學者の間に盛に研究せられて、解決未了の問題少からず、中には專門學の上より見て疑義なきことながら、普通教育上の說明の方法には異論あるものもあり、また學說の上よりいへば、懸案に屬することとても、教材としては語法上の約束を設けずはあるべからざるものもなきにあらず、國語文法は普通教育にて最も教授の效果の擧らざる學科なりと聞けば、これが改善の餘地もなくてやはとて思ひ立ちたるは、かの書の編纂なり、さればかの書に說けるは普通教育に施すべき國語法にて、說明の方法、教材の選擇など、すべて專門學としての沙汰にはあらず、この別記

明治
43. 6. 17
[illegible]

の立言また固より多くその範圍を出づべきにあらねば、看ん人その心してあるべし。

この類の教科に例題の重んずべきは、言はてものことなり。わが文典及び綴字法が特にその選擇に意を用ゐたることは、かの書の例言に述べたり。編者はかの書に載せたる例題の外に、なほ若干の補充を要する場合の絶えてなきにあらざるを思ひ、教授者をして編者が嘗て遭遇したると同樣なる困難の幾分を免れしめんがために、別に適切なる類題若干を撰して、章毎に載せおきたり。

明治四十三年五月

目次

一　普通教育　日本文典別記

一　普通教育　國語綴字法別記

附錄

教科書ノ檢定又ハ編纂ニ關シ文法上許容スベキ事項

普通教育 日本文典別記

文學士 新村出編

上卷

總說

本書ノ節ノ數

一 言語、文字、文章。言語、文字、文章ノコトハ、本書(『普通教育日本文典』ヲイフ、以下同ジ)ニ說キタルニテ十分ナリ。初學者ニハ深ク立入リテ敎フルニ及バズ。

二 國語。日本語、支那語、英語、どいつ語、ふらんす語ナド、一々例ヲ擧ゲテ示サズトモ、ヨカルベシ。文字ニハ假名ト漢字トろーま字トノアルコトハ、生徒ヲシテ一々例ヲ擧ゲシムベシ。既ニ初年ニ假名ト漢字トノコトヲ學ビタルモノニハ、コヽニテ委シク說クニ及バザレド、復習トシテ五十音圖ヲ塗板ニ書カシメ、某ノ行、某ノ列ハイカニナドノ問ヲ出シテ、既得ノ知識ヲ確實ニスルハ、後ニ動詞ノ活用ナドヲ說クヲリノ準備トナリテ、利益多カルベシ。

國語トイヘバ、汎ク一國ノ言語トイフコトナレド、ワガ國語トイフベキヲ略シテ、單ニ國語トイフコトアリ。コノ場合ニハ卽チ日本語ノコトナルヲ知ラシメオクベシ。

口語、文語。 コノ節ニ說キタルハ、國語ニ口語ト文語トノ別アルコトナリ。コニ擧ゲタル例ハ、ソノ差別ノアルコトヲ示スマデノモノナレバ、コノ差別ヲ委シク說明スルニハ及バズ。

文法。 中等學校ノ生徒ニハ、國語文法ヲ輕ク視テ、サマデ必要ナル學科ナリト思ハザルモノ多キヤウナリ。コレ、一ツハコノ學科ノ敎授法ノ宜シキヲ得ヌニモヨルベケレド始メテ文法ヲ授クルニ當リテ、ソノ必要ナル學科ナルコトヲ反復丁寧ニ說明セザルモ、一ツノ缺點ナリ。モトヨリ日本人ト生マレツキタルカラニハ、文法ヲ學バザレバ、日本語ニテ思想ヲ通ズルコト能ハズトイフホドノコトハナケレド、文法ノ知識ナキモノハ、正シクオノレノ思想ヲ述ブルコトヲ得ザル場合多シ。コレ國語敎育ノ不十分ナルモノ及ビ外國人ナドノ言語、文章ニ屢見ルコトニテ、カノ判じなければ分らぬトイフハ、卽チコレナリ。コノ事、ヨク心得シムベキナリ。

第一章　單語

單語。 コヽニ單語トイフハ、熟語ニ對シタルモノニアラズ。熟語モ一ツ一ツノ意味ヲアラハスモノナレバ、同ジク單語ナリ。タヾ構成ノ上ヨリ熟語トイフ。コノコト、ナホ後章ニ說キタリ。

單語の種類。 單語ヲ九ツノ種類ニ分ケタル上ヨリ見テ、ソノ一ツ一ツノ種類ノ名ヲ品詞トハイフナリ。サレバ犬トイフハ一ツノ單語ニテ、名詞トイフ品詞ニ屬ストスルナリ。マタ國語ハ九ツノ品詞ニテ成レリトハイフベケレド、九ツノ單語ニテ成レリトハ、イフベカラズ。コノ單語ト品詞トノ名目ノ違ヒ方、分リ易キヤウニテ、實ハ混同シ易シ。ヨクコレヲ心得ベシ。

品詞ハ形ノ上ヨリモ分テルモノナルコトニ注意スベシ。單ニ意味ノ上ヨリトスレバ、動詞ト形容詞トノ差別モ、助詞ト接續詞感動詞トノ差別モ立チ難キコトアリ。例ヘバ意味ヨリイヘバ、富む、老ゆナドハコレニ對スル貧し、わかしナドノ語ト共ニ、形容詞ニ屬セシムベク(本書第五三節參照)、花と蟲とノトハ接續詞ニ、大いなるかなノかなハ感動詞ニ屬セシムベキガ如シ。

第二章　名詞

英語ソノ他、外國語ノ文典ニ、名詞ニ普通名詞ト固有名詞トノ別アルヲ說クヨリ、國語ノ文典ニモ、コノ名目ヲ立テタルアリ。今、中學校ナドノ英語文法ニテ授クル固有名詞（Proper Nouns）トイフモノヲ見ルニ、コハ別々ノ人マタハ事物モシクハ別々ノ一團ノ人マタハ事物ニ限ラルヽ名（"Names that are confined to separate persons or things, or groups of persons or things."）ニテ、ソノ固有トイフハ、ソノモノノ所有セルノ義ナリ。（"A proper name is a person's or a thing's own name."）而シテコレニ對シテ數多ノ事物ニ通ジテ用ヰラルヽ名ヲバ普通名詞（Common Nouns）トイフナリ。コノ定義ハ、ソノマヽ移シテ國語ニ用ヰテ、固有名詞ト普通名詞トノ別ヲ立テバ、立テラルベシ。サレド、國語文法ニテハ、名詞ニカヤウノ分類ヲ設クルコト、畢竟、無用ノ業ニテ、單ニ名目ヲ教フルニ止ルモノナレバ、本書ニハ採ラズ。但シ、既ニ英語ニテコレラノ名目ヲ知リタルモノニハ、本書第七節ニ擧ゲタル例ノウチヨリ、イヅレガ普通名詞ニテ、イヅレガ固有名詞ナルカヲ答ヘシムルコトモ可ナラン。第一ノ文章ノウチ

ナル名詞、卽チ東郷大將、ロシア、日本海ハ皆固有名詞ニテ、ソノ他ハスベテ普通名詞ナリ。サリナガラ國語文法ノ正課トシテコノ分類ヲ敎フルコトハ、避クベシ。

表數名詞。　世ノ文典ニ數詞トイフモノナレド、本書ハ、ソノ名詞ノ一種ニテ數ヲ表スモノナルコトヲ示サンガタメニ、特ニコノ名ヲ選べリ。名詞ヲ普通名詞、固有名詞ト分クレバ、表數名詞ハ普通名詞ノウチノモノナリ。

表數名詞と名詞との複合。　コニイヘリ。コノ場合ノ人ハ所謂接尾辭ナリ。三たりトイフ意ノ三人ハ表數名詞ナルコト、コレニ準ジテ知ルベシ。

り、一つ、二つナドノつナドモ皆同ジク接尾辭ニテ、後ニ擧ゲタル一冊、二本、三頭、數羽、幾百輛ナドノ冊、本、頭、羽、輛ナドモマタコレナリ。コレニ對シテ一斤、二里、三傑、數日、幾百回ナドノ斤、里、傑、日、回ナドハ、本書ニ說キタルガ如ク、通常ノ名詞ナルコトヲ見ルベシ。

第二ナドノ表數名詞ノ第ナドハ、所謂接頭辭ナリ。

熟語モ一ツノ單語ナルコト、前ニイヘリ。コヽノ一斤二里ナドハ一ツノ單語ニテ、ソノ構成ヲイヘバ、共ニ二ツノ單語ノ複合シテ成レル熟語ナリ。

〔例題〕

次ノ文章ノウチニテ縦線ヲ引キタルモノハ、名詞ニテ、ソノ表數名詞ナルハ特ニコレヲ注セリ。

一。郵便切手二枚(數)と靴足袋一足(數)と林檎三個(數)とを買つて、金五拾錢を拂つた。

二。華麗、優美、雄大の三つ(數)を兼ね備へた風景は、實に富士山である。

三。學問の要は活用にあり。

四。健康はなことに貴い寶である。

五。黄金の鎌の如き三日月は高く鋭く光を放てり。

六。大阪はわが國第一(數)の商業地にして、鐵道四方に通じ、運河縦横に開けたり。

七。明治三十七八年戰役に、大山元帥はクロパトキンの率ゐたる大軍を大いに奉天に破れり。

類題

次の文章のうちより名詞をぬき出し、表數名詞なるは特にこれをいへ。

【一】四方遙にうち晴れ、薩、隅、日の三州、一望の中に入る。

【二】左右皆谷にて、劒の刃の上を行くが如し。

【三】絶頂には、たゞこの鉾一本のみにて、外に堂宇の如きものも見えず。

【四】一聲の汽笛と共に、機關車は、その全速力を以て進みぬ。

【五】第一の問は易かりしかど、第二と第三との問に受驗者の三分の一は落第せり。

【六】學校にては、生徒の成績を甲、乙、丙、丁の四等に分ちて評定す。

【七】今日は本校の第八次の創立記念日なり。

【八】應募者は極めて多く、豫定數の三倍を超えたり。

第三章　代名詞

代名詞ヲモ、マタ西洋文法ニ倣ヒテ種々ニ分類スルコトアリ。ソノ人ニノミ用ヰルモノヲ人代名詞トシ、事物ニ用キルモノヲ指示代名詞トスルコト、稍世ニ行ハル。（指示代名詞ハ、人代名詞ニ對シテハ、事物代名詞トイフベキガ如シ。コレラノ名目ハ、西洋文法ノ譯語ニ拘リタルモノナリ）。

マタ、代名詞ニ稱トイフモノヲ立テテ、人代名詞ニハ第一人稱第二人稱第三人稱、不定稱(或ハ自稱、對稱、他稱、不定稱)ヲ別チ、指示代名詞ニハ近稱、中稱、遠稱、不定稱ニ屬スル人代名詞及ビ指示代名詞ヲ一括シテ、別ニ疑問代名詞ヲ立ツルモアリ。

以上、代名詞ニツキテノ分類ハ、國語ノ法格ニ關スルモノナキガ故ニ、普通教育ノ文法科ニテハ、事々シク授クルノ必要ナキモノナリ。サレバ本書ニハ一切コレヲ說カズ。單ニ人代名詞、第一人稱ナドノ名目ノ意味ヲ知ラシメントノタメナラバ、コレラハ英語文法ニテ說クト同ジキモノナレバ、ソノマヽノモノト心得テ事足ルベシ。

〔例　題〕

次ノ文章ノウチニテ縱線ヲ引キタルモノハ、代名詞ナリ。

一。お前はあちらへ行つて遊べ。

二。小生もかねてより貴兄の御高名承り居り候。

三。これ誰れの罪ぞや。

四。山邊を見るに、櫻はこゝかしこに咲き亂れたり。

第三章　音の變轉

コノ章ニ說クハ、音ノ變轉ノ中ニテ、最モ類例ノ多ク、且通常、言語ヲ綴ルニ必要ナル事項ノミナリ。

連濁。本書ニ說キタルモノノ他ニ、連濁トイフ名ノ下ニハ收メ難ケレド、

つき(突)はる(張)　つつばる、　りふ(立)は(派)　りつば、

にち(日)ほん(本)　につぽん

ナドハ行音ガ行音ニ變ズルコトモアリ。

〔例　題〕

一。雛形　ヒナガタ、ひながた。　品品　シナジナ、しなじな。

葭簀　ヨシズ、よしず。　鼻血　ハナヂ、はなぢ。

三日月　ミカヅキ、みかづき。

コノ題ハ連濁ヲ知ラシメンガタメニ、下ノ假名ガじ、ぢ、ず、づトナル場合ニテ、コノ相紛ルヽ假名ヲ連濁ノ知識ニヨリテ遣ヒ分ケシムベシ。

二。書いて。　請うて。　強うす。　謎んて。　知つて。

三。つゞいて(「つゞきて」ノ い音便)。　續いて(「續きて」ノ い音便)。
久しうす(「久しくす」ノ う音便)。　爭うて(「爭ひて」ノ う音便)。
呼んで(「呼びて」ノ ん音便)。

四。「ツイタテ」ハ「つきたて」ノ い音便、「ヤイバ」ハ「やきば」ノ い音便、「オトウト」ハ「おとひと」ノ う音便、「アキンド」ハ「あきひと」ノ ん音便及ビ連濁、「キツテ」ハ「きりて」ノ促音便ナリ。

五。「カンザシ」ハ「かみさし」ノ ん音便及ビ連濁ナリ。「かみかき」ノ「かみ」ハ「音便ニテ「カウ」トナリ、「かき」ハ い音便ニテ「かい」トナリ、コノ「かい」ハ連濁ニヨリテ「がい」トナル。サレバ「カウガイ」ト書クベキナリ。

類題

【一】次の漢字の讀方を片假名と平假名とにて書け。

荷車。　山櫻。　小島。　討死。　垢染む。　物好き。
堅炭。　手近。　日附。　常常。　横綱。　湯殿。
人質。　信心。　酢漬。

【二】次の語を音便によりて書きかへよ。

聞きて。　沿ひて。　厚くす。　飲みて。　切りて。
騒ぎて。　買ひて。　辱くす。　進みて。　賣りたる。

コノウチノ「買ひて」ハ地方ニヨリテ「買うて」ト「買つて」トノヤウニ音便ヲ異ニスルコトヲ注意スベシ。

【三】次の語の書きあやまりを正せ。

急ひて。　開ゐて。　強ふす。　思ふて。　勇むて。

【四】假名にて「埼玉」を「サイタマ」、「前(月立)」を「ツイタチ」、「妹」を「イモウト」、「簪(ハヽキ)」ヲ「ハウキ」と書くは何故か。

【五】「神戸」を「カンベ」または「コウベ」といふは何故か。またこれを「コウベ」といふときの假名は何と書くべきか。「上野(カミツケ)」を「コウズケ」といふは何故かこのときの假名は、いかに書くべきか。

第四章　國語假名遣

一　い ゐ ひ

〔例　題〕

一。ゐなかに歸つてゐた友からいま手紙がとゞいた。

二。あたひはやすくないが、品がよろしい。

三。假名を用ゐて、かひとかいとを書きわけよ。

四。東鄕大將は聯合艦隊を率ゐて大いにロシアの海軍を破り、敵國をしてたゝかひを思ひ止らせたり。

五。長いきしたるかひありて、ありがたき御代にあひたりと、老いたる人はちひさき兒らにいひたり。

類　題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】池の中に螳螂が泳いでゐる。

【二】蟹の乞食は乾の方へ立ち去りたり。

【三】今井と石橋と三人て、いつか伊勢にまいつたことがある。

【四】從弟は願かないて、勇ましく世界の旅に出て立ちたり。

【五】兩船相近よりて、その間一町ばかりとなれり。

二　う ふ

〔例　題〕

一。父に請うて東京に上らうと思ふ。

二。「さうらふ」は「さぶらふ」の音便、「まうす」は「まをす」の音便なり。

三。同情厚うして、飢うるものには食を與へたり。

四。いろ〳〵のくさばなの美しう咲いたるそのふのまんなかに、一本の月桂樹を植う。（「草花」ハ連濁ヲ知ラシメンガタメ、「眞中」ハンノ用方ヲ試ミンガタメニ、出セルナリ）。

類　題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】「角力」は「すまひ」の音便、「向」は「むかひ」の音便なり。

【二】蟻は爭ふて蜜を吸う。

三　ゑ　ゐ　へ

〔例　題〕

一。いへのまへの梅のこずゑにうぐひすが來て鳴いてゐる。
二。ゆふかたかへると、一封の手紙がつくゑのうへに載せてあつた
三。傘をつゑについて、いけのほとりにいこへる旅人あり。
四。劇しき突撃に堪へかねて、敵軍つひにつひえ走れり。
五。産物殖え、事業興りて、國富み榮え、もとゐ固くなれり。
六。そろひのあゐのてぬぐひ、くれなゐの襷、あちこちに見えて、のどかなるたうゑのうたごゑ絶えく〳〵に聞え渡れり。

〔類　題〕

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】火が消へたのか、煙が見ゑなくなつた。
【二】樹の植替には、枝を切りこむ。
【三】かれは何故にか行くゑを告げず、立ち出てたり。
【四】この川は村の中央を東へ流れて、末は海に入る。

四　お　を　ほ

をの假名を用ゐる語。　をノ假名ヲ用キル語ニテ、アマリ多ク用キヌモノト認メテ本書ニ載セザルモノノウチニ、左ノ數語アリ。

(一)首にをと書くべきもの。
▲をかづき(砲臭)。　▲をしかは(童)。
(二)中にをと書くべきもの。
▲たをやかに。
(三)尾にをと書くべきもの。
▲やもを(鰥夫)。

〔例　題〕

一。をとつひ、をばはをひをつれて宮にまゐつた。
二。なほをり〳〵お手紙下されたく候。
三。子の行くすゑのさかえをおもふおやごゝろほど、嬉しきはなし。
四。たらひの中のうをはたひとこひとかつをとえびとなり。
五。をしはをとめとつがひ離れずおよぎをり。

六。友は別ををしみてとほくおくり來れり。
七。あをき衣著たるとをあまりのをとめ、おもしろくをどる。
八。おいたる人はやをら立ち上りて、路ををしへたり。
九。おほきなる方のをとこはあをむけにたふれたり。
一〇。德ををさめて、世の鑑とあふがるゝ人となれ。

類題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】帶の表には葵の模樣があつた。
【二】時候がおひ〳〵暖くなつて、町を通る人が多くなつた。
【三】おりしも風起りしかば、火は忽ち四方へ燃へ廣がれり。
【四】敵軍の勢遂に衰へ、かなたの岡を越へて退却せり。
【五】女は操の正しきを貴しとす。
【六】今はおとなになりたれど、幼顏に見をぼへあり。
【七】機織る筬の音おちこちに聞えて、田舍の春はのどかなり。
【八】この兒幼けれど、をゝしければ、名ある壯士となりて功を立つべし。

テモヨキモノナレド、語根ト語尾トノ區別ハ、コレヲ汎ク用ヰガタキ場合アリ。得、經ナドノ一音ノ動詞、著る、蹴るナドノ一段活用ノ動詞、來、爲ナドノ動詞ニテハ、イヅレヲ語根トシ、イヅレヲ語尾トスベキカ。初學者ハ惑ヒ易シ。形容詞ノ活用ヲ說クニモ、く活用、しく活用ヲ別ツ上ニテハ、語根、語尾ノ區別ハ、特別ノ說明ヲ要スベク、スベテ普通敎育ノ程度ニハ用ナキモノナリ。

動詞ガスベテ五十音圖ノ同行ニ活用スルコトハ、初學者ニ牢記セシムベシ。本書ニ後ニ動詞ト形容詞トノ別ヲ立ツルニモ、專ラコノ點ニヨル。マタ動詞ノ假名遣ヲ授クルニモ、コノコトハ、ソノ根本知識トナルモノナリ。

動詞の活用の類別。 本書ニ記セル九類ノ活用ノ名目ハ、舊來世ニ行ハレタルモノニ從ヘリ。四段活用ヲ先ニシタルハ、コノ活用ニ屬スル動詞ガ最モ多キニヨルナリ。ソノ良行變格活用、奈行變格活用ヲ直ニ四段活用ニ續ケタルハ、口語ノ活用ノ相同ジキト、文語ニテモ四段活用ノ如ク用ヰラルヽコトアルトニヨル。

章末ノ表ニ、動詞ノ活用ノ類別ノ數ヲ口語ニテハ五類トイヘルハ、四段活用、上一段活用、下一段活用、左行變格活用、加行變格活用ヲ數ヘタルナリ。

第八章　動詞の活用その二

三　**良行變格活用。**　良行變格活用ト四段活用トノ差別ハ、動詞ノ活用形ヲ說キタル後ナラデハ、本書ノ如ク說クヨリ外ニ、セン方ナカルベシ。　ナホ、本書ノ例ニヨリテ、四段活用ニテハ、言ヒサシテオクト言ヒキルトニテ知りト知るトヲ用キ分クレド、良行變格活用ニテハ、カヤウノ差別ナク、通ジテありトイフ語形ヲ用キルトイフ點ヲモ併セ擧ゲテモ、妨ナシ。

四　居りガ今ハ四段活用トシテ用キラルヽコトハ、文部省ノ許容ニヨルナリ。ソノ『文法上許容スベキ事項』ノ全文ハ、コノ別記ノ卷末ニ轉載セリ。就キテ看ルベシ。　本書本文ニ『許容』ニ言ヒ及サザルハ、普通敎育ニテハ、徒ニ混亂ヲ生ゼンコトヲ慮リテナリ。初學者ニハ、許容云々ヲ說カズ、カウモ用キルトシテ記憶セシムル方、敎育上ニ利アリ。

七　**四段活用の動詞の見分け方。**　動詞ノ活用ノ見分ケ方ハ、本書ニ說ケルモノ外ニ、連體形ヲ造リ試ルコトモアレド、コレニテハ上二段活用ト下二段活用トノ差別、困難ニテ、ソノ連體形ノ造リ方モ、誤リ易キ弊アリ。

〔例題〕

一。書く。　か　き　く　け
騷ぐ。　さわ　が　ぎ　ぐ　げ
貸す。　か　さ　し　す　せ
返す。　かへ　さ　し　す　せ
勝つ。　か　た　ち　つ　て
持つ。　も　た　ち　つ　て
いふ。　い　は　ひ　ふ　へ
飛ぶ。　と　ば　び　ぶ　べ
讀む。　よ　ま　み　む　め
富む。　と　ま　み　む　め
賣る。　う　ら　り　る　れ
取る。　と　ら　り　る　れ

右ハ、イヅレモ、本書所載ノ例ニ倣ヒテ、列ヲ正シテ記スベキナリ。

二。動く。示す。待つ。思ふ。　拒む。（散る、咲く、寫す、打つ、請ふ、謹むナド）

第九章　動詞の活用その三

用ゐるトイフ動詞ノ活用ニハ、從來異説アリ。本書ハソノわ行上一段活用ヲ採レリ。コレヲは行上二段活用トスル説モ、マタ行ハル。

〔例題〕

一。射る。　い　いる　いれ
居る。　ゐ　ゐる　ゐれ
用ゐる。　もちゐ　もちゐる　もちゐれ
似る。　に　にる　にれ
見る。　み　みる　みれ

二。生く。　い　き　く　くる　くれ
落つ。　お　ち　つ　つる　つれ
延ぶ。　の　び　ぶ　ぶる　ぶれ
過ぐ。　す　ぎ　ぐ　ぐる　ぐれ
恥づ。　は　ぢ　づ　づる　づれ
老ゆ。　お　い　ゆ　ゆる　ゆれ

懲る。　こ　り　る　るる　るれ

三。生きる。　いき　いきる　いきれ
過ぎる。　すぎ　すぎる　すぎれ
恥ぢる。　はぢ　はぢる　はぢれ
延びる。　のび　のびる　のびれ
懲りる。　こり　こりる　こりれ
老いる。　おい　おいる　おいれ

（口語ニテハ老いるトイフ語ヲ用ヰズ。コヽニハ語形ヲ示スマデナリ）。

四。喜ぶ　四段。　煮る　上一段。　朽つ　上二段。　落ちる。　おち　おちる　おちれ
悔ゆ　上二段。　報ゆ　上二段。　待つ　四段。

第十章　動詞の活用その四

〔例題〕

一。得。　え　う　うる　うれ
助く。　たす　く　くる　くれ
受け　う　け　ける　けれ

告ぐ。つ　〃ぐ　〃ぐる　〃ぐれ
捨つ。す　〃つ　〃つる　〃つれ
棄ぬ。か、　〃ぬ　〃ぬる　〃ぬれ
改む。あらた　〃む　〃むる　〃むれ
隠る。かく　〃る　〃るゝ　〃るれ

コノウチニテ、植ラガワ行下二段活用ナルコトニ注意スルヲ要ス。

二。
得る。え　〃える　〃えれ
載せる。の　〃のせる　〃のせれ
助ける。たすけ　〃たすける　〃たすけれ
捨てる。す　〃すてる　〃すてれ

三。
避く。痩す。當つ。跳ぬ。數ふ。（定む、越ゆ、暮る、飢う、迎ふ、治むナド）。

四。
召す四段。笑ふ四段。
下る上二段。枯る下二段。
任す下二段。悔ゆ上二段。覺ゆ下二段。

第十一章　動詞の活用その五

熟語の左行變格活用の動詞。　議す、製造すノ議、製造ナドハ、本來支那語ナルガ名詞トシテ國語ニ用キラレ、更ニコノ名詞ガ左行變格活用ノ動詞トナレルナリ。ソノ他ノ外國語モ、皆カヤウノ順序ヲ經テ國語ノ動詞トシテ用キルコトヲ得ベシ。例ヘバ「トランスレート（translate 譯）する」ナドノ如シ。マタ外國語ナラヌ種々ノ語モ、同樣ニシテ動詞トナスコトヲ得ベシ。「ぐら〳〵する」「ぱた〳〵する」ナド、コレナリ。

乘ねる。かね　〃かねる　〃かねれ
消える。きえ　〃きえる　〃きえれ
答へる。こたへ　〃こたへる　〃こたへれ
隠れる。かくれ　〃かくれる　〃かくれゝ
改める。あらため　〃あらためる　〃あらためれ
植える。うゑ　〃うゑる　〃うゑれ
悔ゆ上二段。覺ゆ下二段。

〔例題〕

一。流す。なが｜さ｜し｜す｜せ
流る。なが｜る｜るゝ｜れ｜るれ

問ふ。と｜は｜ひ｜ふ｜へ
與ふ。あた｜ふ｜ふる｜ふれ

閉づ。と｜づ｜づる｜づれ

輕んず。かろん｜じ｜ず｜ずる｜ずれ｜ぜ

二。求め下二段。遁げ下二段。し左變。吟ずる左變。あり良變。
三。加へ下二段。なれ四段。
四。居上二段。諳んじ左變。吟ずる左變。あり良變。
五。過ぐる上二段。送る四段。來る四段。迎ふる下二段。似上一段。

六。吠え下二段。飛びつき四段。まつはり四段。舐り四段。嘗め下二段。する左變。
七。碎か四段。破れ下二段。挫か四段。折れ下二段。

類題

次の動詞の活用を記せ。

【一】記す。考ふ。察す。寄す。論ず。報ゆ。奔走す。始む。

次の文章のうちより動詞をぬき出し、その何活用のものなるかをいへ。

【二】往來全く絶え、月は頭上に來りぬ。
【三】電車は鐵路を馳せて、この群集中を頻繁に來往す。
【四】朝起き出でて、手洗ひ、口嗽ぎ、鏡に對ひて、容儀を整ふ。
【五】食堂は第三層の中にあり、湯殿、化粧室これに添ふ。
【六】これを販賣せんとするものは、免許料を納めて、組合に加盟す。
【七】東京は霜府の地となりてより三百年の星霜を經たり。
【八】あき吹く風のばせを葉にふたこゑ三こゑおとづれて、まどより西に月影のかたぶく見るこそ、あはれなれ。

第十二章　動詞の活用その六

四一　**動詞の假名遣。**國語ノ假名遣ノウチニテ、最モ用ノ廣キモノハ、用言ノ假名遣ナリ。コレ用言ハソノ語形ノ變化スル部分ヲ寫スニ假名ヲ用キルヲ要スルガ故ナリ。コノ假名所謂送假名ハ、形容詞ニテハ誤ルコトナケレド、動詞ニテハ紛ルヽ場合少カラズ。コレヲヨク辨ヘントスルニハ、動詞ノ活用ヲ知ラザルベカラズ。既ニ國語假名遣ヲ一トヲタリ學ビタルモノニモ、動詞ノ活用ニヨリテ得タル知識ニヨリテ、コレヲ整理シ、系統ヲ立テテ綜合概括セシムルヲ要ス。コレ本書ニ特ニコノ一章ヲ置キタル所以ナリ。

四二　**動詞の假名遣の通則。**本書ニ掲ゲタル相紛ルヽ假名ノ第一表ハ轉呼セラレテ相紛ルヽモノヲ擧グ。初行ニいう、えトアルハ、動ル得ナドノあ行ノ上一段下二段活用ノ動詞ニツキテイヘルニテ、第三行ニいゆ、えトアルハ老ゆ、肥ゆナドノや行ノ上二段下二段活用ノ動詞ニツキテイヘルナリ。第二表ハ相似テ紛ルヽモノヲ擧グ。以上ノ二表ニわ、じヲ圍ミタルハ、コノ假名ヲ用キル活用ノ語ナキコトヲ表セルナリ（掘ずハ用例稀ナルガ故ニ、除キタリ）。

〔例題〕

一。逐う四段。　増加す左變。

二。仰い四段。　誓つ四段。　揚げ下二段。　立て下二段。

三。勇み立つ四段。　喜ん四段。　なし四段。

四。添へ下二段。　贈つ四段。

五。迫つ四段。　あつ良變。　聞い四段。　頼ん四段。

六。教え（は行下二段教へノ誤）。　就い。　學ぶ。　絶へ（や行下二段絶えノ誤）。

七。楽しむ（ま行四段楽しみノん音便楽しんノ誤）。　はたらく。　感ずる。

八。堪え（は行下二段堪へノ誤）。　開へる（や行下一段開えるノ誤）。

九。行つ。　聞へる（や行下一段聞えるノ誤）。　起る（や行下二段起えノ誤）。　達し。　思わ（は行四段思はノ誤）。　大呼す。

一〇。つとうる（は行下二段つたふるノ誤）。　とのふる（は行下二段となふるノ誤）。　あり。

一一。とゝなふる（は行下二段とゝのふるノ誤）。　先だち。　おさゝ（は行四段

おそひノう音便おそうノ誤。破る。

【二】掩ふ（は行四段掩ひノう音便掩うノ誤）。逃げ延び。鳴る。光る。降る。吹く。思う（は行四段思ふノ誤）。

類題

次の文章のうちより動詞をぬき出し、その何活用のものなるかをいへ。

【一】三日つゞいた雨が、けさからやんだ。

【二】柴を負うた女が、歌をうたひながら、こちらへ来る。

【三】一度會つて話をしようと思うたことがあつた。

【四】先生の著作が出ると、人々が先を爭うて、讀んだ。

次の文章のうちより動詞をぬき出し、その假名遣の誤れるものは正せ。

【五】義士傳を讀むで、諸士の忠烈に感じ、屢巻を掩ふて泣ひた。

【六】秋高く、馬肥へ、武を用ゆるによろし。

【七】その德義を重んづること、常の人に超へたり。

【八】敵國、和を請い、地を割き、金をつぐのへり。

【九】今日は鎭守の祭と見えて、はれ著きたる人の行きこふ狀、織るが如し。

第十三章　形容詞の活用

形容詞の活用の狀。本書ハ形容詞ノ活用ヲ一類トセリ。世ノ文典ニハコレヲ二類ニ分チ、善しノ如ク、語形ノ變化スル部分ガ=き、=く、=けれ、=しソノマヽナルモノヲ活用ト名ヅケ、惡しノ如ク、語形ノ變化スル部分ガ=き、=く、=けれ、=しソノマヽテ=しヲ缺ケルモノヲしく活用ト名ヅクルモノアリ。ソノしく活用トイフハ、惡しナドニテハ、惡しノあヲ變化セヌ部分トスレバ、變化スル部分ガ善しニ比べ=しく、=しけれ、=し（順序ヲ改ムレバ、=しく、=し、=しき、=しけれトナル）トナルベケレバナリ。コノ兩說、イヅレモ據ルトコロアリ。本書ハ簡易ヲ尙ビテ、コレヲ一類トスル說ヲ採レリ。

コヽニ美し、樂しナドノ如ク、ソノマヽ下さニ續キテ名詞ヲ成スモノトイヘルハ、卽チ惡しノ類ノ活用ヲナスモノニテ、所謂しく活用ナリ。マタ高し、廣しナドノ如ク、しヲ捨テテ下さニ續キテ名詞ヲ成スモノトイヘルハ卽チ善しノ類ノ活用ヲナスモノニテ、所謂く活用ナリ。本書ノ所說ニ從ヘバ、惡しノ類ニテハ、惡ししトイフベキヲ惡しトイフガ、普通ナルコトニ注意スベシ。

〔例題〕

一。涼く。　涼し。
二。大きい。　面白い。
三。なく。　御恥づかしい。
四。小き。　冷き。
五。うすく。　淡く。
六。寒けれ。　暑けれ。
七。遠き。　なき。

きよ　＝き　＝く　＝けれ　＝し
すゞし　＝き　＝く　＝けれ　＝し
おほき　＝い　＝く　＝けれ
おもしろ　＝い　＝く　＝けれ
な　＝き　＝く　＝けれ　＝し
おはづかし　＝い　＝く　＝けれ
ちひさ　＝き　＝く　＝けれ　＝し
つめた　＝き　＝く　＝けれ　＝し
うす　＝き　＝く　＝けれ　＝し
あは　＝き　＝く　＝けれ　＝し
さむ　＝き　＝く　＝けれ　＝し
あつ　＝き　＝く　＝けれ　＝し
とほ　＝き　＝く　＝けれ　＝し
な　＝き　＝く　＝けれ　＝し

ちか　＝き　＝く　＝けれ　＝し
おほ　＝き　＝く　＝けれ　＝し
すくな　＝き　＝く　＝けれ　＝し
ひく　＝き　＝く　＝けれ　＝し
わか　＝き　＝く　＝けれ　＝し
まづし　＝き　＝く　＝けれ　＝し
うつくし　＝き　＝く　＝けれ　＝し
たのし　＝き　＝く　＝けれ　＝し
な　＝き　＝く　＝けれ　＝し
あか　＝き　＝く　＝けれ　＝し
しろ　＝き　＝く　＝けれ　＝し
くろ　＝き　＝く　＝けれ　＝し

八。近き。　多く。　少き。　低し。
九。わかき。　貧しき。　美しき。　楽しき。　なし。
一〇。赤き。　白き。　黒き。

コノ題ノ黄トイフ語ガ形容詞ニアラズシテ、名詞ナルコトニ、ヨクヨク注意スベシ。専ラ意味ニヨリテ單語ヲ分類セバ、赤し、白し、黒し、ト黄トハ何ノ撰ブトコロモナク、皆形容詞トイフ一ツ品詞ニ屬セン。

類題

次の文章のうちより形容詞をぬき出して、その活用を記せ。

【一】善悪の辨なき獣を殺さんはむごし。

【二】日中は暑さきびしけれど、朝夕は凌ぎ易し。

【三】雨風烈しきが上に、道暗くして、前進甚だ難し。

【四】室の大いさ、廣きは五十疊、狭きも二十疊を敷くべし。

【五】けはしき坂を越ゆれば、麓に寂しき村あり。

第十四章　助動詞

ごとしトイフ助動詞モ、他ノ助動詞ト異ナリ、直ニ動詞ノ下ニックト外ニ、動詞及ビ名詞代名詞ヲ承ケタルノガナドノ助詞ノ下ニモ續ク。

行くごとし。　行くがごとし。

このごとし。　花のごとし。

コノごとしハ甚ダ他ノ助動詞ト異ナリ。サレバコレヲ等し、同じナドト同ジク、形容詞ト見ル人アリ。但シ通常ノ形容詞ノ如クニ語ノ上ニ用キラレズ。

〔例題〕

次ノ文章ノウチニテ縦線ヲ引キタルハ、助動詞ナリ。

一。余がこの地に遊びしは、六月の下旬なり。

二。麥程眞田の編方は西洋より傳へたるものなり。

三。奇樹異草、名も知らず、目なれぬもの、いと多し。

四。農民は豪族に苦役せられ、苛政に泣くに至りたり。

五。先生にいひつけられた文章を作らう。

六。僕も請待されたが、行かれなかつた。

七。父はわれをして伯父のもとを訪はしめき。

八。夕立至るべけれど、程なくはれん。

九。公は領内の山々には杉苗を植えさせ、また始めて紙をすかせられたり。

一〇。われらはわが校の生徒たる名を辱めざるやう勉めざるべからず。

類題

次の文章のうちより助動詞をぬき出せ。

【一】人は萬物の長ならずや。
【二】わが乘れる船は六層より成れり。
【三】生きながら城を敵に渡さんこと、武士の本意にあらず。
【四】經傳を讀めば、まのあたり、聖賢の敎を聞くがごときこゝちせらる。
【五】夜いたく更けぬれど、終に座を起ちしこともなし。
【六】課いまだ滿たざるに、日暮れんとすること度々なり。
【七】しばし、程經ぬれば、またも睡くなりぬ。
【八】御側を離し給はねば、學に入れ、師に從はしめんことも、協ふべからず。

第十五章　助動詞の活用

本書ニハ普通ニ用キラルヽ助動詞ノミヲ擧ゲタレバ、用ノ狹キモノヽマヽ古キモノハ洩レタリ。めり、なり(詠歎ノ)ナド、コレナリ。

下二段活用の如き活用をなす助動詞。つノ變ジタルてハ、殆ド助詞ノ如ク用キラルヽコトアリ。而シテイヅレノ場合ヲ助動詞トシ、助詞トスベキカニハ、動カスベカラザル標準トテハナケレバ、初學者ハ特ニ惑ヒ易シ。本書ハ說明ノ便宜ニヨリテ、てヲスベテ助動詞トセリ。

〔例題〕

一。	て。	つ、	つれ、	て。				
	しむ。	しむ、	しむれ、	しめ。				
二。	させ。	さす、	さすれ、	させ。				
	て。	つ、	つれ、	て。				
	た。	たら、	たり、	たる、	たれ。			
三。	たる。	たら、	たり、	たる、	たれ。			
	ざる。	ざら、	ざり、	ざる、	ざれ。			
	ごとし。	ごとき、	ごとく、	ごとし。	ごとし。			
四。	て。	つ、	つれ、	て。				
	ず。	ず、	ぬ、	ぬる、	ぬれ、	ね。		
	ぬ。	な、	に、	ぬ、	ぬる、	ぬれ、	ね。	
五。	なれ。	なら、	なり、	なる、	なれ。			
	まじ。	まじき、	まじく、	まじ。	まじけれ、	まじ。		

ん(む)ノ音便)。む、め。
六。て(てノ連濁)。つ、つる、つれ、て。
　され。　され、　される、　されゝ。
　ぬ。　ぬ、　ぬ、　ね。
　まい。　まい。
七。たけれ。　たく、　たけれ。
　なけれ。　なく、　なけれ。
　ない。　ない、　なく、　なけれ。
八。なり。　なら、　なり、　なる、　なれ。
　り。　ら、　り、　る、　れ。
九。き。　き、　き、　し。　し、　しか。
　し。　き、　し、　しか。　し、　しか。
　られ。　らる、　らるゝ、　らるれ、　られ。
　けり。　けり、　けり、　ける、　けれ。
一〇。れ。　る、　るゝ、　るれ、　れ。

し。　き、　し、　しか。
べから。　べから、　べかり、　べかる、　べかれ。
ず。　ず、　ず、　ぬ、　ね。

類題

次の文章のうちより助動詞をぬき出し、その活用を記せ。

【一】黎明、濛氣拭へるがごとし。
【二】至誠の貫かぬ理は、よもあるまじく候。
【三】きつと怠らぬやう致したき事は、申すもおろかに候。
【四】繪畫彫刻の博覽會は、このごろ開かれたり。
【五】人は樹木と同じく、大氣中に生活せざるべからず。
【六】播きたる種の、直に實のらんことを望むものはあらじ。
【七】播かぬ種の生ずべき理は無からん。
【八】砲火の開かるゝや、敵艦は須臾にして、白旗を掲げたり。
【九】明日雨が降らなかつたならば、見にゆかう。
【一〇】父が聞かれて、それが理に合はぬことを、諄々と說明された。

第十六章　副詞

副詞。世ノ文典ニハ

「壁を白く塗る。」「花美しく咲く。」

ノ白く、美しくヲ副詞ト見ズ、形容詞ノ一種ノ用法トスルモノアリ。ソノ説ニヨレバ、白くハ塗るヲ修飾スルモノニアラズシテ、壁ヲ形容スルモノナリ、マタ美しくハ咲くヲ修飾スルモノニアラズシテ、花ヲ形容スルモノナリトイフ。サレド

「風烈しく吹く。」「球を強く打つ。」

ノ烈しくハ吹くヲ修飾シ、強くハ打つヲ修飾スルモノナレバ、コレラハ副詞ナリトスルナリ。コノ説ハ西洋文法ニモアリテ、一應ハ肯ハルレド、元來、品詞ノ分類ハ、意味ノ上ヨリノミ定ムベカラザルモノアルコト、本書ニ説キタルガ如クナルガ上ニ、カノ白く、美しくナドノ如キモ、解シヤウニヨリテハ、イカニトモナルモノナレバ、本書ハ便宜上スベテコレラヲ副詞ト見タリ。

形容動詞。本書ハ明に遙に及ビ爛漫と、洋々とナドヲ各一ツノ副詞ト見タリ。コレラノ明、遙、爛漫、洋々ナドハ、國語ニテハ通常、單獨ニ用キラルヽコトナシ。サレバ明なり、遙なり及ビ爛漫たり、洋々たりヲ各一ツノ熟語ト見タリ。コノなり、たりヲ助動詞トモ見ラルヽ、如クナレド、シカセンニハ、明遙、爛漫、洋々ナドヲ獨立セル品詞ト立ラザルベカラザルヲイカニセン。サリトテ舊説ノ如ク分析シテに＝あり、と＝ありト説カンハ、却リテワカリニクシ。

形容動詞ヲ形容詞ノ一種トスルコトモアレド、本書ニ既ニ説キタルガ如ク、形容詞ト動詞トノ差別ハ、意味ノ上ヨリハ形ノ上ヨリ立テラルヽモノナレバ、動詞ノ如キ活用ヲナス形容動詞ハ、動詞ノ一種ト見ルヲ當レリトスベク、ソノ名目ノ上ヨリイヒテモ、然ルベシ。

〔例題〕

次ノ文章ノウチニテ――ヲ引キタルハ副詞ニテ、――ヲ引キタルハ形容動詞ナリ。

一。互に馬を乗り放ち、既に槍を合はせんとしけり。

二。土人は俄に敬慕の念を起し、懇に墓前に禮拜せり。

三。わが軍なほ堅く忍びて、一發も應砲せず。

四。辯士は悠然と演壇に登りて、徐に說き出せり。
五。その頃までは、土地まだ大いに開けず。
六。西南は丘隴相連なれども、東北は概ね平坦なり。
七。ひとり英國のみは、孤立を守りて敢へて屈せず。
八。始めて見る人は、必ずその宏壯な建築に驚く。
九。主人は極めて平然たる樣にて、面白げに談笑せり。
一〇。取締を嚴しうしたのに、却つて犯則者が少かつた。

類題

次の文章のうちより副詞と形容動詞とをぬき出せ。

【一】しばし、程經ぬれば、身暖になりて、またも睡くなりぬ。
【二】汝は、よく心して、常にこの一小事を忘るゝことなかれ。
【三】いづれ御目にかゝりて委しく申し上ぐべく候。
【四】風景の美まことに筆紙のよく悉すところにあらず。
【五】われは急にその前路を扼して、再び南方に壓迫せり。
【六】他の職業に從事するもの、農を餘業となす、亦頗る可なり。
【七】その趣、その樂、あに管に霄壤の差異あるのみならんや。
【八】わが太陽系は最初極めて熱度の高い瓦斯のおほきな塊であつた。
【九】人影黑く、燈影淡く、天地たゞ平和にして、四顧たゞ寂寞たり。
【一〇】談たま〳〵王室の衰へしことに至れば、かならず流涕せり。

第十七章　助詞

助詞。助詞ハ即チ所謂豆爾乎波ナリ。本書ニハ、かなノ如ク他ノ文典ニ感動詞ト立ツルモノ、ながらナドノ如ク接尾語ト立ツルモノ、及ビ多クノ動詞ノ命令形ノ語尾ト認メラルヽよヲモ、皆助詞トナセリ。

助詞ノウチニハ、かなノ如ク感動ノ意ヲアラハスモノ、「花と月と」ノとノ如ク接續ノ用ヲナスモノナド、種々アリ。下ニ接續詞、感動詞ヲ說ケルニ、ヨク對照シテ、辨別ヲ誤ルベカラズ。

助詞ヲ、ソノ附ク品詞ニヨリテ大別シテ、名詞代名詞ニノミ附クモノト、動詞、形容詞ニノミ附クモノト、種々ノ品詞ニ附クモノトノ三ツトスルコトアリ。サレド、別ニ法格ノ說クベキモノナキガ故ニ、本書ニハ載セズ。

〔例題〕

次ノ文章ノウチニテ縦線ヲ引キタルモノハ、助詞ナリ。

一。師さへ勧め給へば、わが志今は決せり。
二。この理を知らざるを至愚といふ。
三。月の表面には、たゞ低地と山とあるのみ。
四。その意氣のいかに猛烈なりしかを見よ。
五。あの話は幾度か聽いたが、いつも涙がこぼれる。
六。友から聞くと、成程と思はれるではないか。
七。氣候は寒けれども、健康には障なしとぞ。
八。衣服を更めしは、先生を敬する爲にてありけるよ。
九。これより絶頂までは、道の程いかほどかある。
一〇。かれが旅行を快樂の一に數ふるも、宜ならずや。

〔類題〕

次の文章のうちより助詞をぬき出せ。

【一】春四月の頃となれば、青白き花開く。

【二】祇園の夜櫻看んとする人は、神山へと向ふ。
【三】塔は霞を洩れて松風の外に聳ゆ。
【四】太陽暦は、地球が太陽を一周する時間を基として立てた暦である。
【五】われは、笛を吹きすさびつゝ、歸るともなく、わが家に歸れり。
【六】この一事は、數年の後までも、新しき記憶をわれに起さしめぬ。
【七】半年にもせよ、一年にもせよ、塵もつもれば、山となる理なり。
【八】雨瀑注下の水量、一分時間に、一億噸の多きに至るとかや。

第十八章　接續詞

接續詞。意味ノ上ヨリイヘバ、

「花と月と。」

「讀めばわかる。」

「打てども、馬進まず。」

「無事に候ふ間、御安心下され度く候。」

「知らざるが故に、知らずといふ。」

ナドノとばどゝ、間故にナドハ、接續詞ト立ツベキガ如クナレド、本書ニ接續詞トイフハ、コレラヲ指サズ。上ノ語句、文章ノ形式ニ何等ノ變化ヲ起サシムルコトナクシテ、ソノマヽ上下ノ語句、文章ノ中間ニ入レテ用キルベキモノノミヲイフ。サレバ、前ノ例ニテハ、とば、どもナドハ助詞トシ、間故ナドハ名詞トスルナリ。

且或はナドモ、用キヤウニヨリテハ、副詞ナリ。次ノ例ヲ見ヨ。

敵軍且戰ひ、且退く。

敵艦或は沈沒し或は捕獲せらる。

コノ二ツノ文章ハ、ソノ意

「敵軍戰ひ且退く。」

「敵艦沈沒し或は捕獲せらる。」

ト各相同ジク、且及ビ或はノ意モマタ相同ジケレド、品詞ノ種類ハ互ニ異ナリ、カレラハ副詞ナルニ、コレラハ接續詞ナリ。

〔例題〕

次ノ文章ノウチニテ――ヲ引キタルハ

ソノ接續セル語句、文章ナリ。

一。生絲及び茶は、わが國の名高き輸出品なり。

二。受驗者は羽織袴または洋服を著用すべし。

三。空は快く晴れ、それに波さへ穩であつた。

四。花には色の美しきもの或は香の高きものあり。

五。生徒は父兄或は保證人の家より通學するか、もしくは寄宿舍に入るべし。

練習題

次の文章のうちより接續詞をぬき出して、これを說明せよ。

【一】春風は輕くわが袖を拂ひ、又、絲長き堤の柳を吹く。

【二】智を增して、しかもその間に大なる樂を受くることを得。

【三】原價と賣價との差卽ち金拾貳圓は損失額なり。

【四】これらの生徒は品行方正に且學術優等なり。

【五】わが擊滅或は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦、驅逐艦及び特務艦各數隻に過ぎず。

第十九章　感動詞

感動詞。本書ニイフ感動詞ハ、專ラ文章ノ首ニアリテ、ソノ文章ノ構成ニ關セザルモノノミナリ。

〔例題〕

一。巧なる(動詞(形容動詞))詐(名詞)は(助詞)拙き(形容詞)誠(名詞)に(助詞)しか(動詞)ず(助動詞)

二。ドイツ(名詞)は(助詞)學理(名詞)を(助詞)實地(名詞)に(助詞)應用する(動詞)こと(名詞)最も(副詞)巧なり(動詞(形容動詞))

三。汽罐車(名詞)の(助詞)發明(名詞)は(助詞)殆ど(副詞)人間(名詞)の(助詞)生活狀態(名詞)を(助詞)一變(名詞)させ(助動詞)た(助動詞)

四。町(名詞)と(助詞)いへ(動詞)ば(助詞)町(名詞)しかし(接續詞)戸數(名詞)は(助詞)千(數名詞(表名詞))に(助詞)も(助詞)足ら(動詞)ない(助動詞)

五。無學(名詞)にして(助詞)旅(名詞)する(動詞)は(助詞)たとへば(副詞)夜(副詞)行く(動詞)が(助詞)如し(助動詞)

六。山(名詞)常に(副詞)鳴動し(動詞)て(助詞)地軸(名詞)今(副詞)に(助詞)も(助詞)碎け(動詞)ん(助動詞)か(助詞)と(助詞)思は(動詞)る(助動詞)

七。風(名詞)雨(名詞)に(助詞)さらさ(動詞)れ(助動詞)て(助詞)鼻(名詞)目(名詞)しかと見え分か(動詞)ず(助動詞)

八。農業(名詞)は(助詞)人(名詞)をして(助詞)美趣(名詞)を(助詞)解し(動詞)詩情(名詞)を(助詞)養は(動詞)しむ(助動詞)

九。全軍(名詞)の(助詞)將士(名詞)休養(名詞)すでに(副詞)足り(動詞)て(助詞)元氣(名詞)鬱勃たり(動詞(形容動詞))

一〇。あゝ(感動詞)こ(代名詞)の(助詞)一語(名詞)遂に(副詞)最後(名詞)の(助詞)別辭(名詞)と(助詞)なれ(動詞)る(助動詞)か(助詞)

類題

次の文章を一つ〳〵の單語に分ちて、その品詞の名をいへ。

【一】木の花は、御國の櫻にまされるはなし。

【二】繪畫は二千餘點に達し、彫刻は三百餘點と數へらる。

【三】余がこゝに遊べるは六月の下旬なり。

【四】 足慄ひ、魂跳きて、心に感ずる所あれども、口、これをいふこと能はず。

【五】 最愛の母に逢ふに似たるは、いつも京都に著きたる時の心地なり。

【六】 たぐひなき晴天に心浮き立ちて、人は西へ東へと群れ行く。

【七】 燈火の影は、水に映りて、星の如く、花の如し。

【八】 松青く、樓門赤く、茶煙、絶え絶えに颺りて、花きはめて白し。

【九】 日影うらゝかなる公園に、小兒などの數多遊べる、いと愛らし。

【一〇】 すべて、花は宝にて咲かせたるを、各公園さては道の邊に壇を築きて、移し植う。

【一一】 使命つぶさに傳へつゝ、匈奴の王に面接し、蘇武は國書を呈しけり。

【一二】 國をおもふ道に二つはなかりけりいくさの庭に立つも立たぬも

（御製）。

中巻

第一章　動詞の性

自動と他動と。　本書ニ擧ゲタル自動ノ例、卽チ

咲く、飛ぶ、起く、出づ、衰ふ、榮ゆ

ナドハ、所謂無對自動或ハ完全自動トイフモノナリ。コレニ對シテ

なる、似る、映る

ナドハ、動作ノ及ブ目的ナクトモ成リ立ツ性質ノモノナレド、ナホ

「われらは三年生となる。」

「花は霞に似たり。」

「影、水に映る。」

ナドノ如ク、ソノ動作ノ係ル標準タル三年生と、霞に、水にナドノ語ヲ要ス。有對自動或ハ不完全自動トイフモノ、コレナリ。マタ他動ノ例、卽チ

書く、讀む、受く、撫づ、貯ふ、愛す

ナドハ、所謂單對他動或ハ完全他動トイフモノナリ。コレニ對シテ

なす、似す、映す、與ふ、加ふ

ナドハ、動作ノ及ブ目的ヲ要スル外ニ、ナホ

「父は次子を軍人となす。」

「鵙は聲を他鳥に似す。」

「山は影を湖水に映す。」

「司令官はかれに感狀を與ふ。」

「生徒は八に六を加ふ。」

ナドノ如ク、ソノ動作ノ係ル標準タル軍人と、他鳥に、湖水に、かれに、八に、ナド

ノ語ヲ要ス。複對他動或ハ不完全他動トイフモノ、コレナリ。本書ハ、コヽニ

テハ單ニ自動ト他動トノ別アルコトヲ說キ、ソノ小別ヲバ後ノ文章法ノ卷

(下卷第四章)ニ讓レリ。コレ自動ト他動トノ別アルコトヲ知ルヲ要スルハ、主

トシテ文章法ニ關シテノコトナレバナリ。

自動ト他動トハ、ソノ動作ノ及ブ目的ノアルトナキトニヨリテ分ルヽモノ

ナルコト、本書ニ說キタルガ如シ。サテ、コノ目的ヲイフニハ、助詞ヲヲ要ス

ルコトモ、マタ本書ノ例ニ見ルガ如クナレド、逆ニ助詞ヲニテ承ケタル體言

ハ、スベテ目的ヲイフニハアラザルコトヲ心得ズハアルベカラズ。本節ノ

例ニツキテイハンニ、

汽車發す(自動)。

自動ト他動トノ別ハ、カクノ如ク判然タレド、

螢、光を發す(他動)。

「汽車青森を發す。」

ナドノ例ニテハ、青森をノ語ヲ發すノ目的ヲイフモノト誤リテ、發すヲ他動

ニアラズヤト疑フモノアリ。サレド、コノ青森をナドハ、發すノ目的ニハアラ

ズシテ、地位ヲ示スマデノモノナリ。ソノ意ハ青森よりトイフニ同ジ。

自動詞ト他動詞ト、語原ノ同ジク、語形ノ異ナル場合ノ例ノウチニテ、

(自　動)

旗立つ(四段活用)。

綱切る(下二段活用)。

(他　動)

友、志を立つ(下二段活用)。

小兒、紙を切る(四段活用)。

ナドノ立つ、切るヲ、活用ノ異ナルニヨリテ自動ト他動トノ別生ズ」トヤウニ

說クモノアリ。カクテハ、朽つ(上二段活用、自動詞)ノ如ク相對スルモノナキ動詞(假ニ設

ケテイハバ、他動ニ朽た、朽ち、朽つ、朽てナドノ活用ナシ)ハ性ノナキ動詞トイ

ハザルヲ得ザルコトトナル。サレバ、本書ニハ、動詞ニハ自動詞ト他動詞トアリテ、ソノウチニハ語原ノ相同ジク、語形ノ相異ナルモノアリト說ク。但シ、動詞ノウチニテモ、形容動詞及ビありハ動作ヲアラハスモノニアラネバ、性ナク、隨ヒテ自動、他動ノ別ナシ。

〔例題〕

一。精神一たび到ら(自)ば、何事か成ら(自)ざらん。

二。かれは燃ゆる(自)が如き熱心を胸裡に藏め(他)たり。

三。鐵欄高く空際に横たはり(自)、石柱深く河底に入る(自)。

四。課いまだ滿た(自)ざるに、日暮れ(自)んとす(自)。

五。空飛ぶ(自)鳶、鳴く(自)音清らに、物もなき海、朝嵐吹く(自)。

六。春風は輕くわが袖を拂ひ(他)、また絲長き堤の柳を吹く(他)。

七。箱の中へは、水を滿たし(他)たコップを入れ(他)た。

八。蒔か(他)ぬ種は生え(自)ぬ。

九。終る(自)、終ふ(他)。開く(自)、開く(他)。閉づ(自、他)。燒く(上)、燒く(他)。止む(自)、止む(他)。止る(自)、止む(他)。

類題

次の文章のうちより動詞をぬき出して、その性を說明せよ。

【一】その學の深きに服して、直に師弟の契を結びぬ。

【二】老いて學ぶは、たまゝ〳〵その志の淺からざるを顯すに足る。

【三】船の進行する所は、中流最深の一線路に止れり。

【四】故郷に思はぬ日を費し、半年を經て、家に歸り著きぬ。

【五】怒りたる時には、言語を發する前に、十の數を數へよ。

【六】脅氏の墓を見て、年頃のうらみ心頭に起りて堪へられず。

【七】わが量狹ければ、異を嫌ひ、非を惡みて、みづから世を窄うす。

【八】一婦織らざれば、萬人凍え、一夫耕さざれば、萬人飢う。

次の漢字を幾樣にも動詞に訓みて、その自他を別ち、活用を示せ。

【九】落。　還。　治。　始。　隱。

【一〇】移。　退。　進。　笑。　喜。

第二章　動詞の語形の類別

動詞の語形の類別。　未然形以下ノ名目ハ、各語形ノ用方ノウチニテ理解ニ早キモノヲ選ビテ、ソレニ因ミテ命ジタルナリ。サレバ例ヘバ未然形ハ、必ズシモ、下、助詞「ば」ニ接シテ動作マタハ存在ヲ未ダ然ラザル意ニイフニ用キルノミノモノナラズ。「行かば」ノ行かモ未然形ナリサレド、コノ事ハ、助動詞ノ連結ニツキテイフベク、今コヽニテハ各語形ノ名目トソノ名目ノ因リテ起レル用方トノミヲ知ラシムルニ止ル。コノ章ノ例題ヲ課スルモ、ソノ心シテアルベク、以下、形容詞、助動詞ノ語形ノ類別ヲ說クモ、コレニ準ズ。

終止形。　終止形ヲ動詞ノ本體トストイヘル、本體トハ、動詞本來ノ形ノコトニテ、卽チ語形ノ變化ニツキテ云々セザル場合ノ動詞ヲイフナリ。サレバ何ノ動詞トイフトキニハ、ソノ終止形ヲ擧ゲテ、例ヘバ、「行く、あり、死ぬ、きる、起く、ける、受く、すく」トイフ動詞ナドトイフ。

動詞ノ語形ハ、マタソノ活用形トモイフ。　各語形ニツキテモ、コレヲ未然段、

連用段ナドトイヒ、連用法、終止法ナドトモイフ。段トハ五十音圖ニツキテソノ語形ノアル處ヲサシテイフモノニテ、形トハ語形ソノモノニ命ジタル名ナリ。サレバ形トイヒ、段トイヒ、法トイフハ、イヅレモソノ見處ノ異ナルニヨリテ起リタル名ニテ、本書ガ特ニ形トイフヲ採リタルハ、語形ソノモノヲ指スヲ便宜トスルニヨルナリ。

本書ニハ法トイフモノヲ說カズ。コレ一ツハ各語形ニ適用スベキ法ノ悉ク備ラザルニヨルナリ。世ノ文典ニ、例ヘバ未然形ニ不定法マタハ將然前提法トイフヲ充ツ。サレド、不定法トイフモノ、法トシテハ殆ド無意味ナリ。マタ將然前提法トイフモノモ、動詞ノミニテ事足ル法ニハアラズシテ、特殊ノ助詞「ば」ニ接シテ、始メテコノ法ハ成立ツナリ。　連用法、連體法、終止法、命令法ナドモ、法トイフ名目ニ依ラズトモ、下、用言ニ連ヌルニハ連用形ヲ用キルナドトヤウニ說キテ、要領ヲ得ベキナリ。

動詞の誤用。　コヽニ文語ノ左行變格活用、加行變格活用ノ諸動詞トイヘルハ、コノ兩活用ハ、文語ト口語トノ語形異ナリ、而シテ口語ニテハ終止形ト連體形トハ語形相同ジク、用キ誤ルコトナケレバ、特ニ文語ノトイヘルナリ。

〔例題〕

一。子ほど親を思へ命令形。

二。恩を受け未然形ば、必ず報いよ命令形。

三。急が未然形ば、まはれ命令形。

四。劇しい競争の起る連體形のは、見連用形易い道理である終止形。

五。一日讀書すれ已然形ば、一日の益あり終止形。

六。沖を見連用形已然形ば、鯛釣る連體形舟、木の葉の如く浮かぶ終止形。

七。世に中途に事を廢する連體形例は、數へ連用形つくし連用形難し。

八。風雅のたしなみある連體形ものは、自ら容認する連體形を得終止形。

九。結構の堅牢なる連體形、觀望の壯麗なる連體形、實に府下第一とす終止形。

一〇。志だに堅から未然形ば、身の不遇を歎ずる連體形ことなかれ命令形。

一一。一二。

活用の種類	動詞	變化せぬ部分	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用	勝つ	か	た	ち	つ	つ	て	て
同	立つ自動	た	た	ち	つ	つ	て	て
上二段活用	落つ	ち	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
上一段活用	見る		み	み	みる	みる	みれ	みよ
同	朽ちる	く	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
下二段活用	立つ他動	た	て	て	つ	つる	つれ	てよ
下一段活用	捨てる	す	て	て	てる	てる	てれ	てよ
下二段活用	流る	なが	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
同	與ふ	あた	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
同	入る他動	い	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
四段活用	入る自動	い	ら	り	る	る	れ	れ

一三。出て迎ふ人、停車場に滿ちたり。

出て迎ふハ、下、體言人ニ連ナルガ故ニ、連體形ナルヲ要ス。サレバコレヲ出て迎ふる(下二段活用)ト改メザルベカラズ。

一四。兒どもの數多集りて、魚を捕ふハ、下ニことナドヲ略セル連體形ナルヲ要ス。サレバ捕ふる(下二段活用)ト改メザルベカラズ。

一五。 公園内に車を引き入ることを禁じてあり。

引き入るハ、下、こと＝連ナルガ故ニ、連體形ナルヲ要ス。サレバコレヲ引き入るゝ(他動詞、下二段活用)ト改メザルベカラズ。

一六。 國の亡ぶは、その民の元氣の衰ふによる。

亡ぶハ、下＝ことナドヲ略セル連體形ナルヲ要ス。サレバ亡ぶる(上二段活用)ト改メザルベカラズ。

衰ふハ、下＝ことナドヲ略セル連體形ナルヲ要ス。サレバ衰ふる(下二段活用)ト改メザルベカラズ。

一七。 身方の軍、鯨波をつくりて、逃さじとおひかくる。

おひかくるは、コノ語＝テ文章ヲ止ムルニ用キタリ。サレバ終止形ヲ用キルヲ要シ、コレヲおひかく(下二段活用)ト改メザルベカラズ。

類題

次の文章のうちより動詞(及び形容動詞)をぬき出して、語形を説明せよ。

【一】 さしいづる日影うらゝかなり。

【二】 友の語るを聞けば、形勢依然たり。

【三】 警戒を要せば、赤き旗を振れ。

【四】 月盈つれば虧く。

【五】 賞むるもあれば、誹るもあり。

【六】 われらが認め得るは、たゞその實際に結果を生ずる一半のみ。

【七】 奢侈は飢渇、寒冷よりも吾人を損することおほしと知れ。

【八】 汝の將來を思はば、速に斷乎たる處置に出てよ。

本書の例題に示せる樣式に倣ひて左の諸動詞の活用の表を作れ。

【九】 思ふ。　强ふ。　教ふ。　用ゐる。　添ふ(他動及び自動)。　欲す。

【一〇】 射る。　取る。　暮る。　暮れる。　痩せる。　勉强する。

次の文章のうちに、動詞の誤用あらば、正して、これを說明せよ。

【一一】 この文は、かくの如く解すを正しとす。

【一二】 中學卒業生は入學すを得る。

【一三】 この法を用ゆれば、少からぬ利益あり。

【一四】 心ある株主に會社の前途を憂ふもの多し。

【一五】 かなたに見えるは富士山にて、下を流るは富士川なり。

第三章　形容詞の語形の類別

形容詞の語形。形容詞ノ未然形ハ、ソノ下ニ動詞ありヲ略スルモノト見ルベク、カクテハ未然形ニアラデ、連用形ナリトイフ論モアリ。サレド、コレヲ未然形トスルガ、説明ニ便宜アレバ、本書ハコレニ従ヘリ。

形容詞ハ、マタ命令形ヲ闕クガ故ニ、コレニ命令ノ意ヲ添フルニハ、形容動詞ヲ造リテ、ソノ命令形ヲ用キルベク、例ヘバ善かれ、正しかれナドノ如シ。形容動詞ヲ形容詞ノ一種トセズシテ、動詞ノ一種トスルガ、説明ニ便利ナルコト、ソノ動詞ト同ジク命令形ヲ有スルヲ見テモ知ラルベシナリ。

〔例題〕

一。鶯の歌高き連體形梢にあり。

二。名惜しく未然形ば、恥を知れ。

三。水至つて清けれ已然形ば、魚なし終止形。

四。あの色の白い連體形のは鶴て、その小い連體形方は雌です。

五。今日は珍しい連體形日和で、遊に出る人がなか〳〵多い終止形。

六。木の葉落ち盡くして、空を見るに障少き連體形は嬉し終止形。

七。八。

形容詞	變化せぬ部分	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
淺し	あさ	〃く	〃く	〃し	〃き	〃けれ
重し	おも	〃く	〃く	〃し	〃き	〃けれ
黒し	くろ	〃く	〃く	〃し	〃き	〃けれ
寒し	さむ	〃く	〃く	〃し	〃き	〃けれ
高い	たか	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ
廣い	ひろ	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ
親し	したし	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ
正し	ただし	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ
樂し	たのし	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ
久し	ひさし	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ
優しい	やさし	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ
惜しい	をし	〃く	〃く	〃い	〃い	〃けれ

類題

次の文章のうちより形容詞をぬき出して、その語形を説明せよ。

【一】今夕はじめて近きあたりの大榎に蜩の鳴くを聞く。

【二】そは珍しき客人なり、對面せずば悔しきこともあらん。

【三】互の間に劇しい競爭の起るのは、見易い道理である。

【四】樹なほわかければ、花少し。

【五】故きを溫ねて新しきを知る。

【六】見聞狹くば、取りかへし難き悔あらん。

本書の例題に示せる樣式に倣ひて、左の諸形容詞の活用の表を作れ。

【七】烈し。　辛し。　多し。　近い。　強い。

【八】睦じ。　暗し。　得難し。　苦しい。　騷がしい。

第四章　助動詞の語形の類別

動詞の如き活用をなす助動詞の語形。

本書ノ助動詞ノ語形ヲ示セル表ニ、(一)トアルハ動詞ノ下二段活用ノ如キ活用ヲナスモノ、(二)トアルハ同ジク良行變格活用ノ如キ活用ヲナスモノ、(三)トアルハ同ジク奈行變格活用ノ如キ活用ヲナスモノナリ。良行變格活用ノ如キ活用ヲナス助動詞ノウチニテ、細キ線ニテ圍メル語形ハ、ソノ助動詞ニハ存セザルモノナリ。中ニモ命令形ハ專ラ命令ヲアラハスノミニ用キラルヽモノニテ、命令ハ未來ノ動作ニカカルモノナレバ、命令形ガ動作ノ完了セル意ヲアラハス助動詞たり、り及ビ過去ノ動作ヲアラハス助動詞けりニ存セザルハ、モトヨリソノ所タリ。

連用形ニツキテモ心得ベキコトアリ。動詞ノ連用形ハ、本書ニ說キタルガ如ク、動詞ガ下、用言ト複合シテ、コレト一ツノ熟語ヲナスニ用キラルヽ形容詞ノ連用形ハ、形容詞ガ下、用言ニ連ナリテ轉ジテ副詞トナルニ取ル形ナリ。コレラハ共ニソノ語形ノ用方ノ特ニ辨別シ易キモノニ依リテ、便宜ノ上ヨリ、シカ名ヅケタルモノニテ、命令形トハ異ナリ、ソノ用方ナホ他ニ多ク、例ヘバ、文章ヲ言ヒサシオクニモ、動詞ガ轉ジテ名詞トナルニモ、某ノ助動詞ニ連ナルニモ、皆コノ形ヲ用キルナリ。　サレド、助動詞ニテハ、聊カ趣異ナリ。語形ノ名目ノ起リタル連用トイフコトニハ、用法甚ダ局シ、中ニモ良行變格活用ノ如キ活用ヲナス助動詞ニテハ、普通ニ見ル例トシテハ、體言ニノミ附

クたり」ガ難し、易しナドノ少數ノ形容詞ニ連ナルニ過ギズ。

弟たり難し。　將相たり易し。

ソノ奈行變格活用ノ如キ活用ヲナス助動詞ニテハ、全ク下用言ニ連ナラズ。サルニ、コレヲシモ動詞形容詞ニ於ケルガ如ク連用形ト名ヅクルハ、他ノ動詞、助動詞ノ連用形ニ共通セル用方アルガ故ニテ、助動詞トノ連結ヲ說クニ、ヨキコト、本書後章ニ明ナルベシ。

「行きたり」ナドノたりガ口語ニテハたトナルコト、本書ニイヘリ。ソノ語形ハ未然形、終止形、連體形、已然形ヲ具フレド、文語ニテハたりトイフ連用形アルニ、口語ニハコレニ對スル連用形ナシ。タダ「行つたり來たりして」、「行つたりする」ナドノ如ク痕跡ヲ存ス（連用形ヲ名詞ニ用キタル名殘ナルベシ）。

形容詞の如き活用をなす助動詞の語形。　ごとしニ已然形ノ存セザルコトニ注意スベシ。「ごとければ」ナドイフハ皆誤ナリト知ルベシ。

マタべしニハべいトイフ方言存スレド、模範口語トシテ採ルベカラズ。

形容詞ノ如キ活用ヲナス助動詞ノ連用形モ、ソノ趣、動詞、形容詞ノ連用形ト異ナリ、下用言ニハ連ナラズ、マタ形容詞ニ於ケルガ如ク、コレト複合シテ熟語トハジク、ソノ附キタル動詞ナドト一ツノ連語ヲ成シ、ソノ下ニ連ナル動詞ナドノ意ヲ修飾ス。

見たく思ふ。　花を見るべく吉野にゆく。

特殊ノ活用ヲナスずノ連用形モ、コレト同ジ。

〔例題〕

一。蒔かぬ種子は生えぬ。

二。人に譽められるやうに書かう。

三。余は思ひいづるまゝに書きつゞけぬ。

四。人をして恍として故國にある想あらしむ。

五。かれが口惜しく思ひつる も理なり。

六。瑞西は世界の遊園と稱せらるゝ所なり。

七。講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもありき。

八。經傳を讀めば、聖賢の教を聞くが如きこゝちせらる。

九、士人の住居のその間に點綴せる形連體、狀、一々指點すべし形終止。

一〇、風雅の風雅たる形連體、それこゝにあらむ形終止。

類題

次の文章のうちより助動詞をぬき出して、その語形を說明せよ。

【一】潮滿ちたらば、通り難かるべし。

【二】蓮の葉も、また雨を受くるに適せるものなり。

【三】汝自ら爲し得べき事を、人に爲さしむることなかれ。

【四】對面せずば、悔しきこともあらん。

【五】われらにさへ飽くまで物を思はするは、皆これ汝が罪なり。

【六】櫻花をして澄み渡れる秋の空に開かしめば、いかに。

【七】今から出席しなければならぬ。

【八】先生が歌はれるのを聽きたい。

第五章　助動詞の連結　その一

コヽニ示セル活用連語ノ語形ノ例ノウチニテ、連用形ト終止形トノ相同ジ

キハ、最終ニ來ルたりノ語形ニ連用形ト終止形トノ差別ナキニヨル。サレバコヽニテハ、未然形乃至已然形ハ何々ナリトヤウニ說クベシ。單ニ語形ノミヲ見テ、ソノ未然形乃至已然形ナルヲ定メントスルハ無理ナリ。

活用連語ノ普通ニ用キラルヽモノニ、ナホ次ノ如キ例アリ。

靜なること林のごとし。

その聲咽ぶがごとし。

その狀、恰も花の咲きたるがごとし。

〔例題〕

一、その勞思ひやるべし活用連語、終止形。

二、人間は活動せざるべからず活用連語、終止形。

三、物のあやめも分かぬ活用連語、連體形頃、家には歸るなり活用連語、終止形。

四、潮滿ちたら未然形活用連語、ば、通り難かるべし活用連語、終止形。

五、世に處する動詞、連體形に常識なかるべからず活用連語、終止形。

六、わが馬車の、驢馬に挽かせたる活用連語、連體形連語、もどりの空車を追ひ越しし活用連語、連體形こと、幾度ぞや。

七。雲の上の事は、筆に載する（動詞、連體形）も畏けれ（形容詞、已然形）ば、洩らしぬ（活用連語、終止形）。

八。心ある（動詞、連體形）人は、久しき（形容詞、連體形）れたる（活用連語、連體形）ことを知るならん（活用連語、終止形）。

九。かれが遂にその志す（動詞、連體形）ところを完成したりし（活用連語、連體形）は、一にこの元氣勃々として、燃ゆるがごとき（活用連語、連體形）熱心を胸裏に藏めたる（活用連語、連體形）によれり（活用連語、終止形）。

一〇。動植物ともに、各自皆食ふ（動詞、連體形）やうに、食はれぬ（活用連語、連體形）やうに、殺す（動詞、連體形）やうに、殺されぬ（活用連語、連體形）やうにと競爭して居る（活用連語、連體形）のが、實際の狀態である（動詞、終止形）。

類題

次の文章のうちより、動詞、形容詞、助動詞及び活用連語をぬき出して、その語形を說明せよ。

【一】左方に一大菩提樹の立てるを見る。

【二】紅白の蓮花の點々と水を染めたるなど、美觀いふべからず。

【三】削れるが如き巨巖高く空に聳ゆ。

【四】かれは前途幾多の望をかけたる樂しき首府に馳せ往けり。

【五】木綿の頭巾を目深に被りたれば、密に見るべからず。

【六】家に蓄へし巨萬の富を相續せさすべきものもなし。

【七】わが邦第一の大著作とせらるゝ大日本史は、實に義公の監修せられたりしものなり。

【八】吾人が冒險家に負ふ所多きは、古今の歷史、實にこれが證人たり。

【九】往來の路は昨日の大雨に濕ひたれば、少しも塵を飛ばさず。

【一〇】御推察の上、御貸し下され候はば、これまた天下第一の義擧にて、忠感定めて神明に達し候はん。

第六章　助動詞の連結　その二

文部省ガ公ニシタル、例ノ『文法上許容スベキ事項』ハ、助動詞ノ連結ニ關スルコト多シ。トモアレ、一旦許容シタル上ハ、コレヲ文典ノ本文ニヨリテ誤ナリトシテ指摘スベキニアラズ。サレバ本書ニハ、初ヨリ許容ヲ云々セズ、一種ノ異例トシテコレヲ認メタリ。法格ハ法格トシテ嚴ニコレニ從フベク、ソノ

法格ニハ違ヒタレド、ソハ許容セラレタルナリトヤウニ、覚エオキテ、普通文ヲ律センコト、一トワタリ文法ノ知識ヲ具ヘタルモノハサテ措キ、初學者ニハ極メテ煩ハシク、且迂遠ナル業ニテ、普通教育ニハ忌ムベキコトナリ。コノ趣旨ニヨリテ、本書ノ例題ニハ、一切、『許容事項』ニ關スルモノヲ避ケ、必ズ正サズテハアルベカラザル破格ノモノノミヲ載セタリ。

〔例　題〕

一。出品に手を觸るゝべからず。

べからガ下二段活用ノ動詞觸るニ附クニハ、ソノ終止形觸るヲ承ク。サレバ觸るゝヲ觸るト改ムルヲ要ス。

二。聖武天皇は金銅の大佛を鑄らしめ給へき。

しめハ諸活用ノ動詞ノ未然形ヲ承ク。鑄るハ上一段活用ノ動詞ニテ、ソノ未然形ハ鑄ナリ。サレバ「鑄らしめ」ト改ムルヲ要ス。

き ガ四段活用ノ動詞給ふニ附クニハ、ソノ連用形給ひヲ承ク。サレバ給へヲ給ひト改ムルヲ要ス。カヤウニい列ノ音ヲえ列ノ音ニ誤リ用キルコト、東北地方ニ多シ。心スベキコトナリ。

三。その事業は永く國民に記憶されべきものなり。

べきガ下二段活用ノ動詞ノ如ク活用スル助動詞さるニ附クニハ、ソノ終止形さるヲ承ク。サレバされヲさるト改ムルヲ要ス。（さるヲ原ノ形ニ改メテ=せらるトシ、「記憶せらる」ト改メテモヨシ）。

四。雨がやんだら、散歩に行こふ。

ふハう（んノ口語）ノ誤ナレバ、シカ正スベシ。マタコノ語ハ四段活用ノ動詞行くノ未然形行かヲ承クルモノナレバ、行こハ誤ナリ。行かト正スベシ。

五。今鳴いた鳥は、杜鵑だと思ふた。

たハ四段活用ノ動詞思ふノ連用形思ひヲ承ク。ソノう音便ハ思ふナリ。サレバ思ふヲ思うト改ムルヲ要ス。

六。たれかに頼むで、案内ささう。

で（てノ音便）ハ四段活用ノ動詞頼むノ連用形頼みノん音便頼んヲ承ク。頼むハ誤ナレバ、シカ正スベシ。

さすハ下二段活用ノ如ク活用スルモノナレバ、ささノ語形ナシ。而

シテコノ語ガ、下、ん、ノ口語ニ接スルニハ、ソノ未然形させヨリスベク、させニ附クんノ口語ハ、う、ニハアラデ、ようナリ。サレバさせようト改ムルヲ要ス。

七。

受驗者はこの一節を讀まされて、講義さされ。

されトイフ助動詞ハ左行變格活用ノ動詞すノ未然形せヨリられニ連ナリテ、せられトイフベキガ、約レルナリ。サレバ讀まされトハイフベカラズ。コレナルハ讀ますトイフ活用連語ニるヲ連ネタルモノノ如クナレド、ずハ下二段活用ノ如キ活用ヲナス助動詞ナレバ、さノ語形ナク、マタ下二段活用ノ如キ活用ヲナス助動詞ニ附クハ、るニハアラズ、らるニテ、未然形ヲ承クベキモノナリ。サレバ、ずノ未然形せニられヲ連ネテ、讀ませられト改ムルヲ要ス。

「講義さざる」ノさざるハ、助動詞さすノ一語形ささニるヲ連ネタルモノノ如クナレド、さすニハささトイフ語形ナク、マタ、コノ語ニ附クハるニハアラズ、らるニテ、ソノ未然形させヲ承クベキモノナリ。サレバ「講義さざる」ヲ「講義させらる」ト改ムルヲ要ス。（「講義させ」ハ「講義せさせらる」ノせヲ略シタルモノナレバ、コレヲ復シテ「講義せさせらる」ト改メテモヨシ）。

八。

右ノ「讀ませられ」モ「講義させられ」モ共ニ「讀ませられ」「講義させられ」トイフベキヲ、ソノせられ、せられヲさされ、さるト約メタルヨリ起リタル誤ナリ。せらるノさるトナルハ、左行變格活用ノ動詞すノ未然形せニ助動詞らるノ連ナリタル場合ニ限ル。

子に外字新聞を譯さして聞くを樂とせり。

さしトイフ語形ノ助動詞ハナシ。さすハ下二段活用ノ如キ活用ヲナス助動詞ニテ、下ニ連ナルベキソノ連用形ハさせナリ。サレバ「させて」ト改ムルヲ要ス。（「譯させて」ト改メテモヨシ）。

九。

かれは熱心に研究ししかば、好結果漸く顯れり。

しかハ左行變格活用ノ動詞研究すニ附クニハ、ソノ未然形研究せヲ承ク。サレバ「研究せしかば」ト改ムルヲ要ス。

りハ四段活用、左行變格活用ナラヌ動詞ニハ附カズ。顯るハ下二段活用ナリ。サレバたりヲ附ケテ「顯れたり」ト改ムルヲ要ス。

一〇。 この圖は某の名工の寫ししものと言ひ傳へり。

り」ハ四段活用、左行變格活用ナラヌ動詞ニハ附カズ。言ひ傳ふハ下二段活用ナリ。サンバたり」ヲ附ケテ「言ひ傳へたり」ト改ムベシ。

（「寫しし」ニハ誤ナキコトヲ、學ブモノニヨク了解セシメオクベシ。コレヲ「寫せし」ト改メントスルハ、モトヨリ不可ナリ。タバ「寫せし」トアルヲ「寫ししニ改ムルニハ及バザルノミ）。

一一。 餘興には、名あるものを招ねて義士傳を談らさん。

ハ四段活用「招く」ノ連用形「招き」ヲ承ク。「招きハい」音便ニテ「招いて」ナル。サレバ「招ねハ誤ナリ。「招い」ト改ムベシ。

「談らさん」ハ「談らす」ヲ一ツノ四段活用ノ動詞ト見テ、ソノ未然形「談らさ」ヲ造リ、コレニ「ん」ヲ連ネタルモノナリ。サレドソハ誤ニテ、四段活用ノ動詞「談る」ニ下二段活用ノ動詞ノ如ク活用スル助動詞「す」ト特殊ノ活用ヲナス助動詞「ん」トヲ連ヌベキモノナリ。サテ「す」ハ四段活用ノ動詞ノ未然形ヲ承ケ、「ん」ハ動詞、助動詞ノ未然形ヲ承ク。サレバ「談らさん」ヲ「談らせん」ト改ムルヲ要ス。

一二。 村民一致して、先生の職に復されんことを請へり。

誤ナシ。（「復され」ヲ「復せられん」ト改メテモシ）。

類題

次の文章に誤あらば正して、その理由を述べよ。

〔一〕 後人その德を慕ふて、一大碑を建てり。

〔二〕 かれが公にしし學說は、信ずるべき理由あり。

〔三〕 激浪巖を噛むで、飛沫面を擊てり。

〔四〕 敵軍の潰走しし、わが重砲兵をして敵の砲兵を沈默さしたるによれり。

〔五〕 會社の今日の隆運につひては、支配人の功多きに居れり。

（「居りヲ良行變格活用トスレバ「居れり」ハ誤ナレド「居るヲ四段活用トスレバ（本書上卷第二四節參照）「居れり」ハ誤ナラザルコトニ注意スベシ）。

〔六〕 製作法全く異なりて、これは殆ど實用に適さざるがごとし。

（「異なりてハ異例ナルコト、本書ニ說キタリ。改ムルニハ及バザレド、「異にしてトアルベキカ）。

第七章　動詞の相

三六　**所相**。所相モ、文法上、使役相ニイハル、コト、送られしむ、迎へられしむナド
補　ノ如シ。サレド、普通ニ用キルコト少ケレバ、本書ニハ載セズ。
所相ニ對シテハ能相トイフベキモノアリ。卽チ送らる、迎へらるニ對シテハ
動詞ソノマヽノ送る、迎ふナリ。送らせらる、迎へしめらるニ對シテハ送らす、
三七　迎へしむナリ。サレバ能相ハ所相ニ對スル名目ニテ、使役相ソノ他ニハ關
係ナク、所相ニ對シテハ、タヾソノ所相ノ助動詞ヲ除キタルマデノモノナリ。
法格ノ上ニ、特ニ說クベキトコロナケレバ、本書ニハ載セズ。
三八　行かれる、遊ばれる、飲まれる、眠られるナドガ約リテ、行ける、遊べる、飲める、眠
れるニ限リ、所相ニテハ然ラズ。
四〇　**べし**ハ、勢相ヲアラハス外ニ、推量ノ意及ビ義務ノ意ヲアラハスニモ用キル。
ソノ勢相ヲアラハセルト否トハ、前後ノ文意ニヨリテ判ゼラルヽナリ。
孺子敎ふべし。　日を同じうして論ずべからず。
（勢相）

明日雨降るべし。　明日は雨降らざるべし。
（推量）

父母の命に從ふべし。　無用の者入るべからず。
（義務）

世ノ文典ニ、勢相ヲ能力ノ法ト名ヅケ、推量ノ法、義務ノ法ト竝ベテ、べしハコノ三ツノ法ヲアラハストセルモノアリ。マタ意義ニヨリテ助動詞ヲ分チテ、べしヲ可能ノ助動詞、推量ノ助動詞、命令ノ助動詞ニ共ニ屬セシムルモノアリ。本書ハ動詞ノ相及ビ時ニ關スル助動詞ノ外ハ、勉メテ省略ニ從ヘリ。コレ、ソノ法格ノ特ニ說クベキモノナキト、一ツ一ツノ助動詞ノ意義ハ文法科以外ニ學ブ機會決シテ少カラザルトニヨルナリ。ナホ意義ニヨル分類ハ、中ニハソノ意義ノイカヤウニモ取ラル、モアリテ、嚴密ニ差別ヲ立ツルコト能ハザルノ難アルヲ免レズ。例ヘバ

「このことは、なほ重ねて後章に說くべし。」

ノべしハ可能、命令、推量ノ助動詞トイハンニ、皆當ラズ。カクテ意義ノ轉換トイフコトヲ說キテ、コレヲ未來ノ意ヲアラハストスルナリ。

べかりモソノ意及ビ用法略ベしニ同ジ。サレド、コレニずヲ連ネタルべからずハ推量ノ否定ヲバアラハサザルコト、前ノ例ニテ知ルベシ。

四一　本來ハ特殊ノ助動詞ノ連結ニヨリテ一種ノ動作ノ狀態ヲアラハスヲ相ト
イフベク、コヽニ示セル答ふるを得及ビ達する能はずナドハ、コレニ當ラヌ
ニ似タレド、慣用語句ノ如クナレルガ故ニ、便宜ニコヽニ收メタルナリ。

四二　敬相。敬相ハマタ給ふ、候ふ、仕る、古クハ侍りナドノ動詞ヲ連ネ用キテアラ
ハスコトヲ得。サレド、コレラハソノ趣聊カ異ナレバ、本書ニハ載セズ。口語
ノますナドモ敬相ヲアラハス助動詞トスベシ。

〔例題〕

一。秋の色も思ひやられ勢相て、うれし。
二。このまゝにて歸らば、必ず翁に叱られ所相ん。
三。公は暇あるごとに親しく農事を談ぜられ敬相き。
四。龍顏殊に快く笑はせ給ふ敬相。
五。平將門は檢非違使になれ勢相なかつた爲に謀叛した。
六。汝自ら爲し得勢相べき事を人に爲さしむる使役相ことなかれ。
七。野は細流に縱橫に截られ所相、街は水に夾まれ所相たり。
八。主上隱岐國へ遷されさせ給ふ敬相所相の。

九。軍旅の事は兵に讓られ敬相よと諸卿僉議ありけり。
一〇。主人は自ら風呂を焚きて入浴せさする使役相を例とせり。
一一。燐光、船橋に及び、海底もまた見え透くかと疑はる勢相。
一二。人をして眞に人世の光景にあらざるかを疑はしむ使役相。

類題

次の文章につきて動詞の相を說明せよ。

【一】あゝさだめなき人の世や、たのまれぬ人の身や。
【二】すは夜討ぞといはせもあへず、雨よりしげき寄手の槍先。
【三】それが得られぬ爲に我儘を通さうといふ輩である。
【四】機關師の不熟練なる、幾度かわれらをして慄然たらしめたりき。
【五】紅白の蓮花の點々水を染めたるなど、美觀いふべからず。
【六】太陽の光はうちかさなれる枝に遮られて、かれの身にいたらず。
【七】內務大臣閣下、親しく臨場せられ、あつくこの擧を稱揚せらる。
【八】先日御承知なし下され候ひしが、更にかくの如く申し上げ候。
【九】年頃のうらみ心頭に起りて堪へられず。

【一〇】　われらにさへ飽くまで物を思はするは、皆これ汝が罪なり。

【一一】　老人に物を思はせ給ふこと心得がたし。

【一二】　かれの幼きより物書く事をば人々に語り誇らせ給へることとなれば、せめては、物書き習ふことのみは、せさせたきものなり。

第八章　動詞の時

未來。　む、ノ外ニ、べし、モ推量ヲアラハス意ヨリ轉ジテ未來ヲアラハスニモ用ヰル。らむ、まし、モコレニ似タリ、ましハ普通文ニハ用少ケレバ、本書ニハ載セズ。コノ他、けむハ過去ヲ推量スルニ用ヰル助動詞ナリ。コレラハイヅレモ動詞ノ時ヲアラハスニ關係アルモノナレド、ナホ專ラ時ヲアラハスニ用ヰル助動詞トシテハ、未來ニハむノミトスベシ。

現在トハ、動詞ノ時ヲアラハスガタメノ動詞ノ一種ノ用方ニテ、過去及ビ未來ニ對シテ起リタル名目ナリ。コレニハき、けりナドノ助動詞ヲ要セザルモノナルガ、コレヲ逆ニ考ヘテ、き、けりナドノ助動詞ノ附カザルモノハ、スベテ現在ナリトヤウニ思ヒ惑フベカラズ。

〔例題〕

一。褒賞を蒙りし過去ことと、前後數回に及べり現在。完了

二。深く心を痛めし過去に、幸に事なきを得たり現在。完了

三。日本國中に洋字を知る現在もの、遂になきに至りぬ現在。完了

四。遊學せん未來の志ありつれ現在。完了ど、旅費、學費、心に任せず現在。

五。實朝も失せしか過去ば、政柄は北條氏に移りたりき過去。完了

六。いざ見て來む未來とて、馬を乘りいだしたり現在。完了

七。紀伊殿にておはせん未來程は、さてもありなん未來。完了

八。警固の武士、山陰道にかゝり、遷幸をなし奉りける過去間、高德が支度相違してけり過去。完了

九。隣の老媼よりもらひし過去絲萩の刈株、すばかり緑を吹いて現在。完了伸びたらむ未來。完了秋の色も思ひやられて現在。完了うれし。

一〇。幕使の一行は開港延期の談判に及びける過去に、延期は素より露國政府にて承諾したりしか過去。完了ども、こゝに困難なる現在は樺太境界の談判にてありき過去。

二。

相＼時	現在	現在完了	過去	過去完了	未來	未來完了
住む	(能相)住む	住みたり	住みき	住みたりき	住まん	住みたらん
	所相 住まる	住まれたり	住まれき	住まれたりき	住まれん	住まれたらん
	使役相 住ます	住ませたり	住ませき	住ませたりき	住ません	住ませたらん
	勢相 住まる	住まれたり	住まれき	住まれたりき	住まれん	住まれたらん
	敬相 住ませらる	住ませられたり	住ませられき	住ませられたりき	住ませられん	住ませられたらん
退く 自動詞四段活用	(能相)退く	退きぬ	退きき	退きにき	退かん	退きなん
	所相 退かる	退かれぬ	退かれき	退かれにき	退かれん	退かれなん
	使役相 退かしむ	退かしめぬ	退かしめき	退かしめにき	退かしめん	退かしめなん
	勢相 退かる	退かれぬ	退かれき	退かれにき	退かれん	退かれなん
	敬相 退かせ給ふ	退かせ給ひぬ	退かせ給ひき	退かせ給ひにき	退かせ給はん	退かせ給ひなん
退く 他動詞	(能相)退く	退けつ	退けき	退けてき	退けん	退けてん
	所相 退けらる	退けられつ	退けられき	退けられてき	退けられん	退けられてん
	使役相 退けさす	退けさせつ	退けさせき	退けさせてき	退けさせん	退けさせてん
	勢相 退くべし	――	退くべかりき	――	退くべからん	――

相＼時	現在	現在完了	過去	過去完了	未來	未來完了
愛す 下二段活用	敬相 退けらる	退けられつ	退けられき	退けられてき	退けられん	退けられてん
	(能相)愛す	愛しぬ	愛しき	愛しにき	愛せん	愛しなん
	所相 愛せらる	愛せられぬ	愛せられき	愛せられにき	愛せられん	愛せられなん
	使役相 愛せしむ	愛せしめぬ	愛せしめき	愛せしめにき	愛せしめん	愛せしめなん
	勢相 愛せらる	愛せられぬ	愛せられき	愛せられにき	愛せられん	愛せられなん
	敬相 愛せらる	愛せられぬ	愛せられき	愛せられにき	愛せられん	愛せられなん
決す	(能相)決す	決したり	決しき	決したりき	決せん	決したらん
	所相 決せらる	決せられたり	決せられき	決せられたりき	決せられん	決せられたらん
	使役相 決せしむ	決せしめたり	決せしめき	決せしめたりき	決せしめん	決せしめたらん
	勢相 決せらる	決せられたり	決せられき	決せられたりき	決せられん	決せられたらん
	敬相 決せさせらる	決せさせられたり	決せさせられき	決せさせられたりき	決せさせられん	決せさせられたらん

右ノ表ニテハ、過去、未來、完了ノ助動詞及ビ相ノ助動詞ハ、便宜ニヨリテタヾ一種ヲ擧グルニ止メタリ。退く(他動詞ノ)ノ勢相ニ現在完了、過去完了、未來完了ヲ缺キタルハ、べしヲ用ヰテハ、コレラヲアラハスコトヲ得ザルニヨルナリ。

二。(一)見られざらしむべし。(二)見られざるべからしむ。(三)見られしめざるべし。(四)見らるべからしめず。(五)見らるべからざらしむ。(六)見られしむべからず。(七)見しめらるべからざるべし。(八)見しめらるべからず。」

右ノ連語ノ意義ハ煩ハシケレバ、略セリ。マタ、コレラノ連語ヲ造ルニ、マヅ動詞見るハ連語ノ首ニ置クヲ要ス。次ニらるノ附ク助動詞ハ下二段活用ノ如キ活用ヲナスヤ、さす、しむノ三語ニ限ルガ故ニ、らるハ見るノ下ニ附ク外ハ、タヾしむノ下ニ附クノミナルコトニ注意スベシ。

類題

次の文章につきて動詞の時を説明せよ。

【一】下女の來て、昨夜、狼の吠えしを聞き給はざりしかといひぬ。

【二】かねていひあはせし身方に知らせつれど、更に應ぜず。

【三】建武中興の振はざりしは、當時の搢紳にその人なかりしによれり。

【四】夜な夜な守護せさせつることありしを、公は知り給はざりき。

【五】わが國も往時はこれに類したること多かりき。

【六】停車場には、また數名の同僚の先著せるあり。

【七】雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、いひがたき涼氣を催さしむ。

【八】豊太閤は常に意を工藝の上に注ぎて、奬勵せられしかば、京都伏見の間に名工輩出して、工藝の隆盛を極めたり。

【九】思ふ。與ふ。任ず。捕へる。

次の諸動詞につきて、相及び時をあらはす活用連語を別々に造り、更に時と相とを重ねたる活用連語を造れ。

【一〇】言ふ。しむ。る。たり。べし(べかり)。

第九章　助詞の承接

體言に附く助詞の承接

コ、ニ、イ、ヘルのガ連體形ヲ承クルハ、

「花を見るの記。」「入學せしむるの義務。」

ノ如ク、ソノ上ニ體言ノ略セラレタリト見ラルヽ場合ニ限ルト見ルヲ穩ナリトスベキガ如シ。連體形ガ直ニのノ下ナル體言ニ連ナル場合、例ヘバ

「花を見る㊀人」。「子を入學せしむる㊀親」。

ナドノノハ全ク衍ナリ。コレラハ

「人、花を見る」。「親、子を入學せしむ」。

トイフヲ書キ改メタルニテ、見ルハ人、入學セシムルハ親トイフ關係アリ。サレバ見るハ人ニ、入學せしむハ親ニ直ニ連ナルガタメニ、連體形トナレルナリ。ソノ間ニノヲ置クハ意味ナシ。『文法上許容スベキ事項』九（卷末附錄參照）ヲ解スルニハ、コノ心アルベシ。

〔例　題〕

次ノ文章ノウチニテ縦線ヲ引キタルハ、助詞ナリ。

一。敵の本陣は今や眼下にあり。

二。涙はらひて、これまでと、東へ西へわかれゆく。

三。何人も外國史に慘酷無道の事が多いのに驚く。

四。令弟が果して實業に適せりや否やを憂ひ申し候。

五。その美しさ、まことに形容し得べくもあらず。

六。今より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。

七。かゝる至難の學なるに、僅に四年にして業を成したるは、驚歎すべきことならずや。

八。たとひ、家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼にこそ死すべけれ。

九。泰時、運盡きたらば、鐵の築地を築くとも、助かり候はじ。運ありて君に仕ふべくば、これにて事足り候ふべし。

一〇。十分に張りたる白帆の、破れもするかと見ゆるまで、膨らみ孕みて、少し傾きたる船の舳先の水に突き入るばかり烈しく浪を截つて進む快さ、駿馬に鞭うちて曠原を馳するとは、また異にして趣あり。

一一。一二。一三。一四。

未然	已然	假定	決定
爲す	爲せば	爲すとも	爲せど(とも)
あり	あれば	ありとも	あれど(とも)
著る	著れば	著るとも	著れど(とも)
老ゆ	老いれば	老ゆとも	老ゆれど(とも)

	未然	已然	假定	決定
敎ふ	敎へ	敎ふれば	敎ふとも	敎ふれど(ども)
議す	議せ	議すれば	議すとも	議すれど(ども)
明なり	明なら	明なれば	明なりとも	明なれど(ども)
赫々たり	赫々たら	赫々たれば	赫々たりとも	赫々たれど(ども)
長し	長く	長ければ	長くとも	長けれど(ども)
新し	新しく	新しければ	新しくとも	新しけれど(ども)
召さる	召され	召さるれば	召さるとも	召さるれど(ども)
讀ます	讀ませ	讀ますれば	讀ますとも	讀ますれど(ども)
改めしむ	改めしめ	改めしむれば	改めしむとも	改めしむれど(ども)
聞きたり	聞きたら	聞きたれば	聞きたりとも	聞きたれど(ども)
遇ひぬ	遇ひな	遇ひぬれば	遇ひぬとも	遇ひぬれど(ども)
欲しき	——・	欲せしかば	———	欲せしかど(ども)
思はず	思はず	思はねば	思はずとも	思はねど(ども)
取るべし	取るべく	取るべければ	取るべくとも	取るべけれど(ども)

一五。成績の發表せらるるを、今日か明日かと待つ。

コノをハ體言ニ附ク助詞ニテ、コノ文ニハソノ附クベキ體言ノ略セラレタレバ、直ニ連體形ヲ承クベキナリ。サレバらるヲらるゝト改ムルヲ要ス。

一六。舷と舷の相觸るるばかりに、兩艇相接して進みぬ。

ばかりハ用言及ビ活用連語ノ連體形ヲ承ク。サレバ觸るる(下二段活用)ヲ觸るゝト改ムルヲ要ス。

一七。二十五より三と二の三倍を引けば、幾許なるや。

(「舷と舷の」ヲ「舷と舷との」ト改メテモ、ヨシ)。

原文ニテハ、三ト二ノ三倍ヲ引クカ、三ト二ノ三倍トヲ引クカ、明ナラズ。サレバ、ソノ意ノアルトコロヲ尋ネテ

「二十五より三と二との三倍を……」　25−(3+2)×3

「二十五より三と二との三倍とを……」　25−(3+2×3)

ノイヅレカニ改ムルヲ要ス。

(「幾許なるや」ヲ「幾許なるか」ト改メテモ、ヨシ)。

一八。この勝負に破らるるも、一方はなほ野球界の覇たり。

コノ文ニテハ「破らる」トイフガ假定ナルカ、決定ナルカ、明ナラズ。隨ッテ誤解ヲ生ズル處アリ。サレバもヲヤメテ、ともマタハど(ども)ノイヅレカヲ用キ分クルヲ要ス。卽チ

この勝負に破らるとも、一方はなほ野球界の覇たり。（假定）。

この勝負に破らるれど(ども)、一方はなほ野球界の覇たり。（決定）。

一九。國小なるも、國民の元氣盛なれば、外國に侮られず。

コノ文ニテハ「小なる」ガ假定ナルカ、決定ナルカ、明ナラズ。隨ッテ誤解ヲ生ズル處アリ。サレバもヲヤメテ、ともマタハど(ども)ノイヅレカヲ用キ分クルヲ要ス。卽チ

國小なりとも、國民の元氣盛なれば、外國に侮られず。（假定）。

國小なれど(ども)、國民の元氣盛なれば、外國に侮られず。（決定）。

類題

次の文章のうちより助詞をぬき出せ。

〔一〕勢に贋ふ者は榮え、これに逆ふ者は衰ふ。

〔二〕政府や門閥や權勢に依頼するこそ、男子の恥辱である。

〔三〕殘雪白き庭前にて、樗色の夕日を浴びつゝ、一同撮影を終ふ。

〔四〕善を見ては法とし、不善を見ては誡とす。

〔五〕日に夜に公の事にのみ、心を碎きて、寸時も暇あらせ給はざりき。

〔六〕儉より奢に移ることは易く、奢より儉に入ることはかたし。

〔七〕たとひ全世界を手にすとも、その品性を缺かば、何かせん。

〔八〕世の常の御使ならんには、幼弱の身、などか辭し申さではあるべき。

〔九〕夜に入れども、文書に御親署あらせらるゝ事ありとぞ。

〔一〇〕申さんもかしこきことながら、竊に漏れ承る所によれば、憲法草案の樞密院の會議に附せらるゝや、およそ四箇月の久しきに亙りぬ。

次の用言活用連語にはを附けて、未然と已然との事件をあらはせ。また ともとど(ども)とを附けて、假定の事件と決定せる事件とをあらはせ。

〔一一〕讀む。用ゐる。得。眺む。感ず。說きあかす。

〔一二〕詳なり。揚々たり。輕し。貧し。あり難し。

〔一三〕捨てらる。書かしむ。見ず。行きたり。榮えぬ。なしき。

次の文章に誤あらば正して、そを説明せよ。

【一四】日々の勤、苦ししとも、堪へ忍ぶべし。

【一五】われは弟らの來り迎ふに遇へり。

【一六】甲組と乙組の大部分は、出席したり。

【一七】かくの如き藥劑は、盛に廣告するも、その賣行いかゞあらん。

【一八】乘客少くも、舟は定時に漕ぎ出づべし。

第十章　品詞の轉成

六　補

轉成の名詞。 取扱、買入、申込ナドガ取扱ふ、買入る、申込むナドノ熟語ノ動詞ノ轉ジタル名詞ナルコトハ、本書ニイヘリ。カヤウノ例ニテハ取、買、申ナドハ動詞ノ連用形ナルコト、明ナリ。コレヲ動詞ヨリ轉ジタル名詞トハ見ルベカラズ。卽チ例ヘバ取扱ヲ取トイフ轉成ノ名詞ト扱トイフ轉成ノ名詞トノ熟語ナリトスルハ、非ナリ。

助動詞ガソノ附キタル動詞ト共ニ一ツノ活用連語トナリ、コノ活用連語ガ連用形ヨリ轉ジテ名詞トナルコトアリ。

囚はれの身。　いはれを聞く。　見られが惡し。

親泣かせの子。　見せしめのため。　恩知らずの男。

〔例題〕

一。古副詞 わ代名詞 が助詞 國名詞 に助詞 は助詞 國旗名詞 の助詞 さだめ名詞 なかり形容動詞 き助動詞

二。祖先名詞 の助詞 祭名詞 を助詞 愼み動詞 子孫名詞 の助詞 敎名詞 を助詞 忽せに副詞 せ動詞 ず助詞

三。われ代名詞 は助詞 はじめ副詞 何處代名詞 に助詞 導か動詞 る助動詞 べき助動詞 か助詞 を助詞 知ら動詞 ざり助動詞 き助動詞

四。われら代名詞 は助詞 一歩名詞 を助詞 進み動詞 て助動詞 は助詞 又接續詞 一歩名詞 を助詞 退く動詞

五。火球名詞 の助詞 如き助動詞 月名詞 は助詞 早く副詞 昇り動詞 て助動詞 丘名詞 の助詞 上名詞 に助詞 懸れ動詞 り助動詞

六。忽ち副詞 又副詞 千百數詞 の助詞 巨礮名詞 を助詞 放て動詞 る助動詞 が助詞 如き助動詞 聲名詞 あり名詞

七。早く（副詞）實務（名詞）に（助詞）當ら（動詞）せ（助動詞）活動（名詞）を（助詞）奬勵し（動詞）手工（名詞）技藝（名詞）を（助詞）授く（動詞）

八。維新（名詞）の（助詞）はじめ（名詞）に（助詞）神武（名詞）の（助詞）古（名詞）に（助詞）復る（動詞）と（助詞）いふ（動詞）大義（名詞）を（助詞）定め（動詞）られ（助動詞）し（助動詞）は（助詞）こ（代名詞）の（助詞）公（名詞）の（助詞）輔翼（名詞）の（助詞）力（名詞）なり（助動詞）けり（助動詞）上ノ一ナル古及ビさだめガ八ナル古及ビ定めト異ナル品詞ニ屬スルコトニ注意スベシ。コノ例題ハコヽニ意ヲ用キテ選擇シタリ。

類題

次の文章を一つ〳〵の單語に分ちて、その何品詞なるかをいへ。

【一】われも友も心にこの遊の徒爲ならざりしをよろこびあへり。

【二】こゝにたゞひとり住みたしとの念は、絕えず余が心中を往來せり。

【三】一人は濱邊に、ひとりは森の中に、樂しく遊びぬ。

【四】人々のよろこび、見るも樂しく、聞くもうれし。

【五】明日ふたゝび君とこゝにて相見ん。

【六】わが君のかれを召させたまふことこゝたゞびに及べり。

第十一章　單語の構造

熟語。 熟語トハ、二ツ以上ノ單語ノ複合シテ一ツノ單語トナリタルモノナルコト、前ニイヘリ。サレバ、某ノ語ガ一ツノ熟語ナルカ否カハ、ソレガ一ツノ單語ヲ成セルカ否カニヨル。例ヘバ「父母」共にいます」トイヒテ、「父」ト「母」トノ意ヲアラハセバ、ソハ熟語ニアラズシテ、單ニ二ツノ名詞ヲ連ネタルマデナリ。サレド「父母」ノ命に從ふべし」トイヒテ父母ヲ「親」トイフホドノ意ニ用キレバ、ソハ熟語ナリ。『徒然草』『世には心得ぬことのおほきなり』ノ段ニ「緣よりおち、馬車よりおちて、あやまちしつ」トアル「馬車」ハ、「馬」ト「車」トノ意ナレバ、コレモ熟語ニハアラズト知ルベシ。

動詞ノ連用形ヨリ轉ジタル名詞ハ他ノ名詞ト複合シテ、熟語ノ名詞ヲ成スコト、少カラズ。動詞、助動詞ニテ成ル活用連語ニモ、稀ニコノ例アリ。

よみ方。（ありか。き物。おち藥。かれ枝。し事（「仕事」ハ借字）。下よみ。——。肌ぎ。手おち。多がれ。相場し（「相場師」ハ借字）。囚はれ人。思はせぶり。したり顏。

動詞　七　動詞　人工名詞　の助詞　美名詞　を助詞　享受せ動詞　ば助詞　人名詞　の助詞　本多名詞　人名接尾辞（敬称）　に助詞　も係助詞　召し上がる動詞　こと形式名詞　を助詞　家人名詞　を助詞　代名詞　そ助詞　の助詞　便宜動詞　に助詞　先生名詞　方（敬意）名詞　は係助詞　事名詞　を助詞　聞く動詞　こと形式名詞　が助詞　明白形容動詞　原因名詞　を助詞　調べる動詞　こと（形式名詞）　に助詞　従う動詞　ば接続助詞　ならない形容詞　。句点

八　関白原因名詞　安易形容動詞　から接続助詞　事名詞　を助詞　本多人名接尾辞（敬称）　に助詞　頼む動詞　と助詞　怒る動詞　ような形容詞　こと（形式名詞）　を助詞　聞く動詞　と助詞　人名詞　が助詞　やる動詞　。句点

七　果し合い名詞　を助詞　然ら動詞　ば接続助詞　人工名詞　の助詞　美名詞　を助詞　享受せ動詞　ば助詞　人名詞　の助詞　便宜動詞　に助詞　先生名詞　方（敬意）名詞　は係助詞　事名詞　を助詞　聞く動詞　こと形式名詞　が助詞　明白形容動詞　原因名詞　を助詞　調べる動詞　こと（形式名詞）　に助詞　従う動詞　ば接続助詞　ならない形容詞　。句点

六　家康名詞　は係助詞　秀吉名詞　を助詞　便宜動詞　に助詞　任し上げる動詞　た助動詞　家人名詞　を助詞　聞く動詞　こと（形式名詞）　の助詞　上名詞　を助詞　聞に助詞　矢名詞　の助詞　籠手（鎧）名詞　が助詞　頑丈形容動詞　な助動詞　作っ動詞　た助動詞　のは係助詞　那須名詞　の助詞　しの原（野）名詞　聞に助詞　あられる動詞　た助動詞　こと形式名詞　を助詞

練習問題

次の文章を一つの単語となる様に構造を説明せよ。

第十一章　単語の構造

一、山々名詞（総）聞に助詞　逼ら動詞　れ助動詞　た助動詞　時名詞　の助詞　ように助詞　これ代名詞　が助詞　動す動詞　こいちら名詞　聞に助詞　日名詞　に助詞　映ゆ動詞　れ助動詞　形容詞　ば接続助詞　。句点

二、大君（敬）名詞　の助詞　御名詞　人名詞　に助詞　は係助詞　頭（接頭語）名詞　と助詞　なる動詞　ば接続助詞　あら動詞　ら助動詞　じ助動詞　。句点

三、彼女〈副詞（程度）〉名詞　は係助詞　ハンサム（な）形容動詞　な助動詞　守衛名詞　に助詞　も係助詞　負け動詞　ず助動詞　接尾辞（動詞）　せ助動詞　ら助動詞　れ助動詞　た助動詞　。句点

四、雄弁名詞　は係助詞　聴衆名詞　を助詞　感動名詞　さ接尾辞　せ動詞　る助動詞　に助詞　足形容詞　る助動詞　演説名詞　で助詞　あっ動詞　た助動詞　。句点

五、月日（熟）名詞　の助詞　小車（人名）名詞　は係助詞　あくる（連体）動詞　て助詞　早く副詞　も助詞　水名詞　より助詞　清形容詞　き助動詞　流る動詞　ること形式名詞　の助詞　人名詞　が助詞　千古名詞　を助詞　惜ん動詞　だ助動詞　こと形式名詞　に助詞　外名詞　ならない形容詞　。句点

【一】風采は優美に、態度は荘重ならざるべからず。

【二】競技は競走、競飛、競馬、競車、投丸、投槍、相撲、拳闘等なり。

【三】劇しき風に、焔は横さまに吹き靡けられ、滅ゑんとして総に燃ゆ。

【四】灰は踝を没し、又、膝を没す。

【五】われらは皆徒だちとなりて、驢をば口とりの童に預け置きぬ。

【六】一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴て、且滑り、且降る。

【七】議事に深く叡慮をとゞめさせ給へることは申すまでもなし。

【八】この御詞を承るもの、誰れか感泣せざらん。

【九】時いまだ至らずして、再び世の中の亂れにたるは、あながちにこの君の御はからひのあやまちにはあらじ。

【一〇】見よ、見よ、木々の綠も浮かべる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日のひかりも、鶯の啼く音も、空の色も、みなおのづから浮世のものならず。

下卷

第一章　連語　文

一

連語。 單語ト熟語トノ差別ハ、既ニ屢說キタリ。卽チ熟語トイフモ、單語ノ一種ナリ。サテコノ熟語ト連語トノ差別ハイカニ。コハ甚ダ明ナリ。熟語ハ文章中ニアリテ、一ツノ品詞トシテ取扱フベキモノナレド、連語ハ然ラズ、ナホコレヲ構造セル種々ノ品詞ニ分チテ取扱フベキモノナリ。サレバ賣聲トイヘバ熟語ニテ、賣る聲トイヘバ連語ナルノ類ナリ。

文。 連語ト文トノ差別モ、甚ダワカリ易シ。イカニ長クトモ連語ハ思想ヲアラハサズ。文ハイカニ短クトモ、何ガ何ナルカ、何ガ何スルカナドイフコトヲアラハス。マタ句及ビ節トイフモノト連語マタハ文トノ差別ニツキテハ、後章ノ說明ヲ待ツベシ。

〔例題〕

一。風吹く。（文）。

二。流るゝ水。（連語）。

三。最も盛なり。（連語）。
四。これも珍し。（文）。
五。さしてゆく笠置の山を出てしより。（連語）。
六。あめが下にはかくれがもなし。（文）。

第二章　連語の構造

同趣の用言、活用連語の連結。　コヽニ「上なる用言、活用連語に連用形を用ゐて、その意をいひさしおく」トイヘルハ、所謂動詞、助動詞及ビ形容詞ノ中止法ヲ用ヰルコトナリ。コノ動詞ヲ連結スル場合ニ中間ニ接續詞ヲ用ヰルニハ、論ナケレド、單ニ連記スルニ、コレヲ熟語ノ動詞ト混同スルコトアリ。

追ひかく、受取る、買入る、賣捌く、見わたす……（熟語ノ動詞）。
出で入る、讀み書く、送り迎ふ、見聞く……（動詞ノ連結）。

サレバ、前ノ例ハ、單語ナレド、後ノ例ハ連語ナリト知ルベシ。

「發育し、生長せり」ハ「發育し、生長す」トイフヲ一ツノ連語ト見テ、コレニ完了ノ助動詞「り」ヲ附ケタルモノ、卽チ「發育し、生長せり」トシテモ解セラル。以下「敬せ

られ且愛せられたり」、「舞はしめ或は歌はしめき」、「鳴かずまた飛ばざらん」ナド、皆同樣ニ解スルコトヲ得。　ナホ本書第一〇節ヲ參見スベシ。

コノ節ニ說クトコロハ、本書前節ニ說キタルガ如ク、逆ニ見ルコトヲ得。例ヘバ「送りまた迎ふる人」ハ「送る人」ト「迎ふる人」トヲ「また」ニテ接續シテ、上ナル連語ノ下ニ附キタル「人」ヲ省キタルモノ、マタ「學者にて文人たりし父」ハ「學者たりし父」ト「文人たりし父」トヲ連結シテ、上ナル連語ノ「父」ヲ省キタルモノトヤウニ解スルコトヲ得。　但シ「師たり弟たる關係」ハ「師たる關係」ト「弟たる關係」トヲ連結シタルモノトハ見ルベカラズ。

右ノ例ニテ、「送りまた迎ふる人」トイヘバ、同ジ人ガ送モ迎モスルコトニテ、送ル人ト迎フル人ト卽チ別々ノ人ノ意ニアラズト解スルモノアリ。「細く長き道」トイヘバ、一ツノ道ガ細クテ長キナリ、細キ道ト長キ道トヲ連結スルニハ「細き長き道」トイフベキナリト說クモノモアリ。　サレド、共ニアナガチニ論ズベカラザルガ如シ。

世ノ文典ニ連語ノ構造ヲ說クコト、至ラザルトコロアルガ如シ。體言ノ連結ニハ少シモ言及セズ、用言、活用連語ノ連結ニツキテハ、重文ノ構造ヲ說クニ、

節ノ述語トシテ、用言、活用連語ニ所謂中止法ヲ用キルトノミ教フルナリ。體言ノ連結ハトモアレ、用言、活用連語ハ必ズシモ節ノ述語トシテノミソノ連結ヲ說クベカラザルコト、本書本文ニ說明セルガ如シ。サレバ本書ハ、文ノ構造ヲ說ク基礎トシテ、連語ノ構造トイフ一章ヲ創設セルナリ。

〔例　題〕

一。はひ、立ち、歩む。　質問し、答辯し、討論し、決議す。

二。身を修め、家を齊ふ。　歌に詠じ、詩に賦す。

三。小く、堅し。　讀ませ、書かす。

四。解說せられ、批評せらる。

五。甚だ速に、最も確なり。　戰ひて、魚にあらず。

六。書を讀み、字を習へり。　招かれ、出席せり。　外國に留學し、化學を研究しき。　技を練り、優勝旗を得ん。

右ノ六題、スベテ接續詞、助詞ナドヲ用キズシテ、連結シタル例ヲ示ス。コレラヲ用キテ、例ヘバ、次ノ如クイフハ、モトヨリ妨ナシ。

はひ、立ち、また歩む。　愛すべく、親しむべし。

愛すべくして、親しむべし。

七。天を怨みず、人を尤めぬ人。　天を怨みず、人を尤めねば。　天を怨みず、人を尤めねども。

八。朝は草を刈らしめられ、夜は繩をなはしめられ、夜は繩をなはしめらるれば。　朝は草を刈らしめられ、夜は繩をなはしめらるれども。

右ノ七及ビ八ノ兩題ハ普通ノ連結ノ例ナリ。コノ八ニテ上ナル連語ノ助動詞られ、マタハられトシ、トヲ二ツナガラ略シテ、

朝は草を刈らしめ、夜は繩をなはしめらるゝ童。　……

朝は草を刈り、夜は繩をなはしめらるゝ童。　……

ナド書キテモ、意ハ通ズ。サレド、七ニテ上ナル連語ノ助動詞ずヲ略シテ、

天を怨み、人を尤めぬ人。

ナドトスルハ、非ナリト知ルベシ。

九。「はじめより時勢の眞相も知り、人理の大道を履修す」トイフ同趣ノ複

雜ナル連語ヲ連結シタルモノヲ一ツノ活用連語ト見テ、コレニ連體形ヲ用キ、下「才識」以下ニ連ネタルモノナリ。コハマタ「はじめより時勢の眞相も知りたり」ト「人理の大道を履修する才識を備へたり」トノ二ツノ連語ヲ連結シテ、コレヲ下「者」以下ニ連ネタルモノトモ、語法ノ上ヨリハ解セラルモ。サレド、文章ノ意味ヨリ推シテ、前ノ如ク解スルヲ當レリトスベシ。オヨソ、普通ノ文章ニテ、カヤウノ兩意ニ解セラルヽモノヲモ、卒讀スレバ、心ヅカデ過グルコト多シ。コレニ文法ノ知識ヲ應用シテ明確ナル解釋ヲナスコト必要ナリトス。

10。「扶桑第一の好風なり」ト「凡そ洞庭、西湖に恥ぢず」トヲ連結セルモノニテ、上ナル連語ノ助動詞なりヲ略シテ、にしてヲ加ヘタリ。

類題

次の組々の連語を連結せよ。

【一】起く。臥す。　春に來る。秋に去る。　或は憂ふ。或は樂しむ。

【二】製造す。販賣す。　東西に長し。南北に短し。

【三】朗讀せしむ。講義せしむ。　歡迎せらる。優待せらる。

【四】長を尊べり。幼を愛しめり。　かれを捨てん。これを取らん。

【五】質朴なり。愛すべし。　名望家なり。縣會議長たり。

次の連語を連結して、これに體言及び助詞ばともどもを連ねよ。

【六】保護すべし。奬勵すべし。

【七】學に通じたり。藝に達したり。

次の連語の連結を說明せよ。

【八】これを聞き、これを見る人ごとに。

【九】文にも秀て、武にも勝れ、懸河の辯に巧に、高雅の趣味に富む。

【一〇】天をば黃金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なる群れる島嶼をば淡青なる雲にまがはせたり。

第三章　單文の成立

單文。コヽニ「たゞ一組の主語と述語と」トイヘルハ文ノ成立ニ必要ナル關係ヲ生ズル主語ト述語トノ一組ノ意ニテ、一組ノ主語マタハ一組ノ述語ノ意ニハアラズ。主語マタハ述語イカニ多クトモ、主語ノ一團ト述語ノ一團

トガ生ズル關係單一ナルモノハ、コレマタ一組ニテ、ソノ文ハナホ單文タルコトヲ失ハザルベシ。

構造ノ上ヨリイヘバ、

「來ること遲し。」　「遠きものは至らず。」　「得たるところ多かりき。」

ノこと、もの、ところガ主語ニテ、來る、遠き、得たるハコレラノ修飾語ト見ルベキモノナレド、思想ノ主題タル事物ヲアラハス主要ナル部分ハ、來る、遠き及ビ得たるニ存スサレバ本書ハ便宜ニヨリテ「來ること」「遠きもの」「得たるところ」ヲ述語ガ主語トナレルモノト定メタリ。カヤウニ用キル體言ハこと、もの及ビところニ限レルガ如シ。而シテこと、ものノ略セラルヽコト多キハ、特ニ注意スベキコトニテ、コノ點ヨリ考ヘテモ、こと、ものヲ主語ト定ムルハ、說明迂遠ナルノ嫌アリテ不便ナリ。

世ノ文典ニ、說明ノ便宜ニヨリテ、

「正成は忠臣なり。」　「父は縣會議員たり。」　「その仁天のごとし。」

ナドノなり、たり、ごとしヲ述語ト見、忠臣、縣會議員、天ヲ客語（補語）ト見ルモノアリ。モトヨリ敍述ノ主要ナル部分ハ、コレラノ忠臣、縣會議員及ビ天トイフ語ニ存スルモノナレバ、既ニ說明ノ便宜ヲ思フ上ハ、本書ノ如ク「忠臣なり」、「縣會議員たり」、「天のごとし」ヲ述語ガ述語トナレルモノト定ムルガ、利ナリトスベキガ如シ。ナホ

「汝は誰ぞ。」　「今著きたるは終列車か。」

ノ「誰ぞ」、「終列車か」モ、ソノぞ及ビかヲ助詞ガ述語トナルト說クヨリモ、本書ノ如ク說クガ、穩ナルベシ。

〔例　題〕

一。快（主語）甚だし（述語）。

二。達人は（主語）大觀す（述語）。

三。萬民（主語）皆天日の光を仰ぐ（述語）。

四。景により情（主語）起る（述語）。

五。汽車は（主語）昨夜新橋を發し（述語）、今朝神戸に著きたり（述語）。

六。われは（主語）獨り舷頭に立ちて（述語）、河上の夜景を貪り看る（述語）。

七。東南の一角のみ（主語）、やゝ低くして（述語）、打ち開けたり（述語）。

八。敎ふる所は（主語）忠孝の道義（述語）、文武の學藝なり（述語）。

類題

次の單文の主語と述語とを指示せよ。

【一】空晴る。

【二】かれは何人ぞ。

【三】あり難きは親の恩なり。

【四】態度は莊重ならざるべからず。

【五】敵の鬨の聲こゝかしこに聞えけり。

【六】近きものは目にも見よ。

【七】言ふこと行はれざるはなし。

【八】西郷實にその巨魁たり、謀主たり。

【九】灰の如き微塵砂より成れる兩岸は、模糊として一線を描きぬ。

【一〇】卑劣なるもの、汚濁なるものは、おのづから社會の制裁を受けて、その勢力を失墜せん。

第四章　文の客語

三　自動の標準。コヽニイフ自動詞、卽チ自動ノ標準ヲ要スル自動詞ハ、カノ有對自動詞マタハ不完全自動詞(コノ別記ノ四九頁參見)トイフモノナリ。

三三　他動の標準。コヽニイフ他動詞、卽チ他動ノ標準ヲ要スル他動詞ハ、カノ複對他動詞マタハ不完全他動詞(コノ別記ノ五〇頁參見)トイフモノナリ。

二六　文の客語。本書ニ客語ト總稱スルモノノウチニテ、自動、他動ノ標準及ビ所相使役相ノ標準、卽チスベテ標準ヲイフ語ヲ別ニ補語ト名ヅケ、餘ノ客語卽チ他動ノ目的ヲイフ語ヲ專ラ客語ト名ヅケ、標準ヲイフ語ヲ第一客語ト名ヅケ、標準ヲイフ語ノウチニテ、例ヘバ

「造營成る。」「雀、蛤となる。」

ノなるナドノ如ク、或場合ニハ他ノ語ヲ取リテ始メテ動作ノ完クナル動詞ヲ補語ヲ取ル動詞トシ、ソノ蛤と

ナドヲ補語ト名ヅケ、ソノ他ヲ第二客語ト名ヅケ、ナホ

「天くらくなる。」「風俗野鄙になる。」「其德を二三にす。」……(一)

「六は三より多し。」「苛政は虎よりも猛なり。」……(二)

「月色銀の如し。」「容貌愚なるが如し。」……(三)

下巻

「正成は忠臣なり。」「東京は大都會たり。」……(四)

「これは何ぞ。」「鯨は魚か。」……(五)

ナドノくらく、野鄙に、二三に、三より、虎よりも、銀の、愚なるが、忠臣、大都會、何、魚

ヲモ補語トスルコトアリ(芳賀博士著『中等教科明治文典』)。コノ補語トイフハ、大體、英文法ニイフ Complement ニ、第一客語ハ Direct object ニ、第二客語ハ Indirect object ニ當ルガ如シ。但シモトヨリ多少ノ出入アルヲ免レズ。

カヤウニ、客語ト補語トハ、文典ニヨリテ名目ノ立テ方相異ナリ。サレバ本書ハ一切コレヲ客語トイフ一大語類ニ包括シテ、敢ヘテ別ヲ立テズ。コレ法格ノ上ニ差等ヲ設クルノ要ナキト、ソノ分別ノ初學者ニハ釋然タラシメ難キモノアルトニヨルナリ。而シテ(一)ノくらく、野卑に、二三に、(二)ノ三より、虎より

モノ如キハ、コレヲ述語ニ屬スル修飾語トス。マタ(三)ノ銀の、愚なるが、(四)ノ忠臣、大都會、(五)ノ何、魚ノ如キハ、コレヲ下ナル動詞、形容詞、助動詞及ビ助詞ト共ニ、客一ッノ連語ガ述語ヲ成スモノト見ルコト、前ニ說キタリ。

コヽニ擧ゲタル例ノウチニテ、

「生徒は書を讀み、文を作ることを學ぶ。」

ノ讀みヲ客語トスルコト、奇ナルガ如クナレド、本書上欄ニ注シタルガ如ク、コハ「讀むことを」トアルベキヲ「作ることを」ト連結セシムルガタメニ、改メタルニテ、「讀むことを」ヲ一ッノ連語ガ客語トナリタルモノト定ムル上ハ、讀みヲ客語ト見ルコト、必然ノ結果ナリ。構造ノ上ヨリイヘバ、ことガ客語ニテ、「書を讀み、文を作る」ハソノ修飾語ナレド、動作ノ目的ヲイフニ重要ナル部分ハ、却ッテコノ讀みト作るトニ存ス。隨ッテ作ることをヲ客語トスルニ異議ナキ上ハ、讀みヲモ客語ト見ルベキナリ。

〔例題〕

一。少女(主語)花を(客語)賣る(述語)。

二。翁(主語)牛に(客語)乘れり(述語)。

三。農夫は(主語)麥を(客語)車に(客語)載す(述語)。

四。眹(主語)汝を以て(客語)股肱と(客語)す(述語)。

五。アメリカは(主語)コロンブスに(客語)發見せられたり(述語)。

六。われは(主語)友をして(客語)事情を(客語)かれに(客語)告げしめたり(述語)。

七。松籟は(主語)頻に琴音を(客語)弄して(述語)遠來の客を(客語)慰むべし(述語)。

八。大臣(主語)、公卿(主語)悉く攝津の國福原の京に(客語)移り給ひぬ(述語)

九。赤きもの(主語)、紫なるもの(主語)、金の如きもの(主語)、銀の如きもの(主語)、一時に眼界に(客語)映じ來る(述語)。

一〇。正行(主語)、頭を(客語)地に(客語)つけて(述語)、とかくの敕答に(客語)及ばず(述語)、たゞこれを(客語)最後の參內なりと(客語)思ひ定めて(述語)、退出す(述語)。

コノ例ノ「參內なりと」ハ、參內なりヲ一ツノ體言ト見テ、コレヲとニテ承ケタルナリ(本書中卷第六〇節參見)。サレバコレヲ客語ト定ム。

類題

次の單文の主語と述語と客語とを指示せよ。

【一】人、各その業をたのしむべし。

【二】その功德、日月と光を爭ふ。

【三】われは奇を好む心に驅られて、直に踵を兵卒に接したり。

【四】官吏は賜暇の惠に浴して、避暑旅行など、思ひ〳〵に企つ。

【五】熔巖の赤き影と明月の青き影とは、波面に二條の長蛇を跳らしめぬ。

【六】老翁が灰色の面は熱心の潮に彩られたり。

【七】作者は或はその新曲を奏し、或はその新作を朗讀して、是非の審判を求めき。

【八】將に沒せんとする日は、熾なる火の如く、天をば黃金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なる群れる島嶼をば淡青なる雲にまがはせたり。

第五章　文主

文主、コ、ニ擧ゲタル例ノ「會計は、幹事これを掌る。」ノ「會計は」ヲ「會計をば」ト解シ、コレヲモ客語ナリ)トシテ說明スルコトアリ。サレド靜ニ考フレバ、コノ文ノアラハス思想ノ主題ハ幹事ニハアラズシテ、會計ナルコト、オノヅカラ覺テルベシ。サレバ會計ハ文主ナルコト明ナリ。口語ニテハ通常これをヲ略シテ次ノ如クイヘバ、會計ノ文主ナル會計は幹事が掌る。

〔例題〕

一。石炭は(文主)火力(主語)強し(述語)。
二。金剛石は(文主)産出(主語)稀なり(述語)。
三。壯麗(文主)、比(主語)なし(述語)。
四。駱駝は(文主)、その性(主語)、よく渴に(客語)堪ふ(述語)。
五。酒は(文主)われ(主語)これを(客語)好まず(述語)。
六。われ(文主)、少き頃より煙霞の癖(主語)あり(述語)。
七。斜なるは(文主)、形(主語)、臥したる牛のごとし(述語)。
八。幹事(文主)及び評議員は(文主)、會員(主語)これを(客語)選擧す(述語)。

類題

次の單文の文主及び主語、述語、客語を指示せよ。

【一】この河は流急なり。
【二】かれらは國家に寸功なし。
【三】酒と煙草とは養生に害あり。
【四】庭は廣さ十坪に過ぎず。

【五】わが軍、士氣ます〳〵旺盛なり。
【六】倫敦支店は某法學士これが支配人たり。
【七】選擧は選擧人自ら之を行ふべし。
【八】君の功績は何人もこれを認めざる能はざるべし。

第六章　文の修飾語

修飾語の種類。　修飾語ヲソノ職分ニヨリテ別チテ形容詞的修飾語ト副詞的修飾語トノ二ツトスルコト、本書ニ說キタリ。コハ文ノ要素タル主語、述語、客語及ビ文主ニ屬スル修飾語ニツキテ立テタル分類ナレド、他ノ修飾語ニ屬スル修飾語モ、コノ二類ノ外ニナシ。卽チ形容詞的修飾語ヲ構成スル動詞、形容詞活用連語ノ連體形ヲ修飾スルニ用ヰルベキハ、副詞的修飾語ニテ、

懸河の如く滔々たる雄辯は、正面に列席せる判檢事及び靜肅に竝み居る傍聽人に極めて深き感動を與へたり。

マタ、コレラ形容詞的修飾語ニ伴ナフコトアル他動ノ目的及ビ標準、自動所相使役相ノ標準ヲイフ語ヲ修飾スルニ用ヰルベキハ、形容詞的修飾語、

盛の花を見る人、山に入る日ををしむ。

われは途にてその家を近き郊外に移す友にあへり。

飢ゑたる鷲に追はれたる雀は、檐の下に隠れたり。

遠來の客を樂しましむる設備は、既に整へり。

が、のごとりナドノ助詞ト連結セル體言マタハ體言ニ準ズベキ連語ナドニテ成ル形容詞的修飾語ヲ修飾スル修飾語ハ、マタ形容詞的修飾語ナリ。

この河より北は、新しき學校の敷地なり。

その席上にての相談は、大損害を受けたる大阪市への火災見舞の事なりき。

次ニ副詞的修飾語ヲ成ス副詞ヲ修飾スル修飾語ハ、副詞的修飾語ニテ、

火はます〳〵盛に燃えあがれり。

ソノ他ノ副詞的修飾語ノウチニテ、主要部分ガ用言ニテ成レルモノヲ修飾スル修飾語ハ副詞的修飾語、

かれ大いに愧ぢて答へず。

しきりに打てども馬進まず。

主要ナル部分ガ體言ニテ成レルモノヲ修飾スル修飾語ハ、形容詞的修飾語ナリ。

小川家の前を流る。

人々は懐しき學校にて談話會を開く。

サレバ、文ノ要素ヲ修飾スル修飾語モ、コレラノ修飾語ヲ修飾スル修飾語モ、スベテ形容詞的修飾語ト副詞的修飾語トノ二ツノ外ニ出デズ。

副詞的修飾語ノウチニテ、助詞ニヲナドニ連結セル體言ニテ成ルモノハ、コレヲ、客語ト混同スルコトアリ。マタ世ノ文典ニコレヲ客語(所謂補語ヲモ含ム)ト見ルモノアリ。サレド、本書ノ説ク客語ハ、ソレナクテハ述語ノ意ノ完カラヌモノニ限ルモノナレバ、コレヲ缺キテハ文ハ成立セザルホドノ重キモノナリ。修飾語ハコレト異ナリ、ソレナクトモ、述語ノ意ノ完キモノニテ、ソノ有無ハ文ノ成立ニハ關係ナシ(モトヨリテ、ソノ語ノアラハス意味ダケノ出入ハアレドモ)。本書ニ擧ゲタル例ニ就キテ聊カ辯ゼンニ、

父は大阪に行きたり。

コノ文ニテ、行くトイフ動作ハ「大阪」ナドイフ事物ナクトモ、ソノマヽニテ行ハルヽ動作ナリ。大阪にトイフハ、タヾソノ「行」キツクベキ地ヲ示シタルマデニテ、コノ物ノ有無ハ行くトイフ動作ノ成立不成立ニ關係ナシ。コレヲ、同ジ助詞にヲ用キテアラハス動作ノ標準ヲイフ語、例ヘバ

「月影水に映る。」

ノ水にト比ブルニ、コノ場合ノ動作映るハ「水」ナドイフ事物ナクテハ成立セズ。卽チ水ニナドイフ語ヲ用キザレバ、映るトイフ語ハ意味ナキモノトナルナリ。行くハ係ルベキ事物ナクテモ行ハレ、映るハ係ルベキ事物ナクテハ行ハレズ。畢竟、動詞ノ性ニヨリテ、客語ヲ要スルト要セヌトガ分ルヽナリ。

「小川、家の前を流る。」

ノ流るトイフ動作ハ「前」ナドイフ事物ナクトモ、ソノマヽニテ行ハルヽ動作ナリ。前をトイフハ、タヾソノ「流」ルヽ位置ヲ示シタルマデニテ、コノ物ノ有無ハ流るトイフ動作ノ成立不成立ニ關係ナシ。流るハ自動詞（コレニ對スル他動詞ニハ流すトイフガアリ）ナレバ、ソノ動作ニハ、目的ノ處分スベキモノナキハ、モトヨリノコトニテ、コノ前をノをハ動作ノ目的ヲ示スガタメノ助詞ニハアラズ。マタ流るハ、自動詞ノウチニテモ、ソノ係ルベキ標準ナクシテ、意味ノ完キモノナレバ、前をノをハ動作ノ標準ヲ示スガタメノヲニモアラズ。本書ニモ說キタルガ如ク、文ノ客語ハ他動ノ目的及ビ標準、自動所相使役相ノ標準タル事物ヲアラハスモノニテ、コレラノ目的及ビ標準ヲ要スルト要セヌトハ、ソノ文ノ述語タル動詞ノ性ニヨリテ分ル。サレバ、助詞ノをニナドヲ用キテアルト否トニヨリテ、客語タリヤ修飾語タリヤヲ判ゼントスルハ、事ノ本末ヲ誤リタルモノナリ。心スベキコトナリトス。

〔例　題〕

一。遠くアメリカまでも續きたる漫々たる海、樓に登れば南にあたりて晴れたる日には青疊を敷きたるが如く見ゆ。

二。そよ〳〵と稻葉の上をわたる夕の風、晝へ難きまで、いと涼し。

三。松の梢にかゝれる夜半の月、晝よりもなほ明なり。

四。市中の大小の呉服店は、種々の意匠を凝らしたる新しく珍しき多物を既に二三日前より相競ひて盛に賣り出せり。

五。この日特に臨場せられたる總裁宮殿下の御傍に侍りたる會長は、今回の競技のために制定したる七寶製のメダルを新にレコードを作れる名譽の優勝者に、洋々たる奏樂の裡に手づから與へたり。

六。御見學のために巡遊せられたる御留學中の韓國皇太子は熱誠なる北海道民に到る處にて盛に歡迎せられ給へり。

七。當局の大臣はをりしも官房に詰め居たる祕書官をして來る月曜日の正午に官邸にて面會すべき旨をはる〳〵上京したる各府縣の委員に懇に傳へしめき。

八。君子の交、眞に淡きこと恰も水のごとし。

以上八題ハ、イヅレモ修飾語ヲ加ヘタル例ヲ示シタルマデニテ、成るべく多く〳〵加ヘタルモノトシテ示セルニハアラズ。

類題

次の文に成るべく多く修飾語を加へよ。

【一】汽車走れり。

【二】犬、兎を逐ふ。

【三】樓、水に臨む。

【四】家新し。

【五】父、名望家たり。

【六】紳士は從者をして道を農夫に問はしめたり。

【七】郵送費は申込人これを支拂ふべし。

第七章　單文の解剖

主部、述部、客部、文主部。　客語ハ述語ト共ニ主語タル事物ノ動作マタハ有樣ヲ敍述スルモノナレバ、意味ノ上ヨリイヒテモ、述語ニ從屬スベク、コレヲ主語及ビ述語ト相對立セシメンコト、恰カ當ラザルニ似タレド、客語ニモ修飾語ノ附屬スルガアレバ、コレヲ併セテ客部トスルコト、便宜ナラズトセズ。而シテ客部ト述部トヲ併稱シテ、更ニ一ツノ名目ヲ立テンハ、稍煩ハシキ嫌アルガ故ニ、姑ク本書ノ所說ヲ用ヰルコトトセルナリ。

〔例題〕

一。社會は善惡正邪の戰場なり。

主部　社會は（主語）
述部　善惡正邪の（修飾語）戰場なり（述語）

二。西鄕、實にその巨魁たり、謀主たり。

主部　西鄕（主語）
述部　實に（修飾語）その（修飾語）巨魁たり（述語）
同　謀主たり（述語）

コノ文ニテ實に及ビそのハソノ意共ニ巨魁たりノミナラデ、謀主たりニモカヽルモノナレド、構成ノ上ヨリハ一方ノ巨魁たりノミニ屬セシムベシ。以下、カヤウノ例多シ。一々コトワラズ。準ジテ知ルベシ。

三。君の心事まことに悲しからずや。

主部　君の（修飾語）心事（主語）
述部　まことに（修飾語）悲しからずや（述語）

四。治承四年の水無月の頃、俄に都うつりありき。

主部　都うつり（主語）
述部　治承四年の（修飾語）水無月の頃（修飾語）俄に（修飾語）ありき（述語）

コノ文ノ述部ヲ構成スル修飾語ノウチニテ、直接ニ述語ありきヲ修飾スルハ、頃ト俄ニトニテ、水無月のハ頃ノ修飾語、治承四年のハ水無月ノ修飾語ナリ。コノ差別ヲ知ラシメンガタメニ、「治承四年の」及ビ「水無月の」ノ下ニ一々修飾語ト註スルコトヲナサズ、コレラヲ頃ト連ネ記シテ、ソノ下ニ修飾語ト註シ、右傍ナル雙縱線ヲ別々ニ「治承四年の」ト「水無月の」ト「頃」トニ施シテ、ソレガ三ツノ修飾語ノ集リテ成レルモノナルヲ示スコトトセリ。コレ、本書ニ示シタル例ニハ聊カ違フトコロアレバ、コヽニコトワリオクナリ。

五。精確なる科學的知識は、なほ銳利なる器械の如し。

主部　精確なる（修飾語）科學的知識は（主語）
述部　なほ（修飾語）銳利なる（修飾語）器械の如し（述語）

六。この盛時に遭ひまつれる臣民、いかでか進みて報效を圖らざるべき。

主部　この盛時に（修飾語）遭ひまつれる（修飾語）臣民（主語）
述部　いかでか（修飾語）進みて（修飾語）圖らざるべき（述語）
客部　報效を（客語）

七。わが兵士は、近年、外國における數度の戰爭において、人目を眩すべき武勇をあらはしたり。

主部（わが 修飾語）（兵士は 主語）
述部（近年 修飾語）（外國における數度の戰爭において 修飾語）（あらはしたり 述語）
客部（人目を眩すべき 修飾語）（武勇を 客語）

八。傳奏、未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡しける。

主部（傳奏 主語）
述部（未だ奏せざる 修飾語）（まづ 修飾語）（濡しける 述語）
客部（直衣の 修飾語）（袖をぞ 客語）

九。賴朝鎌倉に入りしより、既に自家を經營する志あり。

文主部（賴朝 主語）
主部（自家を經營する 修飾語）（志 主語）
述部（鎌倉に入りしより 修飾語）（既に 修飾語）（あり 述語）

一〇。人倫の變に臨んで、秋霜烈日の如き志氣を奮興せしむるもの、武士道

に若くはなし。

主部（人倫の變に臨んで 修飾語）（秋霜烈日の如き 修飾語）（志氣を奮興せしむるもの 主語）
述部（若くはなし 述語）
客部（武士道に 客語）

類題

次の文を解剖せよ。

【一】北海道には、野生の萩、甚だ多し。
【二】志士は精神界における武士なり。
【三】今度の合戰天下の安否たるべし。
【四】この期間なる武士の行爲を支配せしものは、すなはち武士道なり。
【五】かゝる場合において、志士たるもの、必ず果斷決行を要す。
【六】風雅の嗜は人の一生をして興味多からしむ。
【七】世に仕ふる程の人、たれかひとり故郷に殘り居らむ。
【八】義經その志驕りて、勇を恃み、みづからその禍をとれり。

【九】　登臨を試るべき丘陵山嶽は、吾等の前に屹立して、選擇を待てり。

【一〇】　善良なる讀書は、よく眠れる趣味識を警醒し、よくこれを啓發し、助成し、清新なる思想、斬新なる筆力を涵養す。

第八章　句　複文

形容詞的句。　文ヲ變ジテ形容詞的句トスルニハ、本書ニ說キタルガ如ク、ソノ述語タル用言、活用連語ニ連體形ヲ用キル外ニ、通常、モトノ文ノ主語ノ下ニノマタハガトイフ助詞ヲ用キル。サレド、コハ必要條件ニハアラズ。

櫻の咲く頃は、年中の好時節なり。

わが始めてかれを知りしとき、かれは京都にありき。

コレニ說キタル

「櫻の咲くことは疾し。」

「成績の優等なるものは特待生となる。」

ナドノ諸例ニテハ、文ノ構成ノ上ヨリイヘバ、ことも、ものガ主語ナレド、ソノアラハサントスル思想ノ上ヨリイヘバ、重要ナル部分ハ、咲く及ビ優等なるトイフ語ニ存スルコト、前ニ本書ノ第一六節ニ就キテ、コノ別記ノ一〇六頁ニ說明シタルガ如シ。サレバ、右ノ例ニテ咲くこと及ビ優等なるものヲ連語ガ主語ヲ成スモノト解スレバ、櫻の及ビ成績のハコレラノ主語ニ屬スル修飾語トナリ、「櫻の咲く」及ビ「成績の優等なる」ヲ各一ツノ句トハ見ルベカラズ。

カヤウニ解スルコト、マタ不可ナラズ。サレド、コハことと及ビものナドイフ或特殊ノ體言ニ形容詞的句ノ屬スル場合ニ限ルコトニテ、カヤウノ場合ニノミ、特殊ノ說明ヲナサンコト、初學者ニハ迷惑ナルベケレバ、便宜ニヨリテ本書所說ノ如ク、「櫻の咲くこと」、「成績の優等なるもの」ヲ一ツノ形容詞的句ト見タルナリ。

副詞的句。　コレニ副詞的句トシテ擧ゲタル例ノウチニテ、

「弟は、おのれ嚮導たらんと眞先に進む。」

ノ「おのれ嚮導たらん」ノ如ク、一ツノ文ヲ助詞と(マタハとて)ニテ承ケテ、コレヲ他語ニ屬セシメテ、句トスルトキ、カヤウノ句ヲ名詞句ト名ヅクルコトアリ。所謂插入文トイフモノモ、コレナリ。サレド、全文ノ上ヨリソノ構成ヲ論ズルニ、コノ名詞句トイフモノ、下ナル助詞トヲ伴ナヒテ、常ニ副詞的修飾語

下　巻

トナレルモノナレバ、本書ハ、文ノ構成ノ上ヨリ、コレヲ副詞的句トナセリ。コレ本書ニテハ句ヲ文ノ構成ノ上ヨリ分類シテ、ソノ形容詞的修飾語トシテ用キラレタルヲ形容詞的句ト名ヅケ、副詞的修飾語トシテ用キラレタルヲ副詞的句トハ形容詞的句ガ、ソノ下ナル體言ヲ失ヒタルモノヲイフト立テタルニ基ヅクモノナリ。世ノ文典ニハ、句ヲ分類スルニ、カヤウニ文ノ構成ノ上ヨリ見ズ、單語トシテノ職分ヨリ見テ、名詞ノ用ヲナス句ヲ名詞句トシ、形容詞ノ用ヲナスモノヲ形容詞句トシ、副詞ノ用ヲナスモノヲ副詞句トスルコトアリ。コノ分類法ト本書ノ採リタル分類法トハ、ソノ著眼點相異ナレバ、カレトコレトヲ混同スベカラズ。

複文。 複文ハ、本書所説ノ如ク、一文中ノ主語ト述語トノ關係ノ重複セルモノナレド、ソノ關係ノ一ツガ、單文ニ見ルガ如ク、全文ノ上ヨリ見タル思想ノ主題タルモノト、コレガ動作作用ヲイフモノトノ間ニ成立チ、他ハ句ノ中ニ起ルヂヤレバ、コノ點ヨリ論ズレバ、普通ニ、單文、複文、重文ト對立セシムレド、複文ハ寧ロ單文ノ一種トモ見ルベキモノナリ。サレド、姑ク世間流布ノ説ニ從ヒテ、本書ノ如ク説キタリ。

句と連語との別。 單文ト複文トハ、文中ニ句ヲ含ムト含マヌトニヨリテ分ルヂヤレバ句ト連語トノ差別ヲ明確ニ知ルコト、必要ナリ。初學者ハ

「人の讀む書」、「童の乘る牛」

ナドノ「人の讀む」、「童の乘る」ノ如キモノヲ句トスルコト、屢アリ。サレバ本書ニコレヲ深切ニ説明シテ、ソノ共ニ句ニハアラザルコトヲ知ラシメタリ。ココニ注意スベキハ、コレラハ客語ヲ省略セルモノニテ、ナホ句トシテ見ルベキモノニアラズヤトノ異論ナリ。サレド、熟〻考フルニ、カヤウノ場合ニハ、ソノ客語タルベキモノ、下ニアレバ、動詞ノ上ニハ、コレヲ採ルコトヲ要セズ、隨ツテ省略シタリト認ムベキ理由ナシ。

「人の(ソレヲ)讀むとき、われはその書を見たり。」

「牛を牽かせて、童の(ソレニ)乘る狀。」

ナドノ「人の讀む」、「童の乘る」トハ、ソノ構成ノ異ナルヲ見ルベシ。卽チコノ例ニテハ、客語ハナケレド、省略セルモノナルコトハ、推知セラルベク、「人の讀む」、「童の乘る」ハ共ニ句ト見ルベキモノナリ。

〔例　題〕

一。雨降りて地固まる。

主部　地（主語）

述部　雨降りて（修飾語句）　固まる（述語）

句　主部　雨（主語）
　　述部　降りて（述語）

二。漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。

主部　漢の高祖の天下を取りしは（主部句）

句　主部　漢の（修飾語）　高祖の（主語）
　　述部　取りし（述語）
　　客部　天下を（客語）

述部　蕭何、張良、韓信が（修飾語）　力なり（述語）

三。はじめに平氏の兵威を摧きしは、義仲が功なり。

主部　はじめに（修飾語）　平氏の（修飾語）　兵威を摧きしは（主語）

述部　義仲が（修飾語）　功なり（述語）

コノ文ヲ解剖スレバ、右ニ示スガ如ク、句ヲ含マズ。サレバ單文ナリ。本書ガコレヲ複文解剖ノ例ニ加ヘタルハ誤ナリ。訂正セラルヽ機會アラバ左ノ複文ニ改ムベシ。今姑クコレヲ存シ、前題ト相對照シテ、「高祖の」ノのト「平氏の」ノのトガ異ナル意ニ用ヰテアルコトヲ知ラシムルノ料トナスベシ。

〔補〕社會風潮の一變するや、破壞の氣風四方に起れり。

主部　破壞の（修飾語）　氣風（主語）

述部　社會風潮の一變するや（修飾語句）　四方に（修飾語）　起れり（述語）

句　主部　社會風潮の（主語）
　　述部　一變するや（述語）

四。風雅の嗜あるものは、おのづから餘裕あり。

文主部　風雅の嗜あるものは（文主句）　（第四七節參見）。

句　主部　風雅の（修飾語）　嗜（主語）
　　述部　あるものは（述部）

主部　餘裕（主語）

述部　おのづから（修飾語）　あり（述語）

五。義經、賴朝の姦計あることを知らず。

主部　義經（主語）
述部　知らず（述語）
客部　賴朝の姦計あることを（客語句）　（第四七節參見）

句
文主部　賴朝の（文主）
主部　姦計（主語）
述部　あることを（述語）

右ノ文ニテ賴朝のハ姦計ノ修飾語ナラヌコトニ注意スベシ。

六。日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならず。

主部　山深き（句）夜の（修飾語）　さま（主語）

句
主部　山（主語）
述部　深き（述語）

述部　日は入りし（句）ほどに（修飾語）　常ならず（述語）

句
主部　日は（主語）
述部　入りし（述語）

七。外客の瀨戸內海を過ぐるもの、風光の明媚なるを見て、世界の遊園の稱の眞に空しからざるを知る。

主部　外客の（修飾語）　瀨戸內海を（修飾語）　過ぐるもの（主語）
述部　見て（述語）
客部　風光の明媚なるを（客語句）

句
主部　風光の（主語）
述部　明媚なるを（述語）

述部　知る（述語）
客部　世界の遊園の稱の眞に空しからざるを（客語句）

句
主部　世界の遊園の（修飾語）　稱の（主語）
述部　眞に（修飾語）　空しからざるを（述語）

コノ文ニテ、「外客の瀨戸內海を過ぐるもの」ノ外客の瀨戸內海を過ぐるガ、句ニアラズシテ、單ニ連語タルニ過ギザルコトニ注意スベシ。コノ「外客の瀨戸內海を過ぐるもの」トイフ一ツノ連語ノ構成ヲ案ズルニ、コハ、「外客、瀨戸內海を過ぐ」トイフ

文ノ變ジテ、下、もの」ヲ形容スルモノニハアラズシテ、ソノ意義ハ「外客デ瀬戸内海ヲ通ルモノ」、更ニ言ヒカフレバ「瀬戸内海ヲ通ル外客」トイフホドノモノナレバ、コレヲ本書ノ第四七節ニ示シタル

「輸出品にて價格の千萬圓を超ゆるもの」

トイフ句トハ、ソノ構成モ意義モ異ナルヲ見ルベシ。前ノ例ニテハ「外客の瀬戸内海を過ぐるもの」ノものガ卽チ上ニ擧ゲタル「外客」ナレド、後ノ例ニテハ「價格の千萬圓を超ゆるもの」ノものハ「價格」ニハアラズ。

八。われ、ことに君を知る深きが故に、君のために悲しむ心、また切なり。

文主部　われ（主語）
主部　君のために（修飾語）悲しむ心（主語）
述部　ことに君を知る深きが（句）故に（修飾語）また（修飾語）切なり（述語）

主部　君を知る（主語）
句
述部　ことに（修飾語）深きが（述語）

九。その一種の道義として、わが國の文明に關係ある、決して少々にあらず。

主部　その一種の道義として、わが國の文明に關係ある（主語）（句）
文主部　その（文主語）
句
主部　關係（主語）
述部　一種の道義として（修飾語）わが國の文明に（修飾語）ある（述語）
述部　決して（修飾語）少々に（修飾語）あらず（述語）

一〇。天業の恢弘せる、今日の如きは、千古に亙りていまだ有らざる所なり。

主部　天業の恢弘せる、今日の如きは（主語）（句）
句
主部　天業の（主語）
述部　恢弘せる（述語）
句
述部　今日の如きは（述語）
述部　千古に亙りて（修飾語）いまだ（修飾語）あらざる所なり（述語）

類題

次の複文を解剖せよ。

【一】風吹けば、木安からず。

【二】舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。
【三】有識の士ありて、その不可なるを說く。
【四】王朝の盛なりし寧樂、平安の都は、まことにわが美術の淵叢なりき。
【五】大丈夫、坐すれば、すべからく孤峯の雲に聳ゆるが如くなるべし。
【六】霜氣の秋に横たはる節來れば、白嶺紅蓼うたゝ人を動かす。
【七】世は、かく憂きを、み吉野の山のあなたにも、かくれがはなきか。
【八】翠華搖々として西に向へば、秋風到る處に野に滿てり。
【九】秋の嵐の吹き荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほ朧なり。
【一〇】新井白石は常に漢文が我が國語の發達を妨げたるを論じて、大いにこれを悲しめり。

第九章　節　重文

重文。　コヽニ同趣ノ文トイヘルハ、對等ノ資格ノアル文ノコトニテ、互ニ從屬關係ノナキモノナリ。重文ハ卽チ對等ノ資格ノアル文ノ聯立シテ作レルモノニテ、所謂聯構文ナリ。

節。節ト句トノ異ナルトコロハ、節ハ獨立スレド、句ハ文ノ他ノ成分ニ附屬セルニアリ。

重文の構成。　重文ヲ構成スルニハ、上ナル節ノ述語タル用言、活用連語ヲ種種ニ變ジテ、下ナル節ニ連結セシムルナリ。コノ上下ノ節ハ共ニ同趣ノモノナレバ、ソノ連結ノ法ハ、同趣ノ用言、活用連語ヲ連結スル法ニ異ナラズ。サレバ、コノ節ニ說ク重文ノ構成ノ法ハ、本書第五節以下九節ニ說キタル同趣ノ用言、活用連語ノ連結ノ法ト異ナルコトナシ。タヾ、カレニテハ單ニ用言、活用連語ノ連結ヲイヒ、コレニテハ節ノ述語トシテノ用言、活用連語ノ連結ヲイフ。

複雜なる構成の文。　コヽニ擧ゲタル例ノウチニテ、

「規模の雄大に、建築の宏壯なること、天下に冠たり。」

ヲ、主部ニ重文ノ句ヲ含メル複文トモ、マタハ二ツノ主部ト一ツノ述部トニテ成レル通常ノ單文トモ、イヅレニモ解セラルヽコト、本書ニ說キタルガ如シ。カクテハ甚ダ惑ヒ易キガ如クナレド、モト文ヲ解剖スルハ、ソノ文ノ構成ヲ尋ネテ、ソノアラハス思想ヲ明確ニ知ルコトヲ目的トスルモノナレバ、コノ目的ダニ達セラルレバ、ソノ方法ハ、法格ヲ破ラヌ限ハ、必ズシモ一定ノ

型ヲ用ヰルコトヲ要セズ。單文、複文、重文ノ別ハ、文アリテ始メテ生ジタルモノニテ、コレラノ別アリテ始メテコノ別ニ從ヒテ文ノ成ルニハアラズ。文法ヲ學ブモノハ、ソノ本末ヲ誤ラザランコトヲ要ス。

〔例題〕

一。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。（重文）

第一の節　主部　故郷は（主語）
　　述部　既に（修飾語）　荒れて（述語）

第二の節　主部　新都は（主語）
　　述部　未だ（修飾語）　成らず（述語）

二。なほ空しき地は多く、造れる家は少し。（重文）

第一の節　主部　空しき（修飾語）　地は（主語）
　　述部　なほ（修飾語）　多く（述語）

第二の節　主部　造れる（修飾語）　家は（主語）
　　述部　少し（述語）

三。その後、世しづまりて、文治の頃、敕撰あり。（重文）

第一の節　主部　世（主語）
　　述部　その後（修飾語）　しづまりて（述語）

第二の節　主部　敕撰（主語）
　　述部　文治の頃（修飾語）　あり（述語）

四。群品おの〳〵時雨の化に霑ひ、萬民皆天日の光を仰ぐ。（重文）

第一の節　主部　群品（主語）
　　述部　おの〳〵（修飾語）　霑ひ（述語）
　　客部　時雨の（修飾語）　化に（客語）

第二の節　主部　萬民（主語）
　　述部　皆（修飾語）　仰ぐ（述語）
　　客部　天日の（修飾語）　光を（客語）

五。平原こゝに盡き、山勢突兀として天を支ふる壁の如く、平原と直角をなして、前方を塞ぐ。（重文）

第一の節　主部　平原（主語）
　　述部　こゝに（修飾語）　盡き（述語）

第二の節
- 主部　山勢（主語）
- 述部　突兀として（修飾語）　天を支ふる（修飾語）　壁の如く（述語）
- 同　平原と（修飾語）　なして（述語）
- 客部　直角を（客語）
- 述部　塞ぐ（述語）
- 客部　前方を（客語）

六。雨風烈しく、道闇くして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えけり。（重文）

第一の節
- 主部　雨風（主語）
- 述部　烈しく（述語）

第二の節
- 主部　道（主語）
- 述部　闇くして（述語）

第三の節
- 主部　敵の（修飾語）　鬨の（修飾語）　聲（主語）
- 述部　こゝかしこに（修飾語）　聞えけり（述語）

七。わが國は有名なる山國にして、登臨を試るべき丘陵、山嶽は、吾等の前に屹立して、選擇を待てり。（重文）

第一の節
- 主部　わが（修飾語）　國は（主語）
- 述部　有名なる（修飾語）　山國にして（述語）

第二の節
- 主部　登臨を試るべき（修飾語）　丘陵（主語）
- 同　山嶽は（主語）
- 述部　吾等の前に（修飾語）　屹立して（述語）
- 同　待てり（述語）
- 客部　選擇を（客語）

八。あらゆる功臣多くほろびしかど、張良は身を全くしたりき。（複文）

主部　張良は（主語）

述部　あらゆる功臣多くほろびしかど（修飾語句）　全くしたりき（述語）

句
- 主部　あらゆる（修飾語）　功臣（主語）
- 述部　多く（修飾語）　ほろびしかど（述語）

客部　身を（客語）

九。蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。（複文）

主部　蝶の花に飛びかひたる（主語句）

句 主部 蝶の（主語）
　 述部 花に（修飾語） 飛びかひたる（述語）

述部 やさしきものの（修飾語） 限なるべし（述語）

一〇。晩暉既に收り盡くして、星光水に落ち、樹木なく岩石なく、たゞ灰の如き微塵砂より成れる兩岸は、摸糊として一線を描きぬ。（重文）

第一の節 主部 晩暉（主語）
　 述部 既に（修飾語） 收り盡くして（述語）

第二の節 主部 星光（主語）
　 述部 水に（修飾語） 落ち（述語）

第三の節 主部 樹木なく（修飾語句） 岩石なく（修飾語句） たゞ灰の如き微塵砂より成れる（修飾語） 兩岸は（主語）

句 主部 樹木（主語）
　 述部 なく（述語）

句 主部 岩石（主語）
　 述部 なく（述語）

述部 摸糊として（修飾語） 描きぬ（述語）
客部 一線を（客語）

類題

次の諸例に就きて、單文と複文と重文との別を立て、さて後に解剖せよ。

【一】 月はます〳〵冱えて、潮はいよ〳〵高し。

【二】 軍將の下知を背くは、命を惜しむに似たり。

【三】 水は深さ增して、底見えず。

【四】 稀に見る家は、門前、草深くして、庭上、露滋し。

【五】 路は山阻に傍うて行けども、さまでは峻しからず。

【六】 山風、袂を拂つて、勁うして、人を倒さんとす。

【七】 攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなこゝに集れり。

【八】 われ、その文眞率にして、しかも神韵ゆたかなるに服せり。

【九】 咲きも殘らず、散りも初めぬ櫻花、嵐なくとも、かくてやはやむべき。

【一〇】 國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階、九に仞かさなり、朝日、朱の玉垣をかゞやかしぬ。

第十章　文の要素の省略及び倒置

文の要素の省略。　文ノ要素ヲ省略スルハ、言外ニソレト推セラルヽ場合ニ限ルモノナレバ、通常、單文ニハ少ク、複文、重文ニハ稍多シ。ソレモ單獨ニ提示シタルモノニハ、例多カラズ。コレ、言外ニ推スルコトヲ得ル便利少キニヨルナリ。本書ガ、文ノ要素ノ省略ヲ、重文ヲ説キタル後ニ論ジタルハ、自然ノ傾向ニ從ヘルモノニテ、例トシテ擧ゲタル文ニハ、故ラニ作リ上ゲタルガ如キモノナシ。

文ハ、要素ヲ缺ケバ、文トシテハ成立セズ。サレド要素ノ省略シタルモノハ、モトヨリ文ナリ。而シテ要素ノ缺ケタルモノナルカ、省略シタルモノナルカヲ知ルハ、文ヲ鑑識スルニ必要ナリ。思フニ文典ニ文ノ要素ノ省略トイフコトヲ說クハ、コノ必要ヨリ出デタルナルベシ。サレバ、文ノ要素ノ省略ハ、文法上ノ重要事項ナレド、文ノ修飾語ハ、缺ケタリトテ、省略セラレタリトテ、文ノ成立ニ交渉ナキガ故ニ、文法トシテハ說明スル限ニアラズト知ルベシ。

客語の省略。　コヽニ擧ゲタル例ノウチニテ

「安倍野の合戰は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋より堰き落されて、
流るゝ兵五百餘人、……」

ノ「堰き落され」モ所相ニテ、ソノ標準ヲイフ語ヲ要スレド、コノ所相ヲアラハセル連語ハ、コノ文ニテハ修飾語トシテ用キラレタレバ、文ヲ解剖スルニ、ソノ標準ヲイフ語ヲ補フヲ要セズ。本章ニテ說クハ、文ノ主要成分ニ限リテノ省略ナルコトニ注意スベシ。

文の要素の倒置。　主眼トスル文ノ要素ヲ特ニ首ニ置キタルガタメニ、修飾語ノ位置ノカハルコトアリ。

歸りなん、いざ。
進めや、進め、諸共に。

カヤウニ修飾語ノ位置ノカハルハ、通常ノ文ニテハ、述語ノ副詞的修飾語ニ殆ド限レルガ如ク、事々シク說クホドノコトニモアラネバトテ、本書ニハ略セリ。

〔例　題〕

一。精神は本(にて)、器械は末なり。

第一の節　主部　精神は（主語）
　　述部　本にて（述語）

第二の節　主部　器械は（主語）
　　述部　末なり（述語）

二。富士山は甲斐と駿河との境にありて、（人に〳〵おのれを）東海第一の名山と稱せらる。

主部　富士山は（主語）
述部　甲斐と駿河との境に（修飾語）　ありて（述語）
同　稱せらる（述語）
客部　人に（客語）
同　おのれを（客語）
同　東海第一の（修飾語）　名山と（客語）

三。連嶺悉く旭光に浴せる時、（われらは）なほ背後に一大黒峯の屹然として立てるを見る。

主部　われらは（主語）
述部　連嶺悉く（主語）　旭光に（客語）　浴せる（述語）　時（修飾語）　見る（述語）
客部　なほ背後に（修飾語）　一大黒峯の（主語）　屹然として（修飾語）　立てるを（客語）　（句）

四。知己なくば、人生は荒野のみ（なり）、荊棘のみなり。

主部　人生は（主語）
述部　知己なくば（修飾語）　（句）　荒野のみなり（述語）
同　荊棘のみなり（述語）

五。（われは）恍惚として立つこと、一時餘（なり）。

文主部　われは（文主）
第十章　文の要素の省略及び倒置

主部　恍惚として（修飾語）立つこと（主語）

述部　一時餘なり（述語）

六、かれに一人の弟あり、（名を）武夫といひ、現に陸軍歩兵少尉たり。

主部　一人の（修飾語）弟（主語）

述部　かれに（修飾語）あり（述語）

同　いひ（述語）

客部　名を（客語）

同　武夫と（客語）

述部　現に（修飾語）陸軍歩兵少尉たり（述語）

七、讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、（兩者は）相率ゐて（身を）沒趣味の裏に投ぜんとす。

第一の節
主部　讀者は（主語）
述部　忘れ（述語）
客部　選擇を（客語）
主部　作者は（主語）
述部　推敲を（客語）
第二の節
客部　忘れ（述語）
主部　兩者は（主語）
述部　相率ゐて（修飾語）沒趣味の裏に（修飾語）投ぜんとす（述語）
第三の節
客部　身を（客語）

八、これを覺醒せんとするには、（われらは）（これを）いかにすべき。

主部　われらは（主語）
述部　これを覺醒せんとするには（修飾語）いかにすべき（述語）
客部　これを（客語）

九、一年を經ざる著作は、（人々）讀むことなかれ。

文主部　一年を經ざる（修飾語）著作は（文主語）
同　人々（文主語）
主部　讀むこと（主語）
述部　なかれ（述語）

コノ文ハ「一年を經ざる著作は」ハ「人々讀むことなかれ」ニ對シテ文主部

ノ位置ニアリ、「人々」ハ「讀むことなかれ」ニ對シテ文主ノ位置ニアリト解スルヲ便ナリトス。

一〇。（われ）思ひきや君の今日あらんとは。

主部　（われ）

述部　君の今日あらんとは（句）修飾語、思ひきや述語

句　文主部　君の文主

　　主部　今日主語

　　述部　あらんとは述語

一一。（人々）問ふをやめよ、この少年の前途の如何（あらん）を。

主部　人々主語

述部　やめよ述語

客部　この少年の前途の如何にあらん（句）を問ふを客語

句　主部　この少年の修飾語　前途の主語

　　述部　如何修飾語　あらんを述語

類題

次の文に省略したる要素を補ひて、これを解剖せよ。

【一】多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。

【二】更に一關あるさま、遙に見えたれど、往きて觀ざりき。

【三】彼等は、得意の時のみ故郷を求めず、失意の時にも求むるなり。

【四】われ死したりとて、佛事、孝養をもすべからず。

【五】海中に國をなせるわが邦人に呑海の氣象なくば、いかで世界に雄を稱するを得ん。

【六】太閤の小田原陣より旋るや、まづ銀杏村に入れり。

【七】故郷に遠ざからざれば、故郷の樂しきを覺えざるなり。

【八】この時、この人の懷、果して如何。

【九】その間、二十餘里ほどと覺ゆ。

【一〇】いかなる國土なりとも、多少、精神上の發達をなしたる以上は、文學を要せざるなし。

第十一章　文の四體　結法

文の四體。 本書ハ、文ヲ平敍體、疑問體、命令體、感動體ヲ分ッニ、コレヲ敍述ノ形式ノ上ヨリ判ズルコトト定メタリ。サレバ内容ニ疑問ノ意アリテモ、命令ノ意アリテモ、マタ感動ノ意アリテモ、ソノ形式ガ本書ニ說キタルガ如クナラザルモノハ、コレラヲ疑問體乃至感動體トハ見ルベカラザルナリ。世ノ文典ニ、

『疑問文とは疑問をあらはす文をいふ。』『疑問又は反語の意を含む樣に書きたる文を疑問體の文といふ。』

『命令文とは、命令禁止をあらはす文をいふ。』『命令の意を示す樣に書きたるものを命令體の文といふ。』

『感歎文とは感歎をあらはす文をいふ。』『感動の意を示すものを、感動體の文といふ。』

ナドト說キ、少シモ形式ノイカナルカヲイハザルハ、稍物足ラヌヤニ思ハル。

コレラノ文典ニ、

「汝のこれを知ることを疑ふ。」「この證明を問ふ。」

「われはこれを汝に命ず。」「通行を禁ず。」

「實に樂しと感ず。」

ナドノ如キ文ヲ皆平敍體ノ文トナセルハ、前ノ解義ニ照ラシテ、惑フトコロナシトセザルナリ。實ニコレラノ文ハ疑問ノ意、命令禁止ノ意、感動ノ意ヲアラハセリ。サレド、疑問體ノ文、命令體ノ文、感動體ノ文ト見ザルハ、コレラノ文典(本書モ)ノ共ニ一致スルトコロナリ。何ガ故ニ然ルカ。他ナシ。コレラハソノ形式ガ所謂疑問體命令體感動體ノ模範文ニ合ハザルニヨルナリ。サレバ、本書ニテハ、文ノ四體ハ專ラ形式ニヨリテ定ムルコトトセリ。

平敍體ノ三樣ノ結法ハ、口語ニハ具ラズ。口語ニテハ、終止形ヲ用キル通常ノ結法ノミ殘リテ、ぞ、なむ、こそニ對スル特殊ノ結法ハ廢レタリ。普通文ニモ、なむヲ用キルコト甚ダ少ク、從ッテソノ結法モ殆ド用ナシ。ぞ及ビこそトコレラニ伴ナフ結法トヲ用キルコトモ、マタアマリ行ハレズ。

疑問體ノ文ヲ用言、活用連語ノ連體形ニテ結ブコト、卽チ疑問ノ意ノ助詞や及ビかノ係トコレニ對スル結トハ、マタ普通文ニ多ク用キラレズ。

本書ニハ係結ノ誤謬ヲ正サシムル例題ヲ載セズ。コレ普通敎育ニハサマデ重要ナルコトニアラザルガ故ナリ。

六　疑問體ノ文ガ、通常ノ疑問ノ意ナルカ、反語トナレル確定ノ意ナルカハ、一概ニ定メ難ク、前後ノ文意ヲ綜合シタル上ニテ、分ル。本書ニ示シタル例ハ、慣用ニヨリテ反語ト見ラルヽモノヲ選ビタルナリ。例ヘバ

「わが少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。」

コレ、疑問ノ意カ、反語トナレル確定ノ意カ、容易ニ決シ難カルベシ。

七　**感動體。**感動ノ助詞か、やハ疑問ノ助詞か、やト紛レ易シ。感動ノ助詞ナルハ、ソノ語ヲ除キテモ、原文ノ意ハ大イニ變動スルコトナケレド、疑問ノ助詞ナルハ、ソノ語ヲ除ケバ、原文ハ疑問ノ意ヲ失ヒテ、一變スベシ。コノ差別ヲヨク思ヒワクベシ。

八　嗚呼、あはれナド、感動詞ハ、文ノ構成ニ關係ナシ。サレバ、解剖スルニモ、文ノ要素及ビ修飾語ノ外ニ立ツ。

〔例　題〕

一。（われらは）何をか英雄といふ。

疑問體ノ單文ニテ、上ニ疑問ノ助詞かラ用キタレバ連體形いふニテ結ビタリ。

二。（汝等）朝敵をほろぼし、君を御代に卽け參らせよ。

命令體ノ單文ニテ、命令形卽け參らせよニテ結ビタリ。

われらは（主語）	主部
いふ（述語）	述部
何をか（客語）	客部
英雄と（客語）	同
汝等（主語）	主部
ほろぼし（述語）	述部
朝敵を（客語）	客部
卽け參らせよ（述語）	述部
君を（客語）	客部
御代に（客語）	同

三。軍人は忠節を盡すを本分とすべし。

平敍體ノ單文ニテ、終止形すべしニテ結ビタリ。（命令ノ意ヲアラハスモノナレド、本書ニテハ、コレヲ形式ノ上ヨリ見テ、平敍體ノ文トス。）

主部　軍人は（主語）
述部　すべし（述語）
客部　忠節を盡すを（客語）
同　本分と（客語）

四。世に仕ふる程の人、たれか獨り故郷に殘り居らむ。

疑問體（反語ノ）ノ單文ニテ、上ニ疑問ノ助詞かヲ用キタレバ、連體形殘り居らむニテ結ビタリ。

文主部　世に仕ふる程の（修飾語）人（文主）
主部　たれか（主語）
述部　獨り（修飾語）故郷に（修飾語）殘り居らむ（述語）

五。口惜しと思ふ人もやあらん。

疑問體ノ單文ニテ、上ニ疑問ノ助詞やヲ用キタレバ、連體形あらんニテ結ビタリ。

主部　口惜しと思ふ（修飾語）人もや（主語）
述部　あらん（述語）

六。これあに臣たる者のしわざならんや。

疑問體（反語ノ）ノ單文ニテ、疑問ノ助詞やニテ結ビタリ。

主部　これ（主語）
述部　あに（修飾語）臣たる者の（修飾語）しわざならんや（述語）

七。この輩また何をか爲すを得んや。

感動體ノ單文ニテ、感動ノ助詞やニテ結ビタリ。（反語ノ疑問體ノ文ニハ上ニ疑問ノ助詞かヲ用キタレバ、コレヲ連體形得んニテ結ビ、更ニコレニ感動ノ助詞やヲ添ヘタルナリ）。

主部　この（修飾語）輩（主語）
述部　また（修飾語）爲すを得んや（述語）
客部　何をか（客語）

爲すを得ハ一ツノ活用連語ト見タリ。（本書中卷第四一節參見）。

八。その死せしとき、誰れかかれを讒せし。

疑問體（反語ノ）ノ複文ニテ、上ニ疑問ノ助詞かヲ用キタレバ、連體形讒せしニテ結ビタリ。

主部　誰れか（主語）
述部　その死せし（句）（主語）ときも（修飾語）讃せし（述語）

主部　その（主語）
述部　死せし（述語）
客部　かれを（客語）

九。風雅の嗜あるものは、いかなる場合にも樂あり。

平敍體ノ複文ニテ、終止形ありニテ結ビタリ。

文主部　風雅の嗜ある（句）（修飾語）ものは（主語）

主部　風雅の（修飾語）嗜（主語）
述部　ある（述語）

主部　樂（主語）
述部　いかなる場合にも（修飾語）あり（述語）

一〇。幾たびも尋ねたれど、何等の答もなかりき。

平敍體ノ單文ニテ、終止形なかりきニテ結ビタリ。（何等トイフ語アルニ惑ヒテ、コレヲ疑問體ノ文ト誤ルコトナカレ）。

主部　幾たびも（修飾語）尋ねたれど（修飾語）なかりき（述語）

述部　何等の（修飾語）答も（主語）

一一。希はくは、（われは）今よりかくの如くにして（修飾語）終へんかな（述語）

感動體ノ單文ニテ、感動ノ助詞かなニテ結ビタリ。

主部　われは（主語）
述部　希はくは（修飾語）今よりかくの如くにして（修飾語）終へんかな（述語）

客部　わが（修飾語）世を（客語）

一二。日々に毀ちて、川も流れあへず、運びくだす家は、（人は）（それを）いづくに造れるにかあらん。

疑問體ノ複文ニテ、上ニ疑問ノ助詞かヲ用キタレバ、連體形あらんニテ結ビタリ。

文主部　日々に毀ちて（修飾語）川も流れあへず（句）運びくだす（修飾語）家は（主語）

句　主部　川も（主語）
　　述部　流れあへず（述語）

主部　人は（主語）

述部　いづくに（修飾語）造れるにかあらん（述語）
客部　それを（客語）

一三。 この世の別こそ、たゞ今ばかりにて候ふとも、（われは）來世には（君と）必ず一所に參り合ふべし。

平敍體ノ複文ニテ、終止形參り合ふべしニテ結ビタリ。句ノ中ニ用キタル助詞こそハコノ結法ニ關係ナシ。

主部　われは（主語）
述部　この世の別こそ　たゞ今ばかりにて候ふとも　（句）（修飾語、來世には（修飾語）必ず（修飾語）一所に（修飾語）參り合ふべし（述語）

句
主部　この世の（修飾語）
述部　たゞ今ばかりにて候ふとも（述語）

客部　君と（客語）

一四。 ひとり燈火の下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とすることそ、こよなう慰むわざなれ。

平敍體ノ單文ニテ、上ニこそヲ用キタレバ已然形なれニテ結ビタリ。

主部　ひとり燈火の下に文をひろげて（修飾語）見ぬ世の（修飾語）人を友とすることそ（主語）
述部　こよなう慰む（修飾語）わざなれ（述語）

一五。 （われは）五月の闇はたゞこの物のためにやあるとまでぞ覺ゆる。

平敍體ノ複文ニテ、上ニぞヲ用キタレバ、連體形覺ゆるニテ結ビタリ。マタ句ノ中ニやヲ用キタレバ、連體形（ある）ニテ結ビタリ。

主部　われは
述部　五月の闇はたゞこの物のためにやあるとまでぞ（句）（修飾語）覺ゆる（述語）

句
主部　五月の（修飾語）闇は（主語）
述部　たゞ（修飾語）この物のためにや（修飾語）あるとまでぞ（述語）

客部　それを（客語）

一六。 張儀の功を成せるは、巨口を張開して、わが舌なほありやといひしところにあり。

平敍體ノ複文ニテ、終止形ありニテ結ビタリ。マタ文中ニアル疑問體ノ句ハ、疑問ノ助詞やニテ結ビタリ。

主部　張儀の功を成せるは（句）主語
句
主部　張儀の　主語
述部　成せるは　述語
客部　功を　客語
述部　巨口を張開してわが舌なほありやと（句）いひしところに　修飾語
句
主部　わが　修飾語　ありや　述語
述部　なほ　修飾語　舌　主語

一七。君の心事を知るもの、ひとり僕のみにあらざらん。

平敍體ノ單文ニテ、終止形あらざらんニテ結ビタリ。

主部　君の　修飾語　心事を　客語　知るもの　主語
述部　ひとり　修飾語　僕のみにあらざらん　述語

一八。（かれは）苔の下に埋れぬ物とては、たゞ徒に名をのみぞ留めし。

平敍體ノ單文ニテ、上ニぞヲ用キタレバ、連體形留めしニテ結ビタリ。

主部　かれは　主語
述部　苔の下に埋れぬ物とては　修飾語　たゞ　修飾語　徒に　修飾語　留めし　述語
客部　名をのみぞ　客語

一九。（一）自然の事もあらば、（汝）（われを）人手に懸くな。

命令體ノ複文ニテ、禁止ノ助詞なニテ結ビタリ。

主部　汝　主語
述部　自然の事もあらば（句）　修飾語、懸くな　述語
句
主部　自然の　修飾語　事も　主語
述部　あらば　述語
客部　われを　客語
同　人手に　客語

（二）汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。

命令體ノ單文ニテ、命令形急ぎ取れニテ結ビタリ。

主部　汝　主語

述部　汝が手にかけて（修飾語）急ぎ取れ（述語）
客部　光頼が（修飾語）首を（客語）はば（述語）

二〇。（一）國も破れ、家も亡びて、その名のみこそ聞ゆれ。

平敍體ノ重文ニテ、終ノ節ニこそヲ用キタレバ、已然形聞ゆれニテ結ビタリ。

第一の節　主部　國も（主語）
　　述部　破れ（述語）
第二の節　主部　家も（主語）
　　述部　亡びて（述語）
第三の節　主部　その（修飾語）名のみこそ（主語）
　　述部　聞ゆれ（述語）

（二）何ものか世には殘らむ。

疑問體（反語ノ）ノ單文ニテ、上ニ疑問ノ助詞かヲ用キタレバ、連體形殘らむニテ結ビタリ。

主部　何ものか（主語）
述部　世には（修飾語）殘らむ（述語）

（三）これ哀に悲しき業ならずや。

疑問體（反語ノ）ノ單文ニテ、疑問ノ助詞やニテ結ビタリ。

主部　これ（主語）
述部　哀に（修飾語）悲しき（修飾語）業ならずや（述語）

類題

次の文の體を辨じ、結法を說明し、さてこれを解剖せよ。

【一】知己とは何ぞや。

【二】鍾子期死して、伯牙絃を絕ち、荊軻死して高漸離また筑を擊たず。

【三】海國の所產たるに相應する文學は、蓋し今日以後に成らんか。

【四】小說は、海としいへば怖るべきもののやうに描けるが多し。

【五】さるにても入道相國の生涯こそ、なか〳〵におもしろかりけれ。

【六】宇治、淀の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見えし。

【七】造化の天工、いづれの人か、筆をふるひ、詞を盡くさん。

【八】月のひかりは、くまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。

【九】 靜におもへば、よろづ過ぎにし方の戀ひしさのみぞせむ方なき。

【一〇】 會ひて談るに、思ひきや舊き友ならんとは。

【一一】 君もし宰相たらば、請ふ、余がためにこれを辨ぜよ。

【一二】 業成り、名遂げたる者、誰れか故郷に歸るを欲せざらん。

【一三】 芙蓉は花の中の王ともいふべく、牡丹は、天地の大にも比ぶべく、運命、われにおいて、浮塵にひとしからん。

【一四】 六尺の眇軀、こゝに至れば、

【一五】 平家は、官位高く、太政大臣、左右の大將にあがり、顯官顯職して、卿相雲客に列なりき。たゞ奢れるばかりにこそありしかども、さすが、君臣上下の誼を篤し、禮節仁義の法を篤うせりき。

普通教育

國語綴字法別記

文學士 新村出 編

第一章 假名

片假名、平假名。 コヽニ示セル平假名ハ、普通ニ行ハルヽモノヽ、ミナリ。コノ他ニ變體假名トイフモノモアリ。敎授ノ便宜ニヨリテソノ最モ廣ク行ハルルモノヲ併セ說クモ、不可ナラザルベシ。

パ、ピ、プ、ペ、ポ。 コレヲ半濁音、次清音ナドイフコト、當ラズ。サレバ、コヽニハ特別ノ名目ヲ立テズ。便宜ノ上ヨリハ行音ナド、イヒテアリヌベシ。

ン。 コレヲ鼻音トモイヘリ。サレド當ラズ。今ハ撥音ト書キテはぬる音ト讀ミナラハセリ。サレド何ヲ撥ヌルカニ就キテハ、末畫ヲ撥ヌルナリトノ說モアレバ、撥ヌル音トイフハ、イカガ。本書『普通敎育國語綴字法』ヲイフ。以下同ジ）ハ故ラニコノ名ヲ避ケタリ。初學者ニハ、コノ假名ヲ「うん」ト呼ビ、假名ニテ「うん」

トイフ音ヲ寫スニ、コノ假名一ツヲ用ヰテ「ン」、「ん」ト書クモノアリ。運動ヲ假名ニテ「ンドウ」ト書クナドハ屢見ルコトナリ。本書本文ニ「この文字は、他の假名の下に限りて用ゐらる」ト書キタルモ、一ツハコレガタメノ用意ナリ。

符號字。 踊字ハ、上ノ假名ガ濁音、ぱ行音ナルトキニハ、濁音ノ標、バ行音ノ標ヲ附クベキモノナリ。サレバ濁音ハ、上ノ音ガ通常ノ五十音ナルト、濁音ナルト、ぱ行音ナルトニ論ナク、スベテ上ノ音ノ五十音圖ニ見エタル音(卽チ所謂清音)ノ繰返サルヽコトヲ示スモノナリ。例ヘバ

うばゝず(奪はず)。　くまざゝ(熊笹)。

コノ例ノ上ナル踊字ハはヲ代表セルモノニテ、ばヲ代表セルモノニハアラズ。マタ下ナル踊字ハさヲ代表セルモノニテ、ざヲ代表セルモノニハアラズ。サレバ、上ナル假名ガ濁音、ぱ行音ナラザルニ、下ナル假名ガ濁音、ぱ行音ナルトキニハ、踊字ニ濁音ノ標、ぱ行音ノ標ヲ附クベキナリ。本書ニ示セル

カヾミ(鏡)。　すゞり(硯)。　ほの〴〵と

ナド「たんぽゝ。」(蒲公英)ナドモ、コノ例ナリ。要スルニ踊字ハ使用上ノ約束甚ダ確實ナラザルガ故ニ、誤解ノ虞アル場合ニハ用ヰザルヲヨシトス。

マタ踊字ハ、他ノ語ニ亘ルコトヲ避クベシ。「こととす」、「思はば」、「見るものの心」ナドノ如シ。マタ踊字ハ一行ノ首ニ用ヰルヲ避クベシ。

長音符ハ、文字ヲ横ニ書クトキニモ、縱ニ引クベキモノナリ。通常、縱ニ書クトキニハ「ー」ヲ用ヰ、横ニ書クトキニハ「ヨーロッパ」ナドトヤウニ、横ニ引ケドモ、カクテハ一定シタル形ヲ失フコトトナリ、二樣ノ符ヲ設クルニ當リテ、穩ナラズ。

〔例題〕

一。五十音圖四十七、濁音假名二十、バ、ビ、ブ、ベ、ボ及ビン、合計七十三アリ。

二。

い	ア行イ列。	う	ア行ウ列。	え	ア行エ列。
ひ	ハ行イ列。	ふ	ハ行ウ列。	へ	ハ行エ列。
ゐ	ワ行イ列。	ゆ	ヤ行ウ列。	ゑ	ワ行エ列。
お	ア行オ列。				
ほ	ハ行オ列。				
を	ワ行オ列。				

コノ題ニテハ五十音圖中ノ相紛ルヽ音ヲ識別セシムルガ趣意ナリ。

三。じ‖ぢ‖ず‖づ。

コノ題ニテハ濁音假名中ノ相紛ルヽ音ヲ知ラシムルガ趣意ナリ。

四。日本、いぎりす、ふらんす、どいつ、ろしあ、あめりか合衆國ハ世界ノ六大強國ナリ。

コノ類ノ題ハ、便宜ニ讀本ソノ他ノ教科書ヨリ類例ヲ求メテ、成ルベク多ク課スベシ。マタ意味モナキニ片假名ト平假名トヲ混ゼザルヤウニ注意セシムベシ。

五。きら〳〵とかゞやく玉をいつゝづゝ組みあはせてひとり〳〵に指ししめせり。

前ニ説キタルガ如ク、別ノ語ニ亙ル「づゝ」「指ししめせり」ノづ‖及ビし‖ニハ踊字ヲ用キヌガヨキコト、マタ「かゞやく」「づゝ」「ひとり〳〵」ノゞ‖ニモ用方ニ就キテハ、特ニ注意セシムベシ。

第二章　漢字

楷書、行書、草書。字體ニハ楷行、草ノ他ニ隷、篆ナド種々アレド、通常、筆記ニ用キルハ、楷、行、草ノ三體ナリ。序ニイフ、本書ノ印刷ニ用キタルハ、明朝體トイフモノニテ、前々行ノ首ニ用キタルガ如キ肉太キモノハ、ごちっく體トイフモノナリ。

部、畫。漢字ノ數ハ、康熙字典ニ收メタルモノ、四萬八千餘アリ。サレド盡ク世間ニ用キラレタルニハアラズ。カクノ如キ多數ノ漢字ヲ類別スルニ、部ヲ分チ、畫ヲ數フルハ、ソノ簡便ナルモノノ一ツニシテ、コレニヨリテ、マタソノ文字ノ性質ノ概略ヲ知ルコトヲ得ルコト多シ。卽チ人ニ屬スル文字ニハ人偏（ニンベン）アリ、心ニ屬スル文字ニハ立心偏（リッシンベン）アリ、刀ニ屬スル文字ニハ立刀旁（リッタウツクリ）アリ、竹ニ屬スル文字ニハ竹冠（タケカンムリ）アルナドコレナリ。偏、旁、冠ノ他ニ脚トイフモノアリ、之繞（シンニウ）、走繞、麥繞、連火ナド、コレニ屬ス。開‖閉‖閨‖閣‖ナドノ門構（カマヘ）、國‖園‖圓‖ナドノ國構ハ冠ノ特稱ナリ。コヽニ注意スベキハ、今ハ人冠ノ文字ニテ、人偏ノ文字ニアラズ。分‖ハ立刀旁ノ文字ナレド、刀脚ノ文字ナルナドノコトニテ、人部ニ屬スル文字ガ必ズシモ人偏ノ文字ニ限ラザルコトナドヲ心得オカザルベカラズ。サレバ、一ツノ漢字ヲ見テ、直ニソノ何部ニ屬スルカヲ察スルコトヲ得ザルモノ少カラズ。部ノ數ハ二百十四アリ。

楷書ヲ書クトキノ一筆ヲ畫トイフコト、談ハ容易ナレド、畫ノ數ヘ方ハ、甚ダ煩ハシク、字典中ノ推定ノ某畫ノ部ニ、所要ノ文字ノ見當ラヌコト、屢アリ。特ニ初學者ハ刀ヲ三畫トスルコトナド、稀ナラズ。

漢字ノ索引ノ不便ナルハ、ソノ何部ニ屬スル文字ナルカノ直ニ識別シ難キト、ソノ幾畫ナルカノ確ニ定メ難キトニアリ。近頃出デタル二三ノ字書ニハ何部トイフコトニ依ラズ、直ニ專ラ畫ヲ數ヘテ索引トセルモノアリ。カクノ如クナレバ、部屬ニ迷フ一難ハ除カレタレド、畫數多クナリテ、一ツ一ツ數フルニ甚ダ面倒ナリ。

三

字音、字訓。 字音ニ、漢音、呉音ノ他ニ、行燈(アンドン)、杏子(アンズ)ナドノ唐音、上海(シアンハイ)、牛莊(ニューチアン)ナドノ支那音ナドアレド、廣クワガ邦ニ行ハルヽハ、漢音ト呉音トナリ。コノ二音ノ由來ハ、コヽニ說クベキ限ニアラズ。マタ、イカナルヲ漢音トイヒ、イカナルヲ呉音トイフコト、例ニツキテ一ツ一ツ說クニアラネバ、ソノ要領ヲ得シムルコト難シ。サレバ、本書ニハコノ區別ヲ示スコトヲ避ケ、漢音、呉音ノ名目ヲモワザト揭ゲズ。文字ニヨリテハ、必ズシモ二樣ノ音ヲ具ヘザルニ、カクノ如キ名稱ヲ授ケンコト、畢竟、益ニカルベクヤ。

近來、漢字ニ西洋語ノ訓ヲ附シテ、

硝子(ガラス)、　麥酒(ビール)、　燐寸(マッチ)、　喞筒(ポンプ)

ナド、イフコトアリ。コレ、マタ一種ノ字訓ト見ルベキモノナリ。

ワガ邦ニテ漢字ニ倣ヒテ作リタル文字アリ。左ニソノ數例ヲ擧グベシ。

働(はたらく)。　峠(たうげ)。　榊(さかき)。　畑(はた)。

込(こむ)。　辻(つじ)。　鰯(いわし)。　鴉(にほ)。

コレラハ、訓アレド、音ナキコト、固ヨリソノ所ナリ。マタ、漢字ノ原義ニハアラヌ一種ノ義ヲワガ邦ニテ定メテ用ヰルモノアリ。

掟(おきて原義ハ「揮ひ張る」)。　椿(つばき原義ハ樗ニ似タル木)。　扠(さて原義ハ「挾み取る」)。

沖(おき原義ハ「深し」)。　萩(はぎ原義ハ「よもぎ」)。　咄(はなし原義ハ「呵々」)。

マタ、ワガ邦ニテ新ニ作ルト同ジキ趣意ニテ、在來ノ漢字ニ新シキ意義ヲ有タセタルモノアリ、新シク作リタルモノアリ。

哩(マイル)。　呎(フイート)。　吋(インチ)。　碼(ヤード)。　米(メートル)。　糎(センチメートル)。　粍(ミリメートル)。　瓩(キログラム)。　噸(トン)。

磅(ポンド)。　弗(ドル)。

コレラニハ、固ヨリ字音トイフベキモノナシ。

〔例　題〕

一。家‖宀部、十畫。　後‖彳部、十畫。　庭‖广部、十畫。
松‖木部、八畫。　櫻‖木部、廿一畫。　植‖木部、十二畫。
空‖穴部、八畫。　晴‖日部、十二畫。　遠‖辶部、十四畫。
波‖水部、八畫。　間‖門部、十二畫。　鯨‖魚部、十九畫。
潮‖水部、十五畫。　吹‖口部、七畫　見‖見部、七畫。

コヽニ示セル畫數ハ、ソノ文字全體ノ畫數ナレバ、字典ニ就キテ索ムルトキニハ、ソノ部首(部ノ名)ノ畫數ヲ除キタル畫ニヨルベシ。例ヘバ家ヲ索ムルニハ宀部ノ七畫ヲ見ルベキガ如シ。

偏冠旁脚ニ特別ノ名稱アルモノハ、便宜ニ知ラシメオクベシ。ウ冠(宀)行人偏(彳)麻垂(广)之繞(辶)散水偏(氵)ナド、コノ例ニ就キテ說キテモヨシ。

二。戸‖コ、と。　矢‖シ、や。　野‖ヤ、の。　羽‖ウ、は。
世‖セイ、よ。　身‖シン、み。　田‖デン、た。　市‖シ、いち。

コヽニ示セル片假名ナルハ字音ニテ、平假名ナルハ字訓ナリ。字音ト字訓トハ、一音ノモノニテハ混同スルコト少カラズ。

コノ章ニ說クハ、音ノ變轉ノ中ニテ、最モ類例ノ多ク、且通常、言語ヲ綴ルニ必要ナル事項ノミナリ。

連濁。 本書ニ說キタルモノノ他ニ、連濁トイフ名ノ下ニハ收メ難ケレド、

つき(突)はる(張)　つつばる、　りふ(立)は(派)　りつぱ、
にち(日)ほん(本)　につぽん

ナドハ行音ガば行音ニ變ズルコトモアリ。

〔例　題〕

一。雛形‖ヒナガタ、ひながた。　品品‖シナジナ、しなじな。
葭簀‖ヨシズ、よしず。　鼻血‖ハナヂ、はなぢ。
三日月‖ミカヅキ、みかづき。

コノ題ハ連濁ヲ知ラシメントテナリ。連濁ニテ特ニ注意スベキハ、連濁ノタメニ、下ノ假名ガじ‖ぢ‖ず‖づトナル場合ニテ、コノ相紛ルヽ假名ヲ連濁ノ知識ニヨリテ遣ヒ分ケシムベシ。

第三章　音の變轉

二。書いて。　請うて。　強うす。　謹んて。　知つて。

三。つゞいて(「つぎて」ノい音便)。　續いて(「續きて」ノい音便)。

久しうす(「久しくす」ノう音便)。

呼んて(「呼びて」ノん音便)。　爭うて(「爭ひて」ノう音便)。

四。「ツイタテ」ハ「つきたて」ノい音便、「ヤイバ」ハ「やきば」ノい音便、「オトウト」ハ「おとひと」ノう音便、「アキンド」ハ「あきひと」ノん音便及ビ連濁、「キツテ」ハ「きりて」ノ促音便ナリ。

五。「カンザシ」ハ「かみさし」ノん音便及ビ連濁ナリ。「かみかき」ノ「かみ」ハ音便ニテ「カウ」トナリ、「かき」ハい音便ニテ「かい」トナリ、コノ「かい」ハ連濁ニヨリテ「がい」トナル。サレバ「カウガイ」ト書クベキナリ。

類題

【一】次の漢字の讀方を片假名と平假名とにて書け。

荷車。　山櫻。　小島。　討死。　垢染む。　物好き。

堅炭。　手近。　日附。　常常。　横綱。　湯殿。

人質。　信心。　酢漬。

【二】次の語を音便によりて書きかへよ。

聞きて。　沿ひて。　厚くす。　飲みて。　切りて。

騒ぎて。　買ひて。　辱くす。　進みて。　賣りたる。

コノウチノ「買ひて」ハ地方ニヨリテ「買うて」ト「買つて」トノヤウニ音便ヲ異ニスルコトヲ注意スベシ。

【三】次の語の書きあやまりを正せ。

急ひて。　開ゐて。　強ふす。　思ふて。　勇むて。

【四】假名にて「埼玉」を「サイタマ」、「朔(月立)」を「ツイタチ」、「妹」を「イモウト」、「笠(ハキ)」ヲ「ハウキ」と書くは、何故か。

【五】「神戸」を「カンベ」または「コウベ」といふは何故か。またこれを「コウベ」といふときの假名は何と書くべきか。「上野(カミツケ)」を「コウズケ」といふは何故か。このときの假名は、いかに書くべきか。

第四章　國語假名遣

一　い‖ゐ‖ひ

〔例題〕

一。ゐなかに歸つてゐた友からいま手紙がとゞいた。
二。あたひはやすくないが、品がよろしい。
三。假名を用ゐて、かひとかいとを書きわけよ。
四。東鄕大將は聯合艦隊を率ゐて大いにロシアの海軍を破り、敵國をしてたゝかひを思ひ止らせたり。
五。長いきしたるかひありて、ありがたき御代にあひたりと、老いたる人はちひさき兒らにいひたり。

類題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】池の中に蜥蜴が泳いでゐる。
【二】覺の乞食は乾の方へ立ち去りたり。
【三】今井と石橋と三人で、いつか伊勢にまいつたことがある。
【四】從弟は願かないて勇ましく世界の旅に出で立ちたり。
【五】兩船相近よりて、その間一町ばかりとなれり。

二　う‖ふ

〔例題〕

一。父に請うて東京に上らうと思ふ。
二。「さうらふ」は「さぶらふ」の音便、「まうす」は「まをす」の音便なり。
三。同情厚うして、飢うるものには食を與へたり。
四。いろ〳〵のくさばなの美しう咲いたるそのふのまんなかに、一本の月桂樹を植う。（「草花」ハ連濁ヲ知ラシメンガタメ、「眞中」ハンノ用方ヲ試ミンガタメニ、出セルナリ）。

類題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】「角力」は「すまひ」の音便、「向」は「むかひ」の音便なり。
【二】蟻は爭ふて蜜を吸ふ。

三　ゑ　ゐ　へ

〔例　題〕

一。いへのまへの梅のこずゑにうぐひすが來て鳴いてゐる。
二。ゆふかた、かへると、一封の手紙がつくゑのうへに載せてあつた
三。傘をつゑについて、いけのほとりにいこへる旅人あり。
四。劇しき突撃に堪へかねて、敵軍つひにつひえ走れり。
五。産物殖え、事業興りて、國富み榮え、もとゐ固くなれり。
六。そろひのあゐのてぬぐひ、くれなゐの襷、あちこちに見えて、のどかなるたうゑのうたごゑ絶えん〳〵に聞え渡れり。

類　題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】火が消へたのか、煙が見ゑなくなつた。
【二】樹の植替には、枝を切りこむ。
【三】かれは何故にか行くゑを告げず、立ち出てたり。
【四】この川は村の中央を東え流れて、末は海に入る。

をの假名を用ゐる語。

認メテ本書ニ載セザルモノノウチニ、左ノ數語アリ。

(一)首にを‖と書くべきもの。
▲をかづき(廻風)。　▲をしかは(章)。

(二)中にを‖と書くべきもの。
▲たを‖やかに。

(三)尾にを‖と書くべきもの。
▲やもを‖(蘇夫)。

〔例　題〕

一。をとつひ、をばはをひをつれて宮にまゐつた。
二。なほをり〳〵お手紙下されたく候。
三。子の行くすゑのさかえをおもふおやごころほど、嬉しきはなし。
四。たらひの中のうをはたひとてひとかつをとえびとなり。
五。をしはをとめとつがひ‖離れずおよぎをり。

六。友は別ををしみてとほくおくり來れり。
七。あをき衣著たるとをあまりのをとめ、おもしろくをどる。
八。おいたる人はやをら立ち上りて、路ををしへたり。
九。おほきなる方のをとこはあをむけにたふれたり。
一〇。德ををさめて、世の鑑とあふがるゝ人となれ。

類題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】帶の表には葵の模樣があつた。
【二】時候がおひ〳〵暖くなつて、町を通る人が多くなつた。
【三】おりしも風起りしかば、火は忽ち四方へ燃へ廣がれり。
【四】敵軍の勢遂に衰へ、かなたの岡を越へて退却せり。
【五】女は操の正しきを貴しとす。
【六】今はおとなになりたれど、幼顏に見をぼへあり。
【七】機織る筬の音おちこちに聞えて、田舍の春はのどかなり。
【八】この兒幼けれど、をゝしければ、名ある壯士となりて功を立つべし。

五　はゐ

〔例題〕

一。坂を越えて、をがはに沿うて右へまはれ。
二。うはさがつたはつて、ねあはす人らは、にはかにあわてさわいだ。
三。あひかはらずいそがはしく暮しをり候。
四。「さいはひ」は「さきはひ」の音便なり。
五。うるはしき御けしきををがみ奉りて、感きはまりて泣けり。
六。われもそのくはだてを贊成して、發起人にくはゝれり。
七。吹く風ほのほをあほって、火のいきほひ少しもおとろへず。
八。かたはらにすわれる人よりくはしくいはれを聞けり。

類題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】心に思うことがあれば、それが顏色にあらわれる。
【二】辯士はかわる〳〵立つて、聲爽に反對說を述べた。
【三】親は老先長き子の行末を祝ふ。

【四】栗と泡との假名を遣ひわけよ。

【五】岡澤君と井上君とは轡をならべて勝を爭えり。

【六】女は皺のよれる指に金の指輪を二つまではめ居たり。

六　じ　ぢ

じの假名を用ゐる語。　じノ假名ヲ川キル語ニテ、アマリ多ク川キヌモノト認メテ、本書ニ載セザルモノノ中ニ、左ノ數語アリ。

(二)中にじと書くべきもの。

▲あじか(笹)。　▲めひじは(鳥唐)。　▲をひじは。

▲おのがじし(各自)。　▲しじら(縮)。　▲たじろく(辟易)。

▲まじろく(瞬)。　▲みじろく(身動)。

(三)尾にじと書くべきもの。

▲むらじ(連)。　▲こじ(掘)。

▲うなじ(項)。

〔例　題〕

一。つゝじ、ふぢまさかりにて、公園のにぎはひいはん方なし。

二。雨はじめて霽れて、雲のあひだにはにじの橋高く懸れり。

三。にはのはじももみぢして、秋知りがほなるもをかし。

四。おびにはみじかく、襷には長しといふことわざあり。

五。まじはるには良き友をえらび、をはりを全うすべし。

六。あるじはぢを知れるをとこにて、好んでよわきを扶け、強きをくじき、その名早くあらはれたり。

七。心こゝにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞えず、食へどもあぢはひを知らず。

〔類　題〕

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】桶の中には蜆蛤などの貝がいれてある。

【二】紫陽花は花の色が幾通りにもかわる。

【三】御厚情辱く存ぢ奉り候。

【四】伯父は獵にゆきて雉三羽を獲てかへれり。

【五】鍛冶屋は誤りて肱を折りたり。

【六】三すじめの四つ辻の角に幼馴染の友の家あり。

七　ず　づ

ずの假名を用ゐる語。　ずノ假名ヲ用ヰル語ニテ、アマリ多ク用ヰヌモノト認メテ本書ニ載セザルモノノウチニ、左ノ數語アリ。

(一)首にずと書くべきもの。

▲ずみ(炳)。

(二)尾にずと書くべきもの。

▲ねず(杜松)。

▲こず(掬)。　コノ語ハ語尾ヲじずずるずれニ轉ズ。

〔例　題〕

一。くずとくづとのかなづかひを誤るな。

二。この頃の天氣つゞきにて、すゞりのみづ、かわきはてたり。

三。をり〳〵いづこよりともなく、ふえ、つゞみのこゑ聞ゆ。

四。をぢはみづからをのをたづさへ來て、われにさづけたまへり。

五。いはにくづるゝ浪のおとのみ高うして、夜はしづかに更けわたれり。

類　題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】銀行は預つてある金に利子を添えてかえした。

【二】天井に鼠のさわぐ聲が、夜どうし絶へない。

【三】榎の梢に鵙の鳴くが聞へぬ。

【四】蛙を餌として鮹を釣る男あり。

【五】盃の數漸く重りて、人々醉ひ仆れんばかりなり。

八　ア列の假名　エ列の假名　オ列の假名

ア列の假名を用ゐるべき語。　コレニ屬スベキ語ノ例ヲ次ニ示ス。

▲あふぎ(扇)。　▲かうぢ(麹)。　▲かうむる(被)。

▲たゞふとしたふとぶ(貴)。　▲はうき(箒)。　▲はうむる(葬)。

コレラニハ語源ヲ考ヘテ音便トシテ假名遣ヲ判ゼラルヽモノ多ケレド、ナホコヽノ所説ノ方簡易ナルベシ。

〔例　題〕

一。復習が濟んだならば、なへを植ゑに行きませう。

二。かはせを組まうとおもうて、おもてどほりの郵便局へいつた。

三。まづてうづつかひて皇居の方をふしをがむ。
「てうづ」ハ「てみづ」ノう音便ナルコトヲ知ラシムベシ。
四。にはにはうきめ正しく、客をむかふるまうけ全くとゝのふ。
五。きのふ、けふとおくるうちに、はや梅のわか葉窓をおほふ。
六。近くつかふる人々、休みたまふ君をあふぎにてあふぐ。
七。たふとき官に昇れるあるじをいはふ人々、門前に行きかふ。
八。先生の德をしたふもの、とほく跡をおうて來り、業ををふるまて、就いて學ばんことをねがふ。

類題

次の文章の假名遣の誤を正し、且傍線のある漢字を假名に書きかへよ。

【一】夜に入りて手習うに、睡の催して堪ゑ難し。
【二】衣脱ぎ棄てて、まづ一桶の水をかぶりぬ。
【三】十日の内に淨寫して參らすべしと命ぜられぬ。
【四】われ衣食の費を厭ふにはあらねど、何處えなりとも遊び給へ。
【五】遊觀所はその數甚だおうく、一つ〳〵擧ぐるに遑あらず。
【六】わが全隊の砲火は、ます〳〵著しき效果をあらわせり。
【七】風やゝ和ぎたれど、浪なを靜まらず。
【八】世は何時か秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃へ出て、たゞ一株、前の家主の植え遺したる黄菊も咲きいず。

第五章　字音假名遣

相紛るゝ假名。 本書ニ擧ゲタルハ、普通ニ用ヰル字音ノ假名ナリ。サレバ例ヘバおふ、わふモあうト同ジク發音スレド、コノ假名ヲ用ヰルベキ字音ノ漢字ナク、マタ法ハ呉音ニテハほふナレド、漢音ト呉音トヲ別チテ假名遣ヲ異ニスルコトヲ望ムハ、コノ程度ニテハ難キコトナレバ、故ラニ省ケリ。ねうモねふモにようモにやうモ相紛ル、假名ナレド、普通ニ用ヰル漢字ノ字音ニテハ饒、鐃及ビ尿、溺ガねうノ假名遣ナル外ニハ、他ニ紛ルベキモノナシ。ソノ饒、鐃ハ堯ガげう、燒ガせうナルヨリ推シテねうナルコト、知ルニ難カラズ。マタ女房ナドノにようばうノにようハによノう音便ナレバ、イヅコニテモにようト讀ムニハアラズ。要スルニ、コノ一節ハ大略ヲイヘルニ過ギズ。

本書ニ以下七節ニ擧ゲタル通則七條ニハ、上欄ニソノ一斑ヲ示セルガ如ク、例外ノアルモノアリ。マタ應用ノ甚ダ複雜ナルモノアリ。サレバコノ七條ヲ學ビタルノミノモノニ、字音假名遣ノ使用ヲ試ミルベキ範圍ハ、極メテ狹シ。コノ理由ニヨリテ本書ニハ字音假名遣ノ章ニハ例題ヲ載セズ。

通則第一。 コノ節ニ示セル字音ノ例ノウチニテ、特ニ繪ノ假名遣ヲ記憶セシムベシ。コノ字音ハ殆ド字訓ノ如クニ普通ニ用ヰルモノナレバ、ソノ𤲿ナルコトニ注意セシムルコト必要ナリ。畫モ同ジク𤲿ナリ。

通則第三。 コノ節ニ示セル字音ノ例ノウチニテハ、蝶ノ假名ノてふナルコトヲ記憶セシムベシ。コノ語ハ假名ニテ書クコト少カラザレバナリ。

通則第五。 コヽニ「一つの漢字に二樣の音ありて」トイヘル、ソノ一ツノ音ハ所謂漢音ニテ、一ツノ音ハ所謂呉音ナリ。本書ニテハ、漢音ト呉音トノ別ヲ說カザレバ、コヽニハ、カヤウニイヘルナリ。コレニテ事足ルベシ。

次ノ通則第六、通則第七ニイヘルモ、コレト同ジ。

附錄

教科書ノ檢定又ハ編纂ニ關シ文法上許容スベキ事項

明治三十八年十二月二日
文部省告示第五十八號

教科書ノ檢定又ハ編纂ニ關シ文法上許容スベキ事項ヲ定ムルコト左ノ如シ

文法上許容スベキ事項

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭、火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛テ見ザリシ

四　「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス
周旋サス
寢買サス

六「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル
評サル
解釋サル

七「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ
佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
攻撃開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九 てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記
學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ
面白キヤ
父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一 てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及、受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ